

第34回
関東地方ダム等管理フォローアップ委員会

滝沢ダム 定期報告書の概要

令和7年12月8日
独立行政法人 水資源機構



滝沢ダム定期報告書の作成について

- この定期報告書は、「ダム等の管理に係るフォローアップ制度（平成14年7月）」に基づき5年毎に作成するものである。
- 滝沢ダムの定期報告書については、平成27年度に1回目（H27.12.18 第24回関東地方ダム等管理フォローアップ委員会（以下、「フォローアップ委員会」という）にて審議）を作成しており、今回は3回目の定期報告書作成となる。

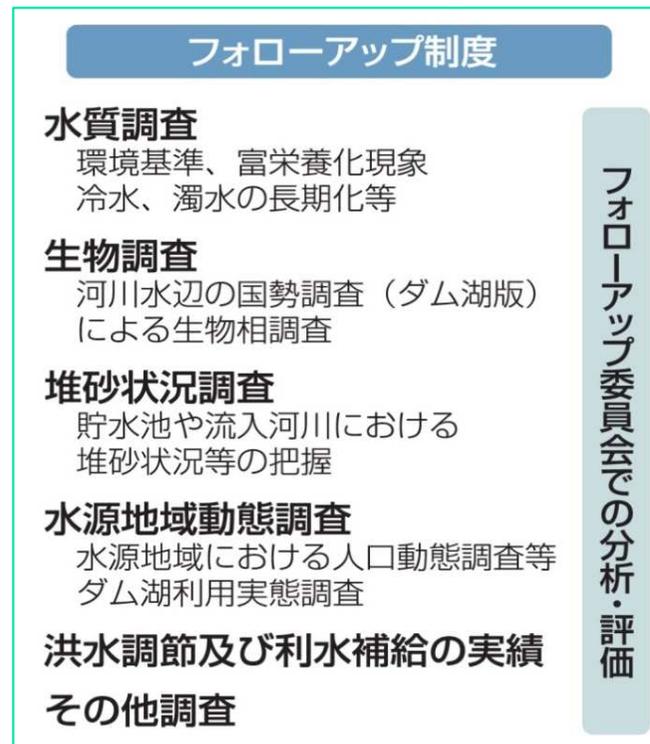
● これまでの経緯

- 平成20年度 管理開始
- 平成22年度 滝沢ダムモニタリング委員会（最終）
- 平成27年度 フォローアップ制度に基づく定期報告（第1回）
- 令和2年度 フォローアップ制度に基づく定期報告（第2回）
- 令和7年度 フォローアップ制度に基づく定期報告（第3回）

【評価対象期間 令和2年～令和6年】

ダム等管理フォローアップ制度の概要

- ダム等管理フォローアップ制度は、管理段階のダム等について、一層適切な管理が行われることを目的としている。
- ダム等は管理状況を適切に把握し、これを分析することが重要である。
- このため、管理段階における洪水調節実績、環境への影響等の調査を行い、この調査結果の分析を客観的、科学的に行う。
- 調査・分析にあたっては、各ダム等は5年に1度、フォローアップ委員会において意見をいただく。
- より良いダム管理にむけた改善提案と市民への情報提供を目的に、5年ごとに定期報告書を作成、公表する。



1. 事業の概要	・ ・ ・ ・ ・	5
2. 洪水調節	・ ・ ・ ・ ・	10
3. 利水補給	・ ・ ・ ・ ・	23
4. 堆砂	・ ・ ・ ・ ・	35
5. 水質	・ ・ ・ ・ ・	40
6. 生物	・ ・ ・ ・ ・	64
7. 水源地域動態	・ ・ ・ ・ ・	85

荒川水系における施設の完成状況

年	計画	ダム等	洪水	渇水
昭和22年			S22.9洪水(カスリーン台風)	
昭和33年			S33.9洪水(狩野川台風)	
昭和36年		二瀬ダム S36.12完成		
昭和39年		玉淀ダム S39.6完成		
昭和40年	荒川水系工事実施基本計画	秋ヶ瀬取水堰 S40.8完成		
昭和41年			S41.6洪水(台風4号)	
昭和42年		武蔵水路 S42.3完成		
昭和48年	荒川水系工事実施基本計画改定			
昭和49年			S49.9洪水(台風16号)	
昭和56年			S56.8洪水(台風16号)	
昭和57年			S57.9洪水(台風18号)	
昭和58年				S58渇水(取水制限4日、最大4%)
昭和59年				S59渇水(取水制限65日、最大30%)
昭和60年				S60渇水(取水制限38日、最大30%)
昭和61年		有間ダム S61.3完成		
昭和62年				S62渇水(取水制限55日、最大29%)
昭和63年				S63渇水(取水制限2日、最大15%)
平成2年				H2渇水(取水制限18日、最大29%)
平成3年			H3.8洪水(台風12号)	H3渇水(取水制限5日、最大8%)
平成4年				H4渇水(取水制限17日、最大15%)
平成5年				H5渇水(取水制限6日、最大15%)
平成6年				H6渇水(取水制限34日、最大29%)
平成7年				H7渇水(取水制限127日、最大15%)
平成8年				H8渇水(取水制限48日、最大15%)
平成9年		荒川貯水池 H9.3完成		H9渇水(取水制限21日、最大8%)
平成11年		浦山ダム H11.3完成	H11.8洪水(熱帯低気圧)	
平成13年			H13.9洪水(台風15号)	
平成15年		合角ダム H15.3完成 六堰頭首工 H15.4完成		
平成16年		荒川第一調節池 H16.3完成		
平成19年	荒川水系河川整備基本方針		H19.9洪水(台風9号)	
平成20年		滝沢ダム H20.3管理開始(一部)		
平成23年		滝沢ダム H23.4管理開始(全部)		
平成28年	荒川水系河川整備計画	武蔵水路 H28.3改築		
平成29年				H29渇水(取水制限52日、最大20%)
令和元年			R1.10洪水(台風19号)	
令和2年	荒川水系河川整備計画(変更)			
令和3年				
令和4年				
令和5年				
令和6年				
令和7年	荒川水系河川整備基本方針(変更)			

荒川流域の概要

- 荒川は、その源を秩父山地の甲武信ヶ岳(標高2,475m)に発し、滝川を合流し、その後中津川、浦山川等の支川を集めて秩父盆地を北流する。寄居に至って扇状地をなす埼玉県中央部の平野を貫流し、東京都北区志茂で隅田川を分派し、東京湾に注いでいる。
- 1都1県に跨り、幹川流路延長173km、流域面積約2,940km²である。



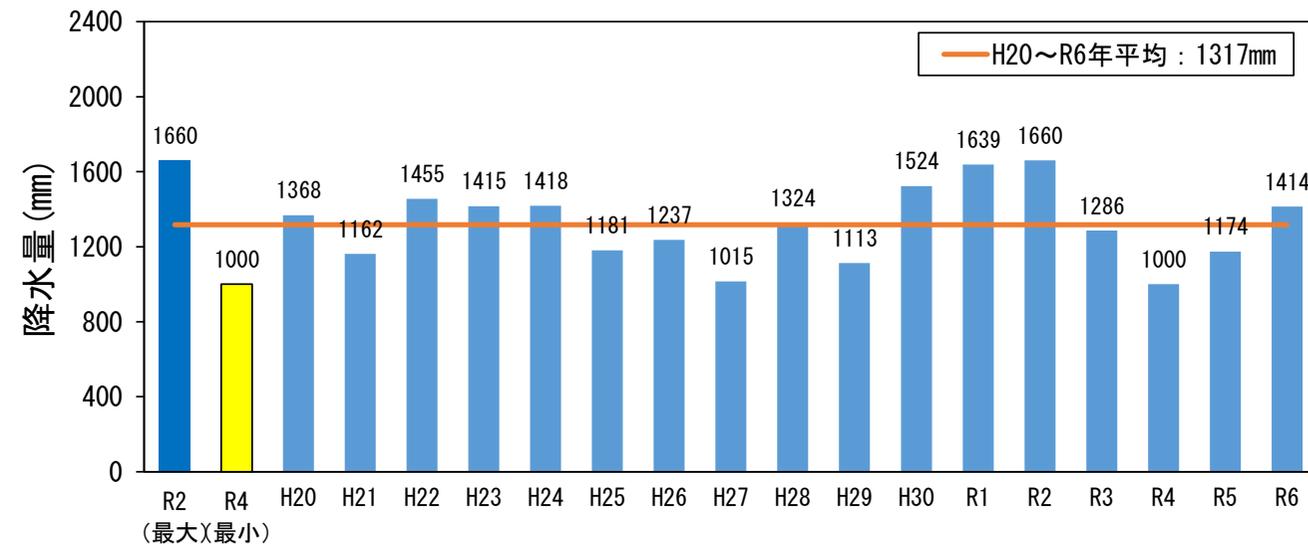
荒川水系の主な水資源開発施設

河川の諸元	
水系名	荒川水系
河川名	荒川
幹川流路延長	173km
流域面積	2,940km ²
流域内人口 (河川現況調査H22)	1,020万人
流域都県	埼玉県、東京都
経済活動 (県民経済計算H28)	1都1県の県内総生産 127,159,701百万円 (全国比23.1%)

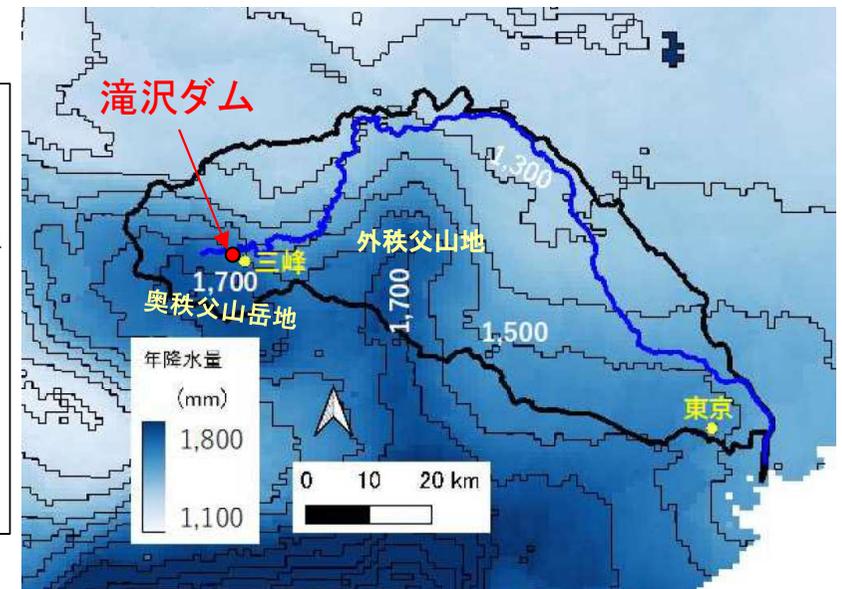
出典: 荒川水系河川整備計画(令和2年9月変更)

荒川流域の降水特性

- 地域別降水量では、奥秩父山岳地、外秩父山地が多く、中下流部の低平地や、北西部の上武山地周辺が少ないのが特徴である。
- 滝沢ダムの年間降水量は、管理開始以降17カ年（H20～R6）で平均1,317mm程度である。



滝沢ダム地点の年間降水量（平成20～令和6年）



荒川流域の年間降水量分布図

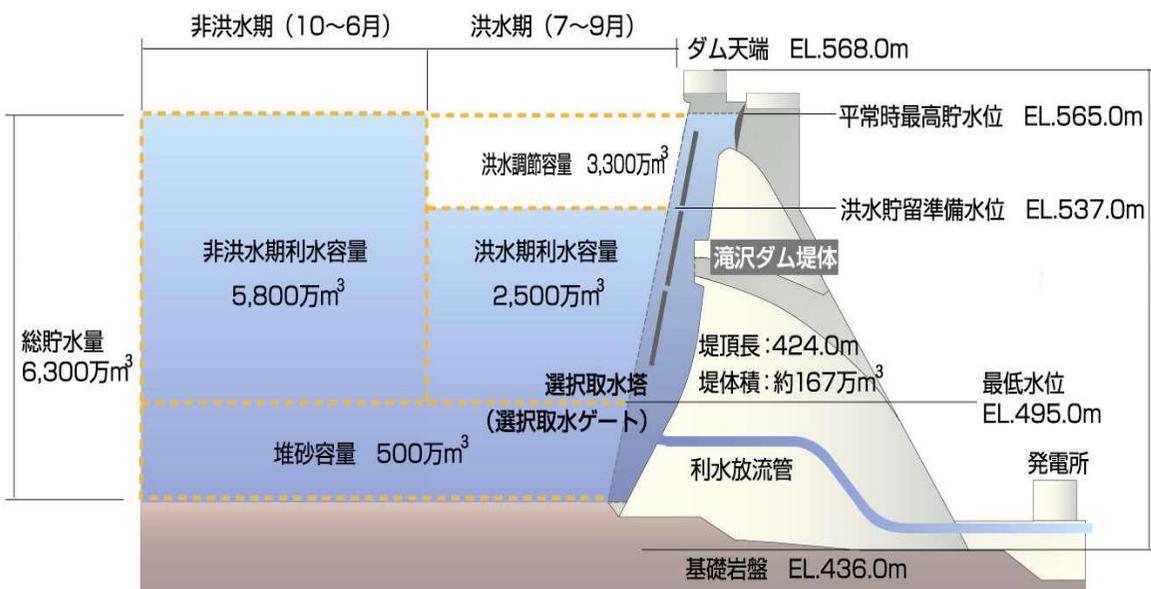
（平成3年～令和2年）

滝沢ダム の概要

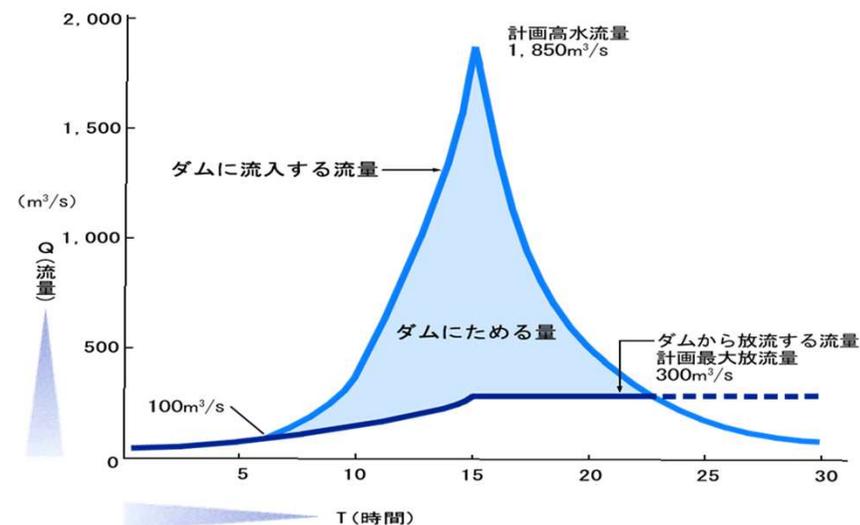
【滝沢ダムの概要】

- ・ 形 式 : 重力式コンクリートダム
- ・ 目 的 : 洪水調節
流水の正常な機能の維持
水道用水の供給
発電 (東京発電(株))
- ・ 堤 高 : 132.0m
- ・ 堤 頂 長 : 424.0m
- ・ 総貯水容量 : 63,000千 m^3
- ・ 湛水面積 : 1.45 km^2
- ・ 集水面積 : 108.6 km^2
- ・ 管理開始 : 平成20年
- ・ 建設事業完了 : 平成22年

【滝沢ダムの貯水池容量配分図】



【滝沢ダムの洪水調節計画】



計画高水流量	: 1,850 m^3/s
洪水流量	: 100 m^3/s
計画最大放流量	: 300 m^3/s
洪水調節容量	: 33,000 千 m^3
洪水調節方式	: 一定率一定量調節方式



前回フォローアップ委員会における主な指摘事項

- 令和2年12月に実施されたフォローアップ委員会において審議された「今後の課題」と対応状況は以下に示すとおりである。
- 洪水調節では確実に水位低減効果があるのだから、推測などとは言わず、水位低減効果があったと言い切った方が良い。
 - ご指摘を踏まえ、水位低減効果に関する評価について、言い切った形の記載とした。 洪水調節3
- 予測が難しい線状降水帯では、十分な事前放流ができない恐れもあるので、事前放流で異常洪水時防災操作が必ず避けられる訳ではないという事、むしろ回避できない事態がこれからもある事をダム直下の人たちに伝えて欲しい。
 - ご指摘を踏まえ、滝沢ダムでは毎年6月に、浦山ダム、二瀬ダムと合同で、下流の自治体、漁業者等に対して、ダム施設の概要、洪水時のダム操作や放流警報などに関する説明会を実施し、理解促進を図っている。 洪水調節11
- 近年、学校教育の変化は著しく、SDGs教育やESD教育がものすごいスピードで浸透しているので、多くの学校が見学を訪れるダムでは、一番大事な防災教育の部分で一定の役割が果たせるため、学校へのアプローチを引き続き行って欲しい。
 - ご指摘を踏まえ、以下の記載とした。水源地域動態6
滝沢ダムでは、地元の小中学校等へダム関係施設の見学案内を実施し、防災教育やダムの役割の理解促進のための取組を継続している。

洪水調節実績

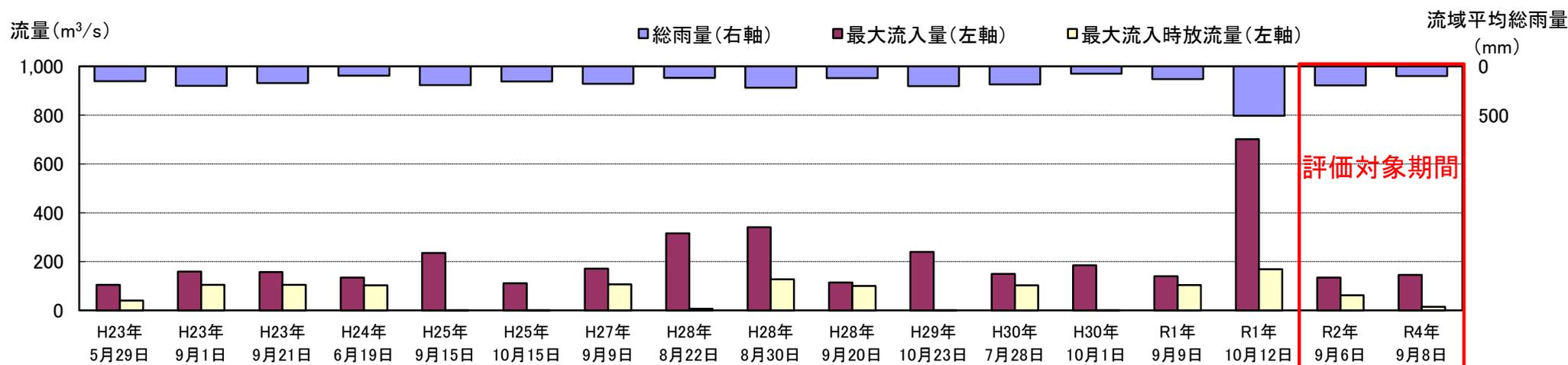
- 平成20年の管理開始以降、17回の洪水調節を実施し、評価対象期間(令和2年～令和6年)(以下「至近5カ年」という。)では2回の洪水調節を行った。
- 令和元年10月12日洪水では最大流入量 $701\text{m}^3/\text{s}$ となり既往最大となった。

ダム名	〈参考〉 令和元年 (2019年)	令和2年 (2020年)	令和3年 (2021年)	令和4年 (2022年)	令和5年 (2023年)	令和6年 (2024年)
滝沢ダム 洪水量: $100\text{m}^3/\text{s}$ (一定率一定量)	洪水調節:2回 最大流入量: $701\text{m}^3/\text{s}$ (10/12) 最大流入時 放流量: $168\text{m}^3/\text{s}$	洪水調節:1回 最大流入量: $135\text{m}^3/\text{s}$ (9/6) 最大流入時 放流量: $62\text{m}^3/\text{s}$	—	洪水調節:1回 最大流入量: $146\text{m}^3/\text{s}$ (9/8) 最大流入時 放流量: $15\text{m}^3/\text{s}$	—	—

※滝沢ダムでは流入量 $100\text{m}^3/\text{s}$ 以上を洪水とする。

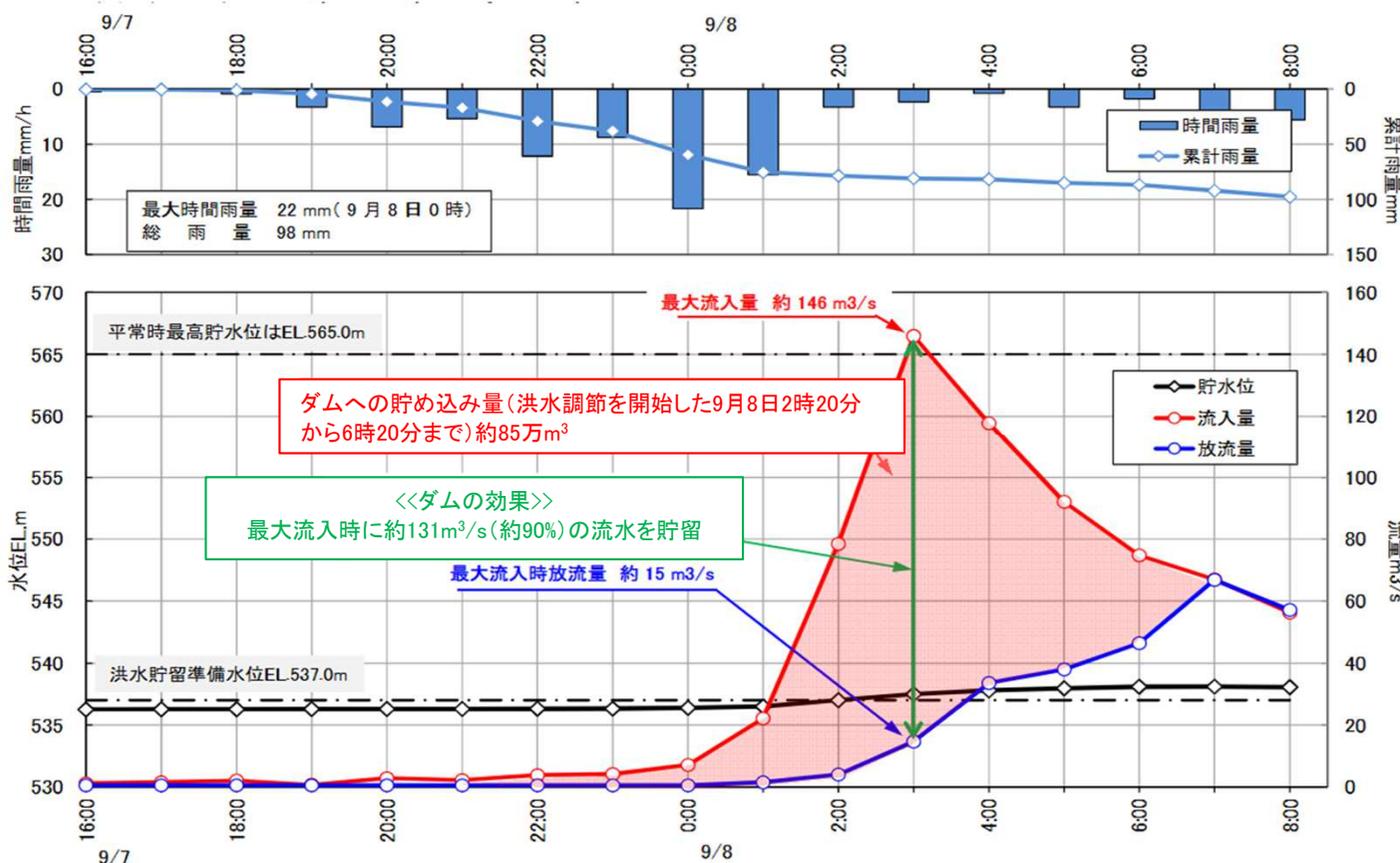
「—」:洪水量(洪水調節開始流量)に達する流量は観測されていない。

管理開始以降の洪水調節実績



- 令和4年9月8日洪水では、最大流入量 $146\text{m}^3/\text{s}$ に対して $131\text{m}^3/\text{s}$ をダムに貯め込む防災操作(洪水調節)を実施した。
- 最大流入量に対してダムで貯留した流量は、約90%である。

令和4年9月洪水(雷雨)



洪水調節実績

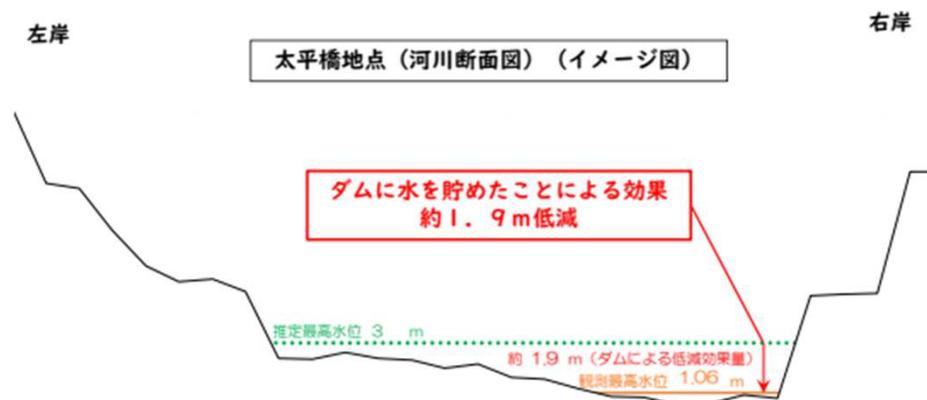
No.	生起年月日	気象要因	最大流入量 (m^3/s)	最大放流量 (m^3/s)	最大流入時 放流量 (m^3/s)	最大流入時 調節量 (m^3/s)	流域平均 累計雨量 (mm)
1	H23.5.29	台風第2号	105	40	40	65	153
2	H23.9.3	台風第12号	159	106	105	54	199
3	H23.9.21	台風第15号	157	106	105	52	171
4	H24.6.19	台風第4号	134	103	103	31	94
5	H25.9.16	台風第18号	235	1	1	234	192
6	H25.10.16	台風第26号	111	1	1	111	155
7	H27.9.9	台風第18号	171	107	107	64	177
8	H28.8.22	台風第9号	316	61	7	309	137
9	H28.8.30	台風第10号	340	130	127	213	218
10	H28.9.20	台風第16号	115	100	100	15	120
11	H29.10.23	台風第21号	240	1	1	240	201
12	H30.7.28	台風第12号	150	103	103	47	186
13	H30.10.1	台風第24号	185	1	1	185	96
14	R1.9.9	台風第15号	140	104	104	36	131
15	R1.10.12	台風第19号	701	168	168	533	507
16	R2.9.6	台風第10号	135	97	62	72	194
17	R4.9.8	雷雨	146	67	15	131	100

※赤字は既往最大

令和4年9月8日洪水における洪水調節効果(2)

洪水調節3

- 令和4年9月8日の雷雨による出水時に、滝沢ダムに流れ込んだ水の一部をため込んで、中津川^{たいへいばし}太平橋地点の水位を1.9m低下させた。



令和4年9月洪水での太平橋地点の水位低減効果



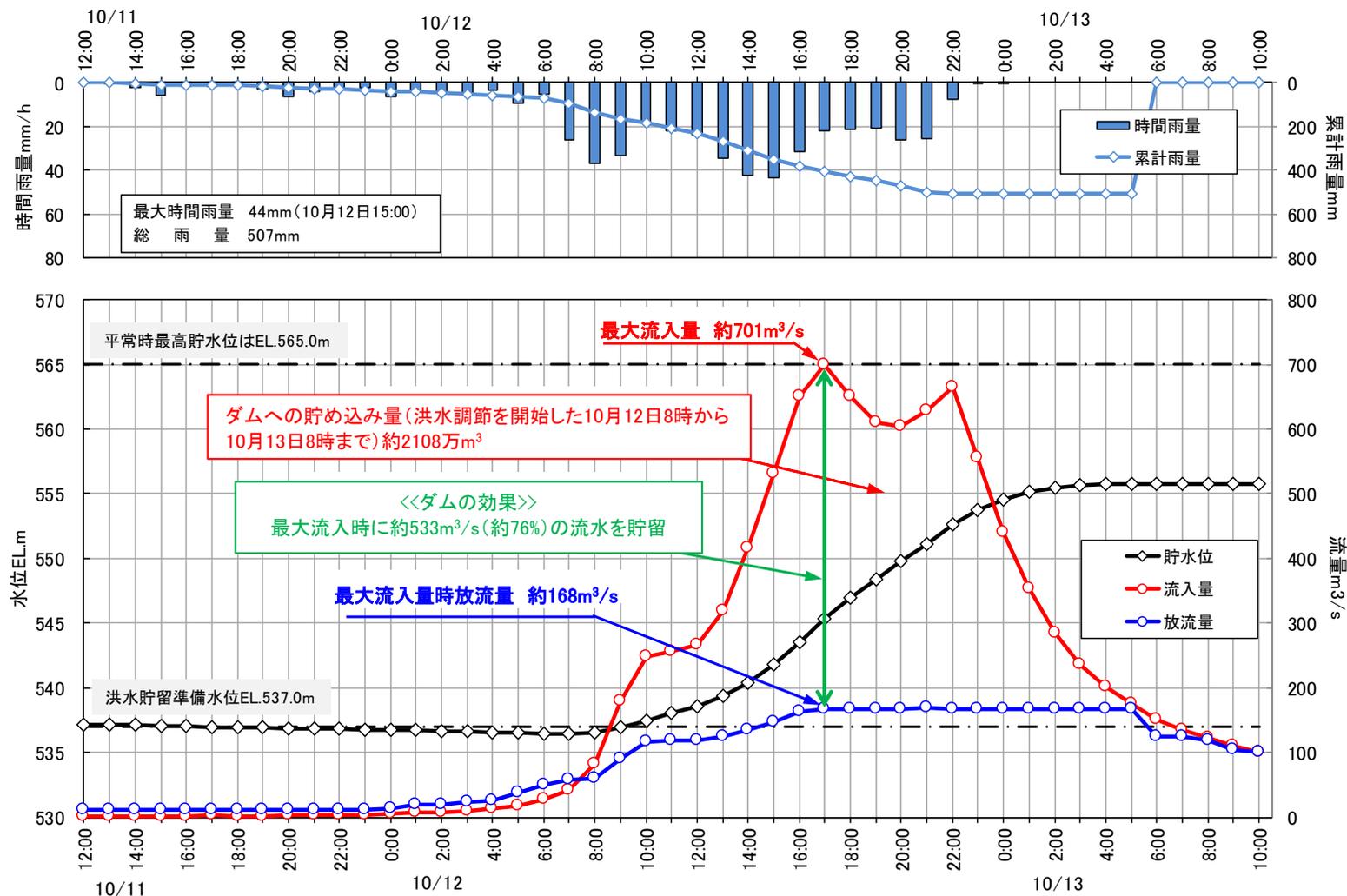
太平橋地点現地写真(令和4年4月7日撮影)



滝沢ダムと太平橋の位置図

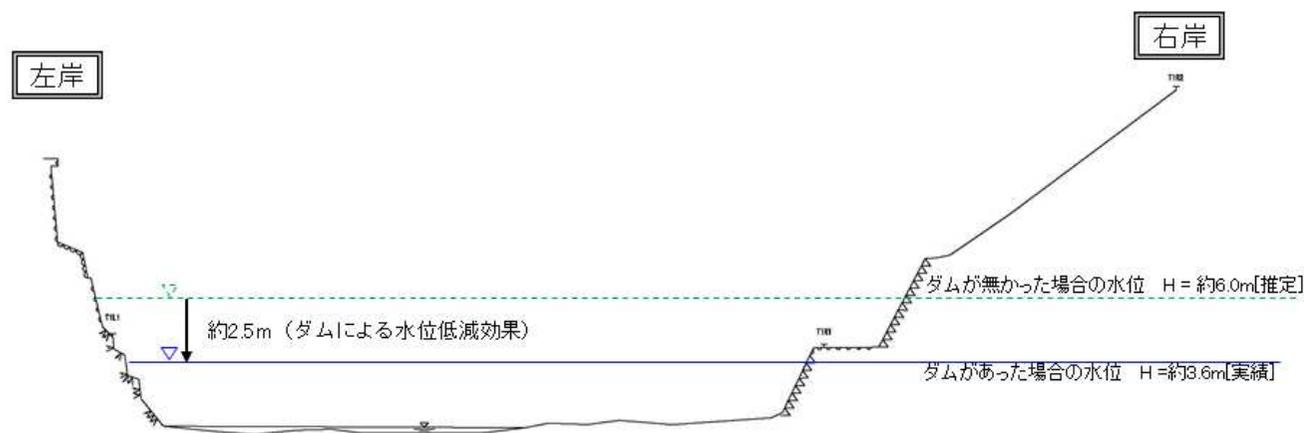
【参考】令和元年台風第19号水における洪水調節効果(1)

- 既往最大の流入量を記録した令和元年10月12日洪水では、最大流入量 $701\text{m}^3/\text{s}$ に対して $533\text{m}^3/\text{s}$ をダムに貯め込む防災操作(洪水調節)を実施した。
- 最大流入量に対してダムで貯留した流量は、約76%である。

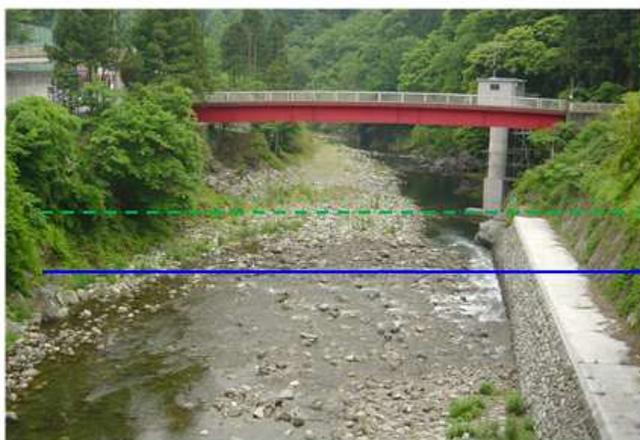


【参考】令和元年台風第19号水における洪水調節効果(2)

- 令和元年10月の台風第19号による出水時に、滝沢ダムに流れ込んだ水の一部をため込んで、中津川^{たいへいばし}太平橋地点の水位を2.5m低下させた。



令和元年10月の台風第19号での太平橋地点の水位低減効果



太平橋地点現地写真

ダムが無かった場合の水位[推定]

ダムがあった場合の水位[実績]



滝沢ダムと太平橋の位置図

洪水調節に関する情報の提供(1)

- 水源の状況や概況(ダムの流入・放流量、貯水量等)を、ホームページやX(旧Twitter)で発信し、洪水に関する情報についてリアルタイムで住民へ提供している。
- 洪水調節終了後は、洪水調節による下流河川での水位低減効果について記者発表し、ホームページ上にも掲載している。

水がさえる豊かな社会 荒川ダム総合管理所 (浦山ダム・滝沢ダム)

リアルタイムダム操作状況

【ご案内】浦山ダムのフーチング階段は安全管理のため閉鎖しています。滝沢ダムのフーチング階段は左岸側のみ利用可能です。現在、流木の一般配布は行っておりません。

【さくら湖の利用について】

08月30日15時40分の情報

必要な水を流しながらダムに水を貯めています

滝沢ダム流域で観測した雨量 累計 0.0 mm	貯水位 標高 528.36 m	貯水量 70.9%
滝沢ダムに入ってくる水の量 毎秒 0.00 立方メートル	24時間前の貯水位と比較して 50 cm低下	

平常時最高貯水位 標高 565.00m
洪水貯留準備水位 標高 537.00m
最低水位 標高 495.00m

非常用洪水吐
常用洪水吐

※各数値は速報値です

滝沢ダムから流している水の量
毎秒 4.59 立方メートル

7月1日から洪水期に入りました。
梅雨前線、台風に伴う降雨により、ダムからの放流量が大きく増加する際は、本リアルタイム情報にてダムの操作状況を発信いたします。

滝沢ダムの防災操作^{※1}について
～局地的な降雨において河川水位の上昇を低減～

独立行政法人水資源機構荒川ダム総合管理所が管理する滝沢ダムの流域では、局地的な降雨の影響で、9月7日(水)から8日(木)までの間に、総雨量98mm^{※2}の降雨を記録しました。

この降雨により滝沢ダムでは、最大流入量毎秒約14.6立方メートルの時に、約90%に相当する毎秒約13.0立方メートルの水をダムに貯留し、この操作(おたき)により、約1.9mの河川水位の低減が実現しました。

なお、今回も同様です。

※1 防災操作は、貯め込むことで減らすこと、※2 総雨量 ※3 ダムへ

資料3

防災操作によるダム下流河川水位低減効果

中津川太平橋地点 (資料1参照)
① ダムがなかった場合、推定で最高水位約3.0mまで上昇見込み。
② 滝沢ダムの防災操作により、最高水位約1.1mに抑えることができた。

防災操作によるダム下流河川水位低減効果
①-②=約3.0m-1.1m=約1.9m低減

太平橋地点(河川断面図) (イメージ図)

ダムに水を貯めたことによる効果
約1.9m低減

太平橋地点現地写真 (令和4年4月7日14時撮影)

ダムがなかった場合の推定最高水位約3.0m
観測最高水位約1.1m

ダムに水を貯めたことによる効果
約1.9m低減

荒川ダム総合管理所 (浦山ダム・滝沢ダム... @jwa_araka... · 2020年9月9日 ...

滝沢ダムは5日夜、台風の影響で豪雨となったため、洪水調節を行い、約126万³ (東京ドーム約1杯)の水量をダムにため込みました
この映像は6日12時頃、常用洪水吐から約55³/s放流時のものです
常用洪水吐からの放流は6日21時に終了しました

滝沢ダムの洪水調節をHPに掲載
[water.go.jp/kanto/arakawa/...](http://water.go.jp/kanto/arakawa/)

0:03 / 0:25

13 likes, 77 retweets

Xによる情報発信

リアルタイムの水源の状況や概況

水位低減効果についての記者発表
(令和4年9月洪水)

出典: X (旧Twitter)

出典: 荒川ダム総合管理所ホームページ

洪水調節に関する情報の提供(2)

- 令和元年9月12日、二瀬ダム管理所(国交省)及び荒川ダム総合管理所(水機構)は、地元コミュニティFM放送局「ちちぶエフエム」との間で、「災害情報の放送に関する協定」を締結。
- 同協定では、ダム管理者より放流通知などの災害情報を同局へ提供し放送を要請、要請を受けた同局はダムからの災害情報を通常放送に優先して放送することとしている。
- 年に1度、二瀬ダム管理所長と一緒に同局の1時間番組に生出演し、ダムの役割や操作、緊急放流や事前放流の仕組みやいざという時の対処方法を地域の方に聴いて頂いている。



ちちぶエフエムへの生出演

左:二瀬ダム管理所長 / 中央:荒川ダム総合管理所長 / 右:パーソナリティ

<< 「ちちぶエフエム」とは? >>

- ▼秩父地域(秩父市、横瀬町、小鹿野町、皆野町、長瀬町)の一部が視聴可能エリアのラジオ局。(民放)
- ▼秩父地域の情報に特化した番組を、毎日7:00から21:00まで生放送。
- ▼災害発生時、緊急時には通常の放送時間外でも速やかに放送を開始し、「今伝えるべきこと」を生放送。
- ▼令和元年8月20日に総務省関東総合通信局より予備免許付与。令和元年10月7日開局。



[暮(9)らしを守る・命(1)を守る・逃(2)げ遅れゼロ 9.12協定]

洪水調節に関する情報の提供 (3)

- 平成27年9月に発生した「関東・東北豪雨」を踏まえ、「水防災意識社会」の再構築に向けた取組として、ハード・ソフト対策を一体的・計画的に推進するための減災対策協議会を設置することが平成27年12月11日に決定された。
- 荒川水系(埼玉県域)では、氾濫が発生することを前提として社会全体で常に洪水に備える「水防災意識社会」を再構築することを目的とした「荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会」が平成28年5月31日に設立された。

荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会

ハード対策の主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 優先的に実施する堤防整備、橋梁部周辺対策の実施(洪水を安全に流す対策) ◆ 堤防天端の保護、裏法尻の補強(危機管理型ハード対策)、簡易水位計やCCTVカメラの設置等 ◆ 排水機場の耐水化や水門・機場等の遠隔操作を確実にできる対策(二重化)の実施 ◆ 河川防災ステーションの整備や堤防天端上の車両交換場所等の整備
ソフト対策の主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ① 逃げ遅れゼロに向けた迅速かつ的確な避難行動のための取組 ② 洪水氾濫による被害の軽減、避難時間の確保のための水防活動等の取組 ③ 一刻も早い生活再建及び社会経済活動の回復を可能とするための排水活動の取組

荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会開催状況

荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会	
関係機関	さいたま市、川越市、熊谷市、川口市、行田市、加須市、東松山市、春日部市、羽生市、鴻巣市、深谷市、上尾市、草加市、越谷市、蕨市、戸田市、朝霞市、志木市、和光市、新座市、桶川市、久喜市、北本市、八潮市、富士見市、三郷市、蓮田市、坂戸市、幸手市、鶴ヶ島市、吉川市、ふじみ野市、白岡市、伊奈町、三芳町、毛呂山町、越生町、川島町、吉見町、鳩山町、寄居町、宮代町、杉戸町、松伏町、埼玉県、気象庁熊谷地方气象台、独立行政法人水資源機構(荒川ダム総合管理所・利根導水総合管理所)、国土交通省関東地方整備局(荒川上流河川事務所・荒川下流河川事務所・二瀬ダム管理所)、東日本旅客鉄道株式会社、日本貨物鉄道株式会社、東武鉄道株式会社、東京地下鉄株式会社、秩父鉄道株式会社、埼玉高速鉄道株式会社、埼玉新都市交通株式会社、首都圏新都市鉄道株式会社

第1回	平成28年5月31日
第2回	平成28年9月28日
第3回	平成29年6月1日
第4回	平成30年5月22日
第5回	令和元年5月27日
第6回	令和元年11月12日、14日
第7回	令和2年5月28日
第8回	令和3年5月31日
第9回	令和4年5月27日
第10回	令和5年6月5日
第11回	令和6年5月23日

洪水調節に関する情報の提供(4)

- 気候変動による水災害リスクの増大に備えるため、河川・下水道管理者等による治水に加え、あらゆる関係者(国・都道府県・市町村・企業・住民等)により流域全体で行う「流域治水」へ転換するため、全国の一級水系において流域全体で早急に実施すべき対策の全体像を「流域治水プロジェクト」として示し、ハード・ソフト一体の事前防災対策を推進している。
- 「総力戦で挑む防災・減災プロジェクト」のとりまとめ(令和2年7月6日)を踏まえ、荒川流域において流域治水を計画的に推進するため「荒川水系流域治水協議会」が設置された。

戦後最大洪水等に対応した河川の整備(見込)



整備率: 70%
(概ね5か年後)

農地・農業用施設の活用



0市町村
(令和4年度末時点)

流出抑制対策の実施



1,162施設
(令和3年度実施分)

山地の保水機能向上および土砂・泥水災害対策



治山対策等の実施箇所 **2箇所**
(令和4年度実施分)
砂防阻道施設の整備数 **0施設**
(令和4年度完成分)
※進行中 1施設

国土適正化計画における砂災推計の作成



6市町村
(令和4年12月末時点)

避難のためのハザード情報の整備



洪水浸水想定区域 **46河川**
(令和4年9月末時点)
※一部、令和4年3月末時点
内水浸水想定区域 **12団体**
(令和4年9月末時点)

高齢者等避難の有効性の確保



避難確保計画 **10,226施設**
土砂 **158施設**
(令和4年9月末時点)
個別避難計画 **89市町村**
(令和4年1月1日時点)

荒川水系(埼玉ブロック)
流域治水協議会開催状況

第1回	令和2年8月26日
第2回	令和2年12月9日
第3回	令和3年2月26日
第4回	令和4年3月10日
第5回	令和5年3月17日
第6回	令和5年6月5日
第7回	令和6年3月15日

※荒川水系流域治水協議会は、東京ブロックと埼玉ブロックに区分されている。

被害をできるだけ防ぐ・減らすための対策



流域の雨水貯留機能の向上
校庭(公園等)貯留施設の整備

担当部署 朝霞市 みどり公園課

取組概要
当該貯留施設は民間事業者による大規模開発事業に伴い防災機能をコンセプトに整備された都市公園「谷中公園」約1,000㎡の敷地内にある。令和2年9月に開発完了検査を実施し、令和3年3月に市に帰属された後、令和3年4月から都市公園として供用開始した。貯水容量は約97㎡となっている。

取組内容の工夫点・課題・留意点
基本的には公園敷地内への降雨のみの処理を想定して設計されているため、河川への流出低減効果は限定的。

取組による効果
効果に関する定量的な評価については、現在事業者が近隣の類似の都市公園に整備した雨水貯留槽のマンホール裏に水位測定装置を設置し、検証中。

被害対象を減少させるための対策



水災害ハザードエリアにおける土地利用・住まい方の工夫
まちづくりと一体となった土砂災害対策の推進

担当部署 秩父市 地域整備部 都市計画課

取組概要
災害ハザードエリアからの移転に対し、既存ストック(空き家等)を活用することにより、本人負担の軽減を図る。

取組内容の工夫点・課題・留意点
空き家調査により空き家の分布状況・所有者の意向を調べ、居住誘導区域内や小さな拠点周辺など、安全配置が図られた同じエリア内の空き家を活用し、集団移転することにより本人負担の軽減とコミュニティの維持を図る。

取組による効果
災害危険エリアからの移転、空き家の利活用(コンパクトシティ形成)

活用可能な制度等
防災集団移転促進事業、空き家対策総合支援事業、居住誘導区域等権利設定等事業(国交省)

被害の軽減、早期の復旧・復興のための対策



高台まちづくりの推進

担当部署 東京都 都市整備局 市街地整備部 企画課

取組概要
・まちづくりを担う地方公共団体等と河川管理者が一体となって、まちづくりや避難に関する計画等を踏まえつつ、高台まちづくりを推進。

取組内容の工夫点・課題・留意点
・具体の地域における高台まちづくりの実践を進めるとともに、これらの過程で新たに生じた課題等に対して速やかに解決策を模索していく。

取組による効果
・施設では防ぎきれない大洪水等が発生し、大規模氾濫が発生しても、命の安全や最低限の避難生活水準が確保され、社会経済活動が一定程度継続することができる。

関係者との情報共有のためのダッシュボード

荒川下流タイムラインの策定・運用の取組

担当部署 荒川下流河川事務所 品質確保・防災企画室

取組概要
・荒川下流流域水防災タイムラインは、現在沿川16市区を含む全37機関54部署で運用している。

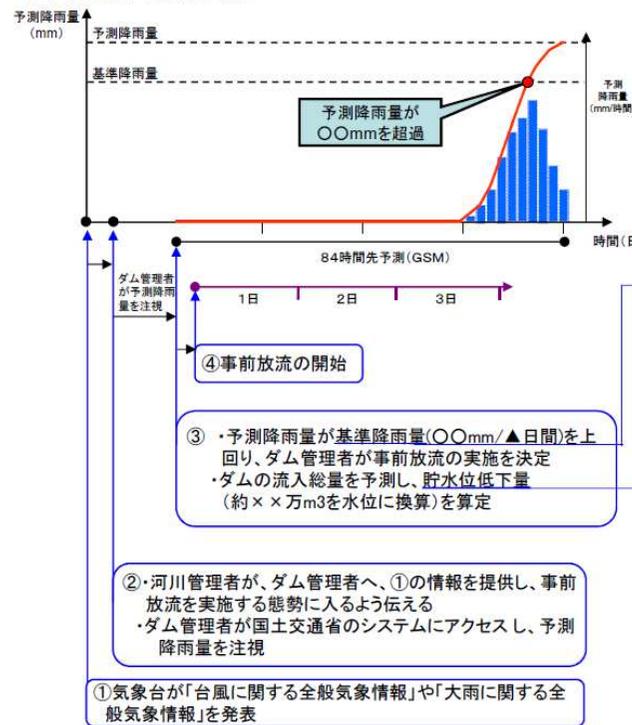
取組内容の工夫点・課題・留意点
・台風性降雨シナリオによる流域警戒ステージを設定し、各段階で防災行動の目標設定に応じた防災行動の早期実施を図る。
・関係機関との共有をWEB会議にて実施。また関係者との情報共有のためのダッシュボードを構築。(R3から試行)

取組による効果
・早期の危機感共有と早期対応の意思決定を促す流域タイムラインにより、関係機関における早期対応の意思決定を支援する。

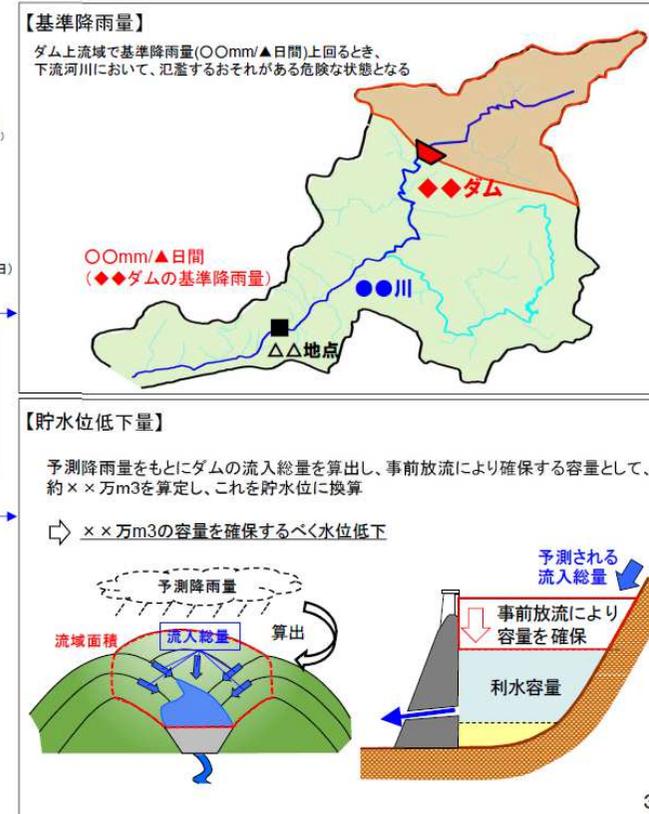
事前放流

- 令和元年台風第19号などの近年の水害の激甚化を踏まえ、「既存ダムの洪水調節機能の強化に向けた基本方針（令和元年12月12日既存ダムの洪水調節機能強化に向けた検討会議）」が策定された。
- 本基本方針に基づき、既存ダムの有効貯水容量を洪水調節に最大限活用できるよう、国土交通省所管ダム及び河川法第26条の許可を受けている利水ダムを対象に、事前放流を実施するにあたっての基本的事項をとりまとめた「事前放流ガイドライン」（令和2年4月22日）が策定された。
- 荒川水系において、河川管理者である国土交通省並びにダム管理者及び関係利水者との間で協議を進め、令和2年5月28日付で治水協定を締結（令和3年3月24日改定）し、事前放流の運用を開始している。

○事前放流の実施判断



※小規模な農業用ダム等については、季節ごとにあらかじめダムの水位を低下させておくなどの運用(簡易な事前放流)を行う。



事前放流の実施フロー

出典: 事前放流ガイドライン

事前放流の運用条件

ダム名	洪水調節容量 (万m ³)	洪水調節可能容量 (万m ³)	基準降雨量* (mm)
滝沢ダム	3,300	268	450

※滝沢ダム上流域の予測降雨量(48時間雨量)

出典: 滝沢ダム事前放流実施要領(令和3年3月24日改)

防災操作・事前放流に関する取組

- 荒川ダム総合管理所(浦山ダム・滝沢ダム)では毎年6月に、二瀬ダムと合同で、関係機関や下流の住民代表に対して、ダム施設の概要、洪水時のダム操作や放流警報などに関する防災操作説明会を実施するとともに、防災チラシやちちぶ安心・安全メールを活用し、広く理解促進を図っている。

令和6年度 ダム等防災操作等説明会

事前放流とは

- 計画規模を超える洪水においても、所定の洪水調節機能を発揮させるとともに、異常洪水時防災操作(緊急放流)への移行を回避または遅らせる。
- 洪水の発生前に事前に貯水池に貯留し容量を洪水調節に活用することで、
- ダムからの放流量を低減させることが

2 ダム下流の警報および巡視

1. 警報車による巡視

2. サイレンスピーカーによる吹鳴

3. 情報表示板に掲示

サイレン吹鳴の方法(計画規模内の洪水時、及び異常洪水時)

異常洪水時	サイレン	吹鳴	5分	停止	5分	吹鳴	5分	停止	5分
計画規模内	サイレン	吹鳴	5分	停止	5分	吹鳴	5分	停止	5分

防災操作説明会用資料

秩父4ダムからのお知らせ～ダムの防災操作～

防災チラシ

防災チラシ



R5防災操作説明会



R6防災操作説明会

13:39

ちちぶ安心・安全メール 2024/08/06

宛先: 荒総 管理課長 鈴木 和春 >

秩父4ダムからのお知らせ～ダムの防災操作～

荒川ダム総合管理所からお知らせします。今後、本格的に台風シーズンを迎え、洪水の発生、ダムにおける防災操作等の実施の可能性が高まることから、秩父市にお住まいの皆様へのお知らせとして、「秩父4ダムからのお知らせ～ダムの防災操作～」を配信いたします。下記URLから閲覧が可能となっておりますので、ご覧ください。

https://www.water.go.jp/kanto/arakawa/topics/2024/pdf/bousai_charashi2024.pdf

(問い合わせ先)
独立行政法人水資源機構 荒川ダム総合管理所 第一管理課
電話 0494-23-1431

登録の変更・解除は下記ページの案内をご確認ください。
・スマートフォン/パソコンをご利用の方はこちらから。
<https://plus.sugumail.com/usr/chichibu/home>
・フィーチャーフォンをご利用の方はこちらから。

ちちぶ安心・安全メール

ダムの副次的効果

- 滝沢ダムでは、出水時に上流から流入する流木を貯水池で捕捉し、回収・処理している。
- 副次的効果として、下流河川に対して流木による二次被害の防止効果が発揮されている。
- 貯水池で回収した流木は、広く一般に無料配布している。



貯水池内における流木の集積状況
令和2年6月



貯水池内における流木の回収状況
令和2年6月



貯水池内における流木の陸揚状況
令和2年6月

流木の回収量(空m³)

令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
281	0	40	111	18



流木の無料配布状況
令和6年3月4日

- 管理開始以降17回の洪水調節を実施し、至近5カ年では2回の洪水調節を行った。 洪水調節1
- 水源の状況や概況(ダムの流入・放流量、貯水量等)をホームページやX(旧Twitter)で発信し、ちちぶエフエムとの災害情報の放送に関する協定締結などを通して、住民への情報提供を行っている。 洪水調節6-7
- 洪水時に流域から流出した流木をダムで捕捉することで、副次的に下流河川に対して流木による二次被害の防止効果が発揮されている。 洪水調節12

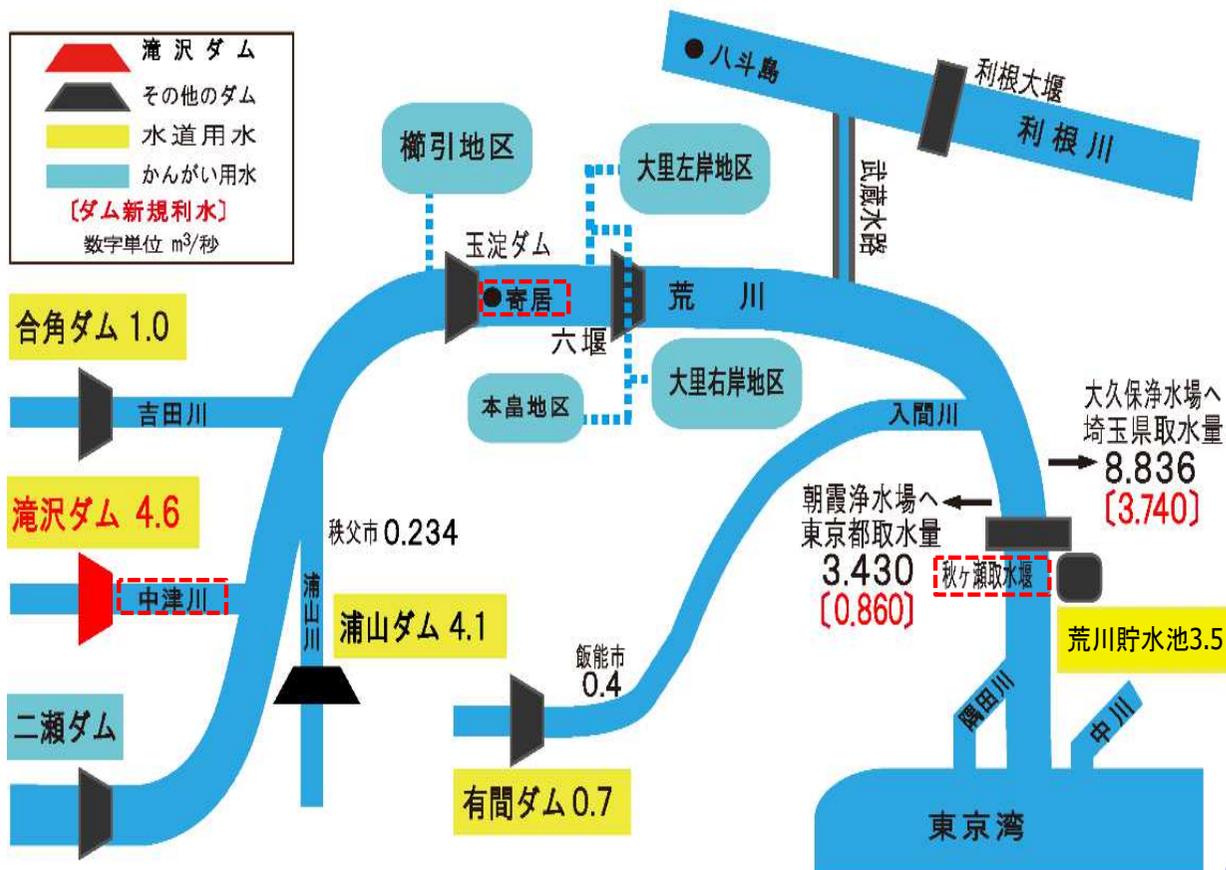
【今後の方針】

- 今後も引き続き適切なダム操作により洪水調節効果を発揮するとともに、関係機関および住民に対して、防災操作説明会の開催や洪水等に関する情報提供を行っていく。

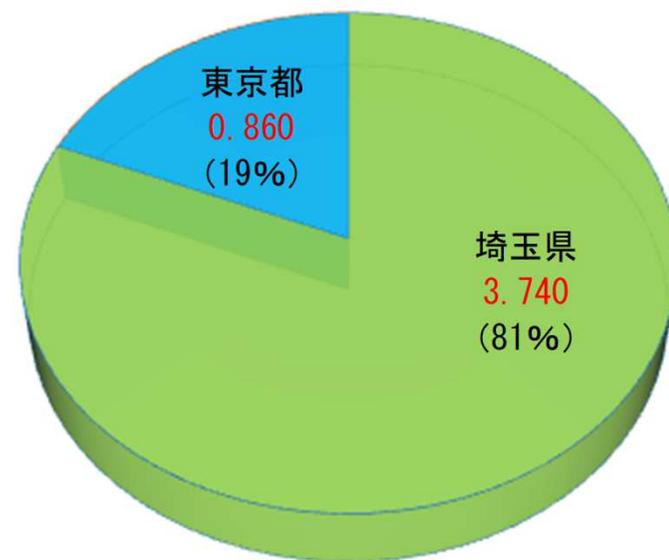
荒川水系の利水補給について

- 滝沢ダムを含む荒川4ダム(浦山ダム、滝沢ダム、二瀬ダム、荒川貯水池)が相まって、新規利水(水道用水)及び荒川沿川の流水の正常な機能の維持のための補給を行っている。

● 荒川水系の新規利水



● 滝沢ダムの新規利水(水道用水) 単位: m^3/s



合計 $4.600m^3/s$

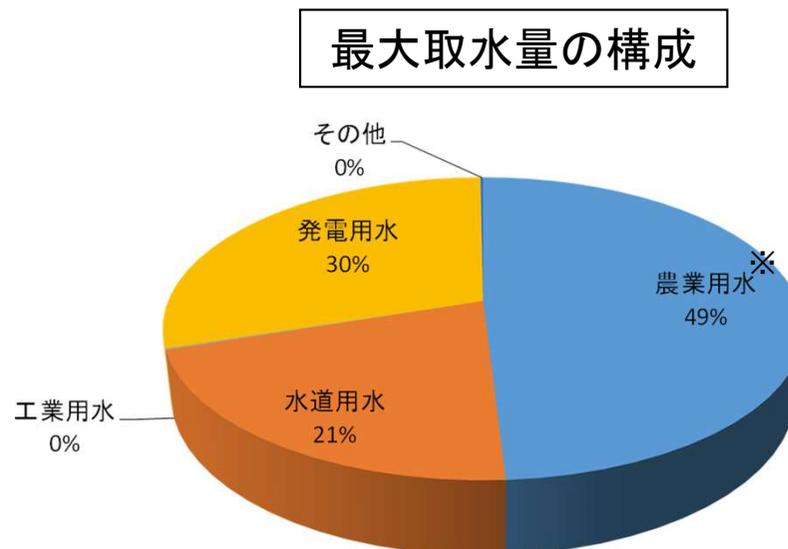
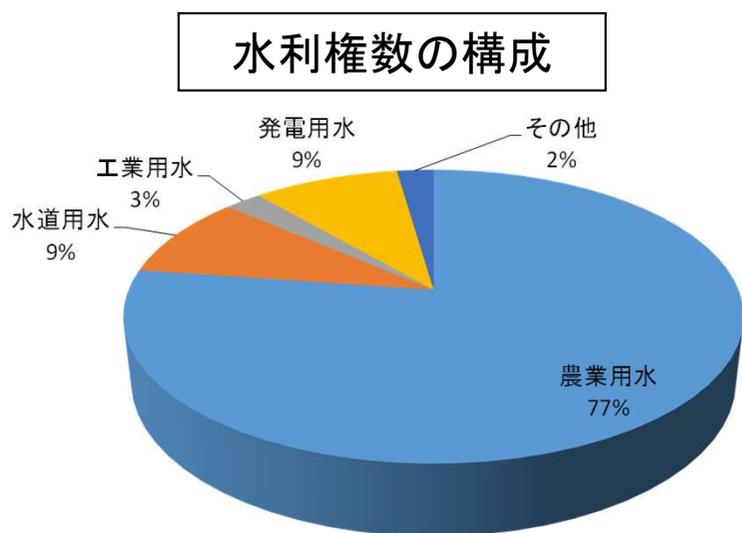
● 流水の正常な機能の維持(不特定用水)

○ 中津川(ダム直下)	: 通年	0.49 m^3/s (滝沢ダム)
○ 寄居地点	: かんがい期最大	概ね 23 m^3/s (荒川水系ダム群)
	: 非かんがい期最大	概ね 9 m^3/s (荒川水系ダム群)
○ 秋ヶ瀬取水堰下流地点	: 通年	概ね 5 m^3/s (荒川水系ダム群)

荒川水系利水の現状

- 荒川の水は、農業用水、水道用水、発電用水等として取水されている。
- 農業用水と都市用水（水道用水、工業用水）の供給量のうち、水利権数では農業用水（77%）が最も多く、最大取水量も農業用水（49%）が最も多い。

荒川における水利権数・最大取水量の構成



※ 農業用水の慣行水利権については、慣行届けに数値が記載されているもののみ計上

目的別	水利権の数	最大取水量(m ³ /s)
農業用水	34	31.1
水道用水	4	13.2
工業用水	1	0.1
発電用水	4	18.9
その他	1	0.1

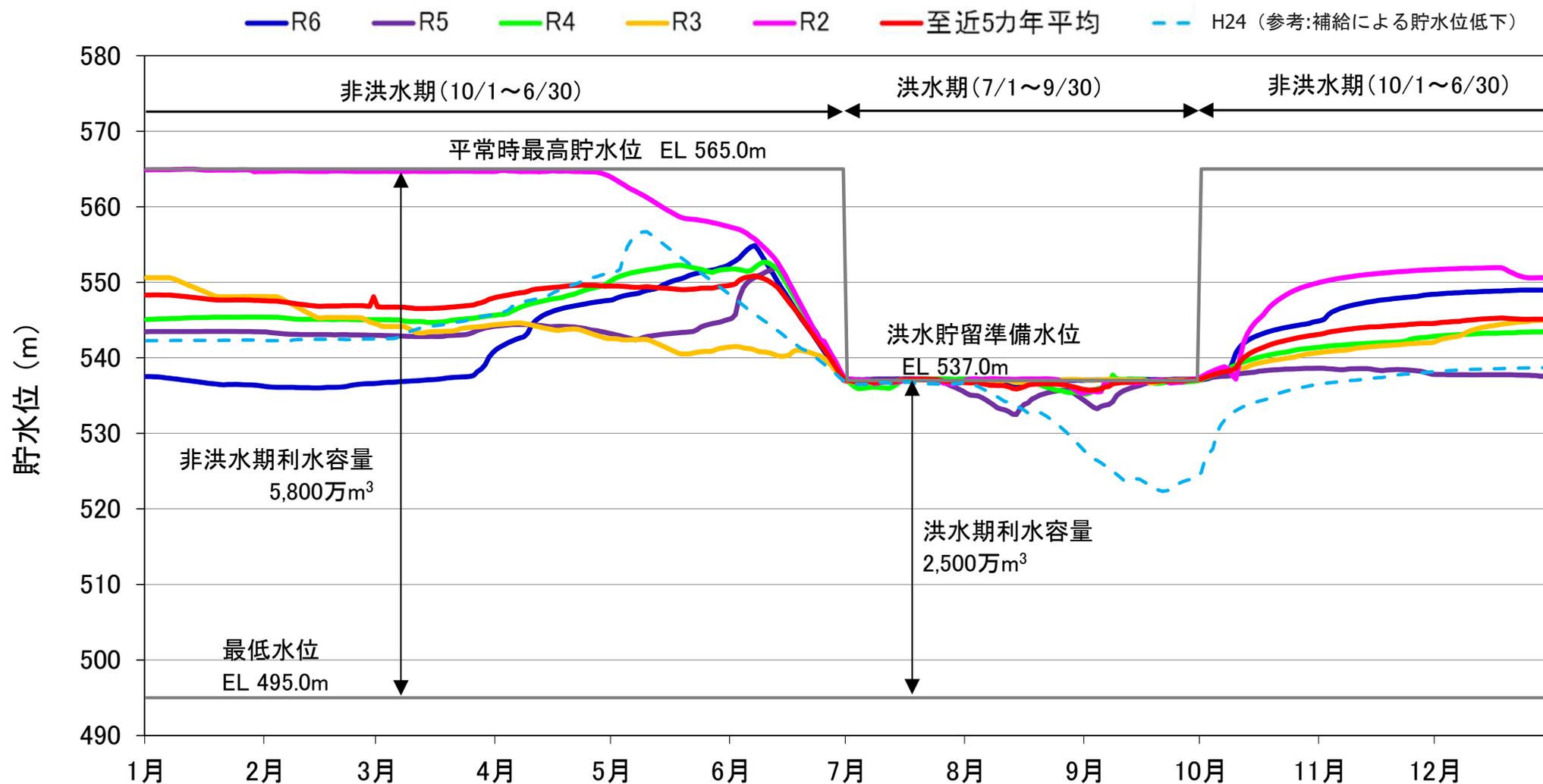
（平成31年3月時点）

出典：荒川水系河川整備計画（令和2年9月）から作成

滝沢ダム貯水池運用実績

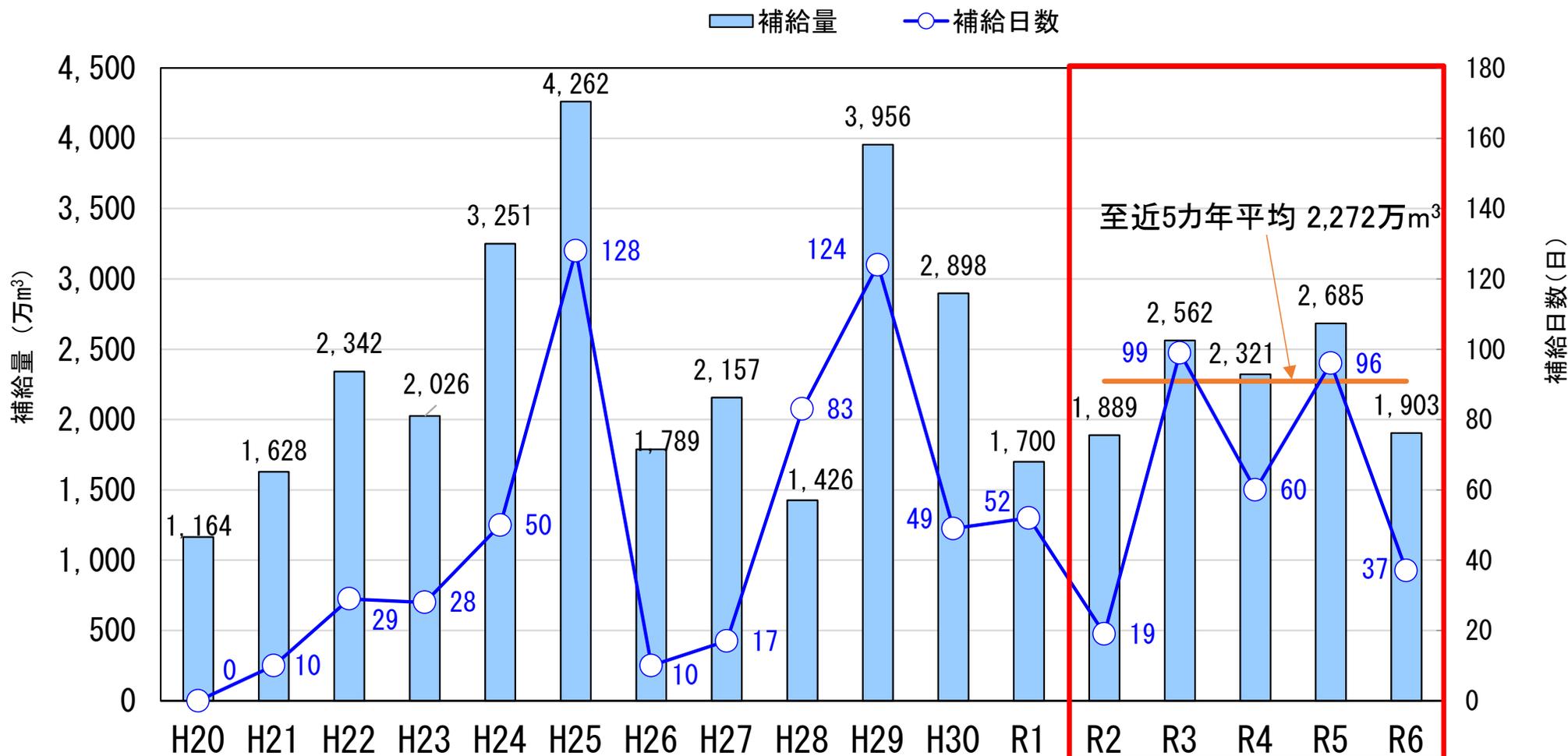
- 至近5カ年の貯水池運用実績は以下のとおりである。

至近5カ年の貯水池運用図



滝沢ダムの補給実績

- 滝沢ダムは、浦山ダム、二瀬ダム、荒川貯水池と相まって、河川管理者からの補給指示に基づき補給を行っている。
- 至近5力年の年間補給量は1,889～2,685万 m^3 、補給日数は19～99日である。



※ダム直下の維持流量 $0.49m^3/s$ を含んで集計。

評価対象期間

渇水対応タイムライン

■ 渇水対応タイムラインは、危機的な渇水に備えるため、各々の関係者の立場毎に、渇水の初期から徐々に深刻化していく状況(渇水シナリオ)に沿って、「渇水時の影響や被害を軽減するための対策とその時期」を行動計画として示すもので、荒川水系では、令和3年12月17日に策定・運用が開始された。

国土交通省 関東地方整備局
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, Kanto Regional Development Bureau

令和3年12月17日(金)
利根川水系渇水対策連絡協議会
荒川水系渇水調整協議会
(事務局：関東地方整備局)

記者発表資料

関東初の「渇水対応タイムライン」策定・運用開始！！
～首都圏を支える利根川水系及び荒川水系で渇水への備えを強化～

- 利根川水系及び荒川水系の渇水対応については、令和元年8月に策定した東京2020オリンピック・パラリンピック渇水対応行動計画を実施するなど、取り組みを行ってきたところです。
- この度、同計画の取り組み結果を踏まえ、昨日、利根川水系渇水対策連絡協議会及び荒川水系渇水調整協議会を開催※し、渇水対応タイムラインの策定及び運用を開始しました。
- 気候変動等の影響により渇水のリスクが懸念される中、今後関係者の連携や地域が一体となった異常渇水等への対応が更に重要となることから、「利根川水系渇水対応タイムライン」及び「荒川水系渇水対応タイムライン」を策定し、12月16日より運用開始しました。
- 渇水対応タイムラインは、危機的な渇水に備えるため、各々の関係者の立場毎に、渇水の初期から徐々に深刻化していく状況(渇水シナリオ)に沿って、「渇水時の影響や被害を軽減するための対策とその時期」を示した行動計画です。
- 今後、事前に示された各対策を各機関が適切に実施することで、**危機的な渇水が発生した際の被害軽減が期待できます。**



平成28年渇水(矢木沢ダム)

※ 今回の協議会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、「書面による議事」としました。
※ 協議会HP：https://www.ktr.mlit.go.jp/river/shihon/river_shihon00000150.html

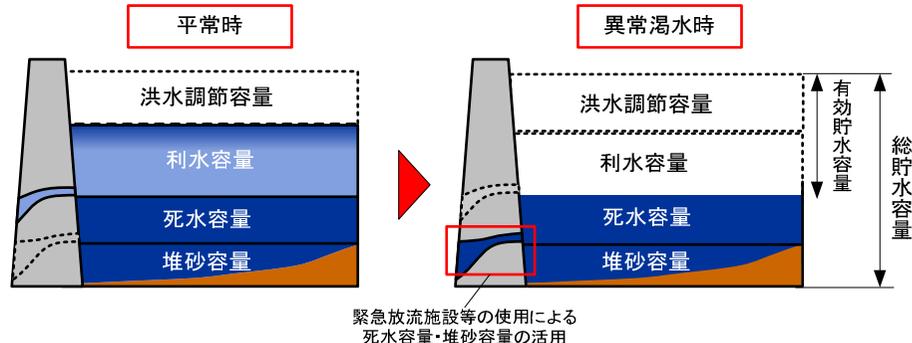
荒川水系渇水対応タイムライン

フェーズ	フェーズⅠ	フェーズⅡ	フェーズⅢ	フェーズⅣ	フェーズⅤ
水資源の状況	平常時	渇水注意期	渇水初期	深刻な渇水期	異常渇水期
貯水量 (荒川4ダム)	70百万m ³ 以上	70百万m ³ ～48百万m ³	48百万m ³ ～26百万m ³		26百万m ³ 以下
国土交通省、農林水産省、東京都、埼玉県及び独立行政法人水資源機構	①荒川水系渇水調整協議会を活用した情報共有及び対策検討・調整				
			①荒川水系渇水調整協議会にて対策検討(取水制限等)		
	国土交通省 独立行政法人水資源機構	②洪水期のダムの弾力的管理の準備			
	②洪水期のダムの弾力的管理・活用容量の貯留水の利用				
水資源の確保対策	国土交通省	③荒川水利利用高度化施設の運用			
	国土交通省 独立行政法人水資源機構	④既存施設の徹底活用(ダム死水容量等の活用)			

※本渇水対応タイムラインは、渇水被害を最小限にとどめるため、河川管理者などが講じる対策、都県が取るべき行動を示したものです。
※本タイムラインは、行動の目安とするため過去の渇水対応を参考に設定したものであり、実際の対応は状況を踏まえ適宜調整します。
※なお、実際の渇水調整や具体的な対応は荒川水系渇水調整協議会で決定されます。

フェーズⅤ

■既存施設の徹底活用の検討(ダム死水容量等の活用)
ダムの死水容量等について緊急利用を検討します。



【利根川水系渇水対策連絡協議会】

- 構成メンバー
- 国土交通省関東地方整備局
 - 経済産業省関東経済産業局
 - 農林水産省関東農政局
 - 東京都
 - 千葉県
 - 埼玉県
 - 茨城県
 - 群馬県
 - 栃木県
 - 独立行政法人水資源機構

【荒川水系渇水調整協議会】

- 構成メンバー
- 国土交通省関東地方整備局
 - 農林水産省関東農政局
 - 東京都
 - 埼玉県
 - 独立行政法人水資源機構

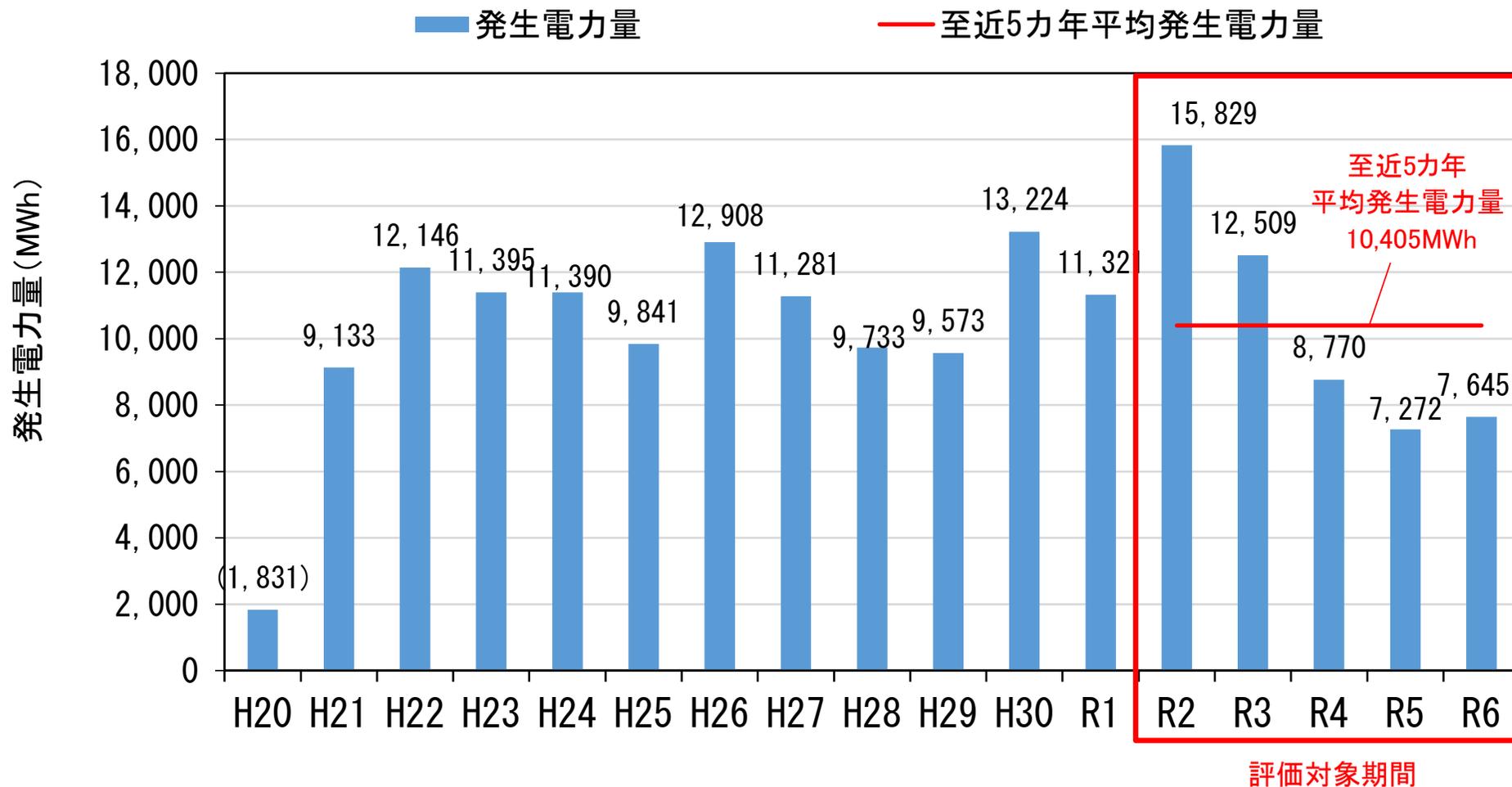
発電実績

- 滝沢ダムでは、最大 $4.25\text{m}^3/\text{s}$ の水を利用し、最大出力 $3,400\text{kW}$ の発電を年間通じて安定的に行っている。(発電は東京発電(株))
- 至近5力年の年平均発生電力量は $10,405\text{MWh}$ であり、約3,000世帯※が1年間に使う電力に相当する。

※一世帯あたりの年間消費電力量を約 $3,531\text{kWh}$ とした場合

【(出典:環境省ウェブサイト「家庭でのエネルギー消費量について

地方別世帯当たり年間電気消費量(固有単位)(令和4年度) 関東】

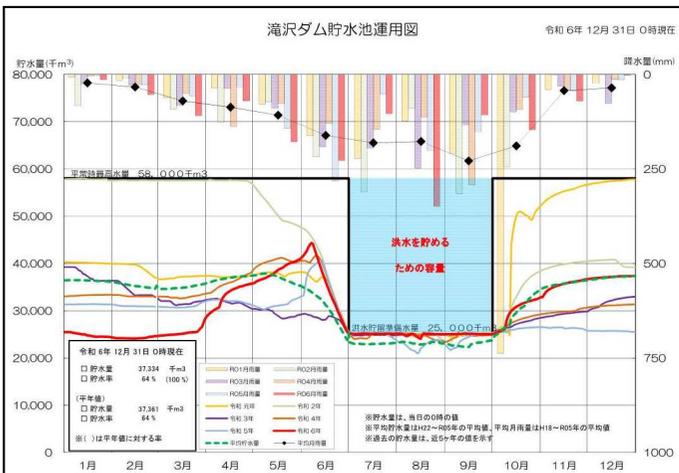


※東京発電(株)の管理開始がH20年10月からのため、H20年の発生電力量は少なくなっている。

利水補給に関する情報の発信

- ホームページ、記者発表及びX(旧Twitter)などを通じて広く水源情報や利水補給などの情報を発信し、あわせて節水啓発につながる呼びかけを行っている。

水源状況の情報発信(滝沢ダム貯水池運用図)



出典：記者発表荒川ダム総合管理所ホームページ

節水啓発

荒川ダム総合管理所 (浦山ダム・滝沢ダム... @jwa_arak... · 2021年7月28日 ...)

【オリンピックと濁水】
1964年大会の目前で「東京砂漠」と呼ばれる大濁水が起きました。節水率は50%にも及び、昼間も断水し、プールや水洗便所の使用禁止、水を多く使うお店も次々と休業となり、非常に大きな影響を与えました。
2021年においても節水を心がけましょう！
#オリンピック #濁水

出典：X(旧Twitter)

記者発表(参考:H29濁水)

「荒川ダム総合管理所濁水対策本部」を設置 ～節水にご協力をお願いします～

浦山ダム・滝沢ダムを管理する独立行政法人水資源機構荒川ダム総合管理所では、平成29年7月4日(火)9時、国土交通省荒川上流河川事務所濁水対策支部の設置と同時に「荒川ダム総合管理所濁水対策本部」を設置しました。

ダムでは、降雨で河川に豊富な水があるときに蓄え、雨が降らずに下流河川の流量が減少したとき、不足する水をダムから補給することで皆さんの生活を支えています。

荒川水系では、流域で降水量が少ない状態が続いており、河川の流量が減少しています。このため浦山ダム・滝沢ダムでは、必要な水の補給を続けており、貯水量が減少傾向にあります。

当管理所では、今後も降雨、河川の流況等の情報をきめ細かに把握するとともに関係機関と緊密に連携して、施設の適切な運用、水源情報の提供等に努めて参ります。

限られた水資源を有効に活用するため、引き続き節水へのご理解とご協力をお願いいたします。

※関連情報はホームページにて随時更新しています。

- 水資源機構管理施設の濁水情報、濁水対策本部の設置状況
<http://www.water.go.jp/honsya/honsya/suigen/kassui/index.html>
- 浦山ダム・滝沢ダムに関する詳細情報
<http://www.water.go.jp/kanto/arakawa/realtime/index.html>
- 荒川4ダムの貯水状況
<http://www.ktr.mlit.go.jp/arajo/arajo00698.html>

平成29年7月4日
独立行政法人 水資源機構
荒川ダム総合管理所

発表記者クラブ
秩父記者クラブ

問い合わせ先
独立行政法人水資源機構 荒川ダム総合管理所 総務課長 大岩
住所：埼玉県秩父市荒川久那4041
電話：0494-23-1431

出典：記者発表荒川ダム総合管理所ホームページ

濁水情報の発信(参考:H29濁水)

話題のポスト 最新 アカウント メディア リスト

荒川ダム総合管理所 (浦山ダム・滝沢ダム... @jwa_arak... · 2017年8月25日 ...)

荒川ダム総合管理所では、7月4日に濁水対策本部を設置し、各種濁水対応を行ってききましたが、本日9時をもって荒川水系の取水制限が全面解除されたことを受け、同日時をもって濁水対策本部を解散しました。節水へのご協力、ありがとうございました。
water.go.jp/kanto/arakawa/...

ダム貯水池の情報 (8月26日 0時現在)

浦山ダム		滝沢ダム	
貯水位	EL366.41m	貯水位	EL531.19m
貯水量	28,098千m ³	貯水量	19,955千m ³
貯水率	85.1%	貯水率	79.8%

貯水池運用状況PDF 貯水池運用状況PDF

平成29年8月26日撮影 平成29年8月26日撮影

出典：X(旧Twitter)

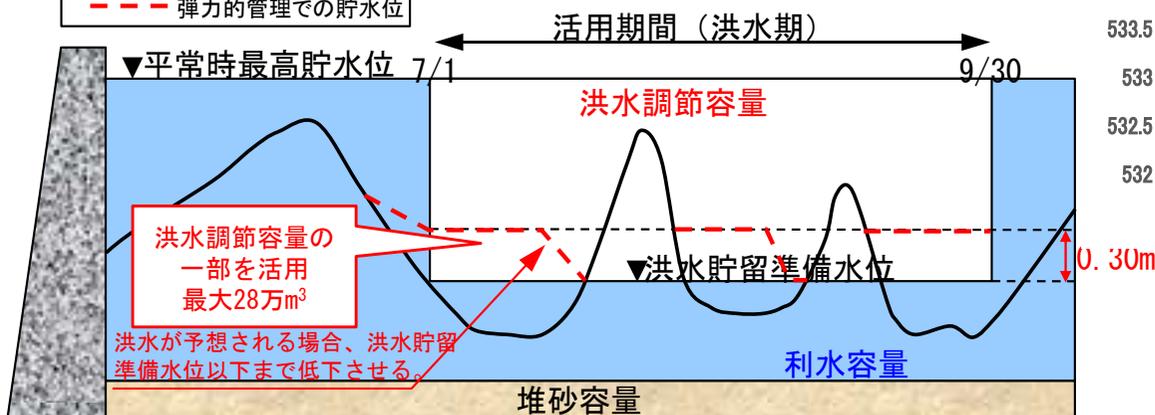
弾力的管理試験の取組

- 滝沢ダムでは、洪水調節に支障を及ぼさない範囲で、洪水調節容量の一部に流水を貯留し、これを適切に放流することにより、ダム下流の河川環境の向上、異常渇水時の流水の正常な機能を維持するための流量の補給や水質事故の希釈用水の補給等を行うとともに、放流水を用いた水力発電の活用を図る弾力的管理試験を平成30年度洪水期から行っている。

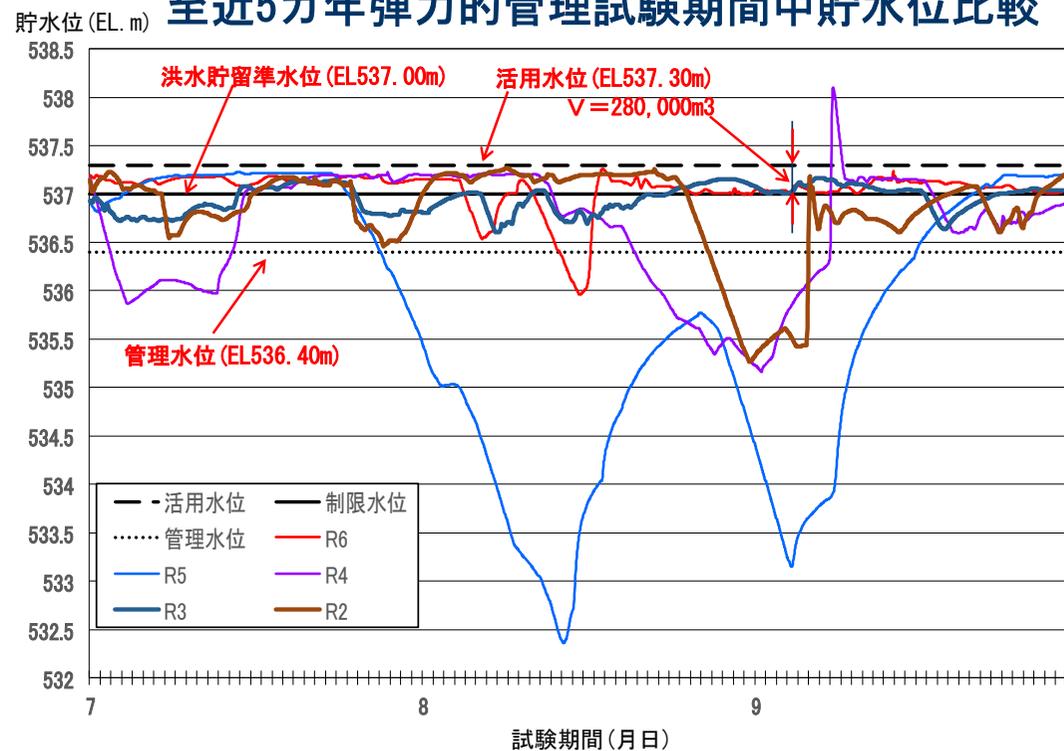
滝沢ダム弾力的管理試験の概要

- ◇ 活用期間
7/1～9/30
- ◇ 活用水位の上限
EL.537.30m (洪水貯留準備水位 + 0.30m)
- ◇ 活用容量の上限
28万 m^3
- ◇ 活用放流方法
フラッシュ放流、異常渇水時の流水の正常流量の補給、水質事故の希釈用水の補給、発電

— 通常の管理での貯水位
- - - 弾力的管理での貯水位



至近5カ年弾力的管理試験期間中貯水位比較



- 弾力的管理活用容量は、滝沢ダムの運用高度化の取組に関する容量としても兼ねており、令和5年度より洪水調節を行った場合には、発電に資する洪水後後期放流活用操作を行うこととなっている。

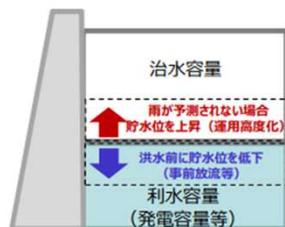
■ 国土交通省では、治水機能の強化と水力発電の促進の両立に加え、ダムが立地する地域の振興にも官民連携で取り組む、「ハイブリッドダム」の取組を進めている。

取組内容

(1) ダムの運用の高度化

気象予測も活用し、治水容量の水力発電への活用を図る運用を実施。

〔・洪水後期放流の工夫
・非洪水期の弾力的運用〕 など



令和5年度の取組

国土交通省、水資源機構管理の72ダムで試行。運用高度化に伴うルール化の検討。

令和6年度以降

国土交通省、水資源機構管理の全ての可能なダムで試行を継続し、運用の高度化の**本格実施**を目指す。

発電

※運用の高度化の試行による増電量

○令和4年度実績

6ダムで試行し、**215万kWh** (一般家庭約500世帯の年間消費電力に相当) を増電

○令和5年度試行

72ダムで試行し、**約2千万kWh** (同約5千世帯分) の増電を想定

(2) 既設ダムの発電施設の新増設

既設ダムにおいて、発電設備を新設・増設し、水力発電を実施。



発電設備のイメージ

国土交通省管理の3ダム(湯西川ダム、尾原ダム、野村ダム)で、ケーススタディを実施し、事業スキーム、公募方法を検討。民間事業者等からの意見聴取を実施。

発電施設の新設・増設を行う事業の**事業化**(新たに参画する民間事業者等の公募)を目指す。併せて、地域振興への支援にも取り組む。

発電

(3) ダム改造・多目的ダムの建設

堤体のかさ上げ等を行うダム改造や多目的ダムの建設により、治水機能の強化に加え、発電容量の設定などにより水力発電を実施。



ダムのかさ上げによる治水機能の強化と水力発電の増強

治水と発電、地域振興を両立させる事業内容を検討。

かさ上げを行う糠平ダム再生事業(R6新規事業)等で増電を検討。ダム改造、多目的ダム建設を推進。

治水

発電

◎上記について官民連携で地域振興への支援にも取り組む

治水

ダム改造、多目的ダム建設の推進により、治水機能を強化するとともに水力発電の促進を目指す

発電

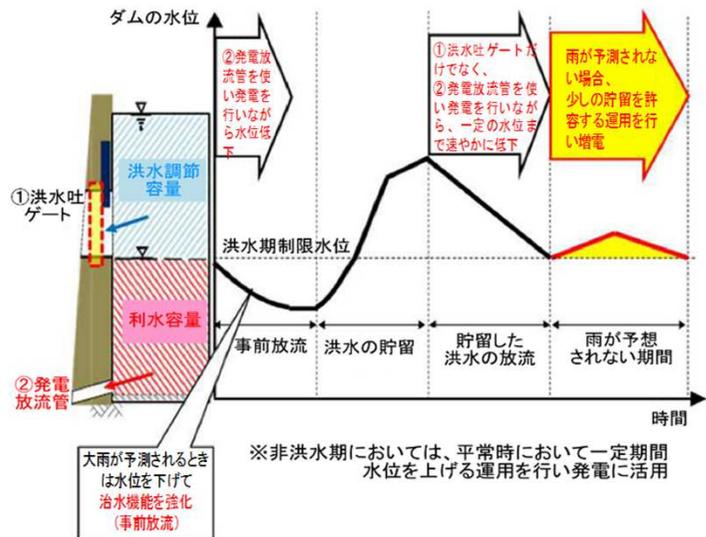
増電量の目標等を定め、R6にダム運用高度化の本格実施、発電施設の新設・増設を行う事業の事業化を目指し、カーボンニュートラルに貢献

参考:ハイブリッドダムに関する取組(2) 国土交通省が取り組むハイブリッドダム

利水補給11

- 令和4年度に国土交通省が管理する6ダムで試行を実施。
- 令和5年度には国土交通省、水資源機構が管理する計72ダムに試行を拡大。

<洪水後期放流の工夫>



運用高度化の試行による増電量

○令和4年度において**6ダム(8回※)**で試行し、**215万kWh(一般家庭約500世帯の年間消費電力に相当)**を増電

○令和5年度に試行する**72ダム**において年に1回、令和4年度の試行ダムと同程度の増電を実施した場合を仮定すると、**増電量は約2千万kWh(同約5千世帯分)と想定**

※月山ダムと横山ダムでは2回、その他のダムでは1回試行

<令和5年度に試行を実施予定のダム>

うち令和4年度に ● 洪水後期放流の工夫
■ 非洪水期の弾力的運用を試行したダム

運用高度化実施ダム	水系	河川名	所在地	ダム管理者
大雪	石狩川	石狩川	北海道	北海道開発局
金山	石狩川	空知川	北海道	北海道開発局
豊平峡	石狩川	豊平川	北海道	北海道開発局
定山溪	石狩川	小樽内川	北海道	北海道開発局
瀧川	石狩川	瀧川	北海道	北海道開発局
十勝	十勝川	十勝川	北海道	北海道開発局
札内川	十勝川	札内川	北海道	北海道開発局
美利河	後志利別川	後志利別川	北海道	北海道開発局
二風谷	沙流川	沙流川	北海道	北海道開発局
岩尾内	天塩川	天塩川	北海道	北海道開発局
浅瀬石川	岩木川	浅瀬石川	青森県	東北地方整備局
胆沢	北上川	胆沢川	岩手県	東北地方整備局
●四十四田	北上川	北上川	岩手県	東北地方整備局
田瀬	北上川	猿ヶ石川	岩手県	東北地方整備局
湯田	北上川	和賀川	岩手県	東北地方整備局
御所	北上川	垂石川	岩手県	東北地方整備局
唎子	北上川	江合川	宮城県	東北地方整備局
釜房	名取川	碓石川	宮城県	東北地方整備局
七ヶ宿	阿武隈川	白石川	宮城県	東北地方整備局
■玉川	雄物川	玉川	秋田県	東北地方整備局
●月山	赤川	梵字川	山形県	東北地方整備局
白川	最上川	置賜白川	山形県	東北地方整備局
寒河江	最上川	寒河江川	山形県	東北地方整備局
川俣	利根川	鬼怒川	栃木県	関東地方整備局
川治	利根川	鬼怒川	栃木県	関東地方整備局
五十里	利根川	男鹿川	栃木県	関東地方整備局
矢木沢	利根川	利根川	群馬県	水資源機構
藤原	利根川	利根川	群馬県	関東地方整備局
蕨原	利根川	片品川	群馬県	関東地方整備局
下久保	利根川	神流川	群馬県	水資源機構
草木	利根川	渡良瀬川	群馬県	水資源機構
●ハツ場	利根川	吾妻川	群馬県	関東地方整備局
二瀬	荒川	荒川	埼玉県	関東地方整備局
滝沢	荒川	中津川	埼玉県	水資源機構
宮ヶ瀬	相模川	中津川	神奈川県	関東地方整備局
●大石	荒川	大石川	新潟県	北陸地方整備局

運用高度化実施ダム	水系	河川名	所在地	ダム管理者
小浜	天竜川	小浜川	長野県	中部地方整備局
味噌川	木曾川	木曾川	長野県	水資源機構
●横山	木曾川	揖斐川	岐阜県	中部地方整備局
徳山	木曾川	揖斐川	岐阜県	水資源機構
小里川	庄内川	小里川	岐阜県	中部地方整備局
矢作	矢作川	矢作川	愛知県	中部地方整備局
蓮	櫛田川	蓮川	三重県	中部地方整備局
比奈知	淀川	名張川	三重県	水資源機構
青蓮寺	淀川	青蓮寺川	三重県	水資源機構
真名川	九頭竜川	真名川	福井県	近畿地方整備局
高山	淀川	名張川	京都府	水資源機構
一庫	淀川	一庫大路次川	兵庫県	水資源機構
室生	淀川	宇陀川	奈良県	水資源機構
布目	淀川	布目川	奈良県	水資源機構
大滝	紀の川	紀の川	奈良県	近畿地方整備局
菅沢	日野川	印賀川	鳥取県	中国地方整備局
苫田	吉井川	吉井川	岡山県	中国地方整備局
八田原	芦田川	芦田川	広島県	中国地方整備局
温井	太田川	滝山川	広島県	中国地方整備局
土師	江の川	江の川	広島県	中国地方整備局
長安口	那賀川	那賀川	徳島県	四国地方整備局
池田	吉野川	吉野川	徳島県	水資源機構
石手川	重信川	石手川	愛媛県	四国地方整備局
柳瀬	吉野川	銅山川	愛媛県	四国地方整備局
野村	肱川	肱川	愛媛県	四国地方整備局
鹿野川	肱川	肱川	愛媛県	四国地方整備局
新宮	吉野川	銅山川	愛媛県	水資源機構
富郷	吉野川	銅山川	愛媛県	水資源機構
早明浦	吉野川	吉野川	高知県	水資源機構
大渡	仁淀川	仁淀川	高知県	四国地方整備局
中筋川	渡川	中筋川	高知県	四国地方整備局
横瀬川	渡川	横瀬川	高知県	四国地方整備局
松原	筑後川	筑後川	大分県	九州地方整備局
耶馬溪	山国川	山移川	大分県	九州地方整備局
緑川	緑川	緑川	熊本県	九州地方整備局
鶴田	川内川	川内川	鹿児島県	九州地方整備局

(令和5年度に検討を開始するダムを含む)

利水補給のまとめ

- 滝沢ダムは、浦山ダム、二瀬ダム、荒川貯水池と相まって、河川管理者からの補給指示に基づき、流況を監視しながら適切に利水補給を行っている。 利水補給4
- 至近5カ年では取水制限をとまなう渇水はなかった。 利水補給6
- 至近5カ年の年平均発生電力量は、年間平均3,000世帯分の消費電力に相当する。 利水補給7
- ホームページやXなどを通じて、広く水源状況や利水補給などの情報を発信している。 利水補給8

【今後の方針】

- 滝沢ダムは、浦山ダム、二瀬ダム及び荒川貯水池と連携を図りながら、効率的なダム運用を引き続き実施していく。
- 今後も利水補給等について、住民等へ分かりやすい情報提供を引き続き実施していく。

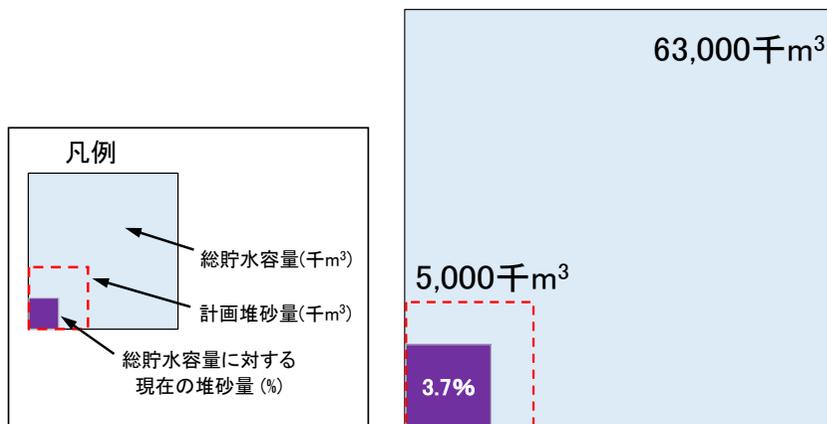
堆砂状況

- 堆砂容量は、湛水前に地すべり対策工として1,200千 m^3 使用。
- 令和6年度までの滝沢ダム堆砂量は2,357千 m^3 であり、計画堆砂量5,000千 m^3 に対する堆砂率は47.1%である。
- 試験湛水を開始した平成19年度から令和6年度にかけては、実績平均堆砂量が37.5千 m^3 /年、年計画堆砂量38千 m^3 /年に対して1.0倍となっている。
- 至近5力年では、実績年平均堆砂量が25.8千 m^3 /年、年計画堆砂量の0.7倍程度で推移している。

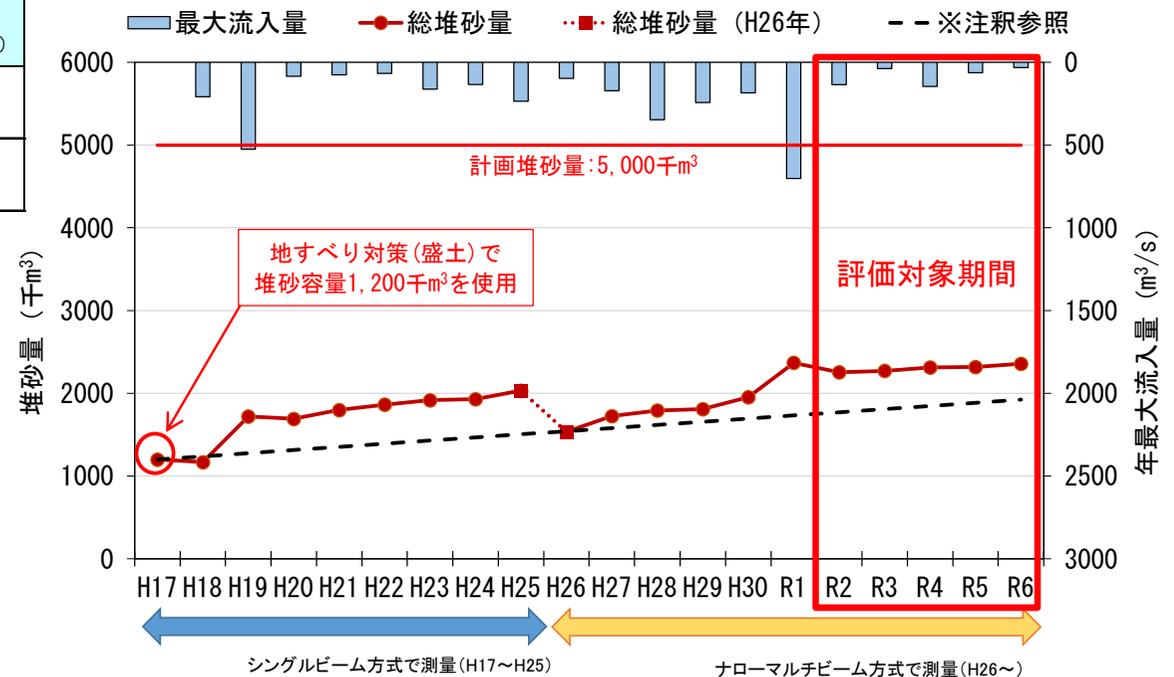
ダム名	計画堆砂年	経過年数 (R6時点)	現在(R6)の 堆砂量 (千 m^3)	総貯水容量 (千 m^3)	全堆砂率 ^{※1}	年計画堆砂量 (千 m^3 /年)
				計画堆砂量 (千 m^3)	堆砂率 ^{※2}	至近5力年の 年実績堆砂量(千 m^3 /年)
滝沢	100	19	2,357	63,000	3.7	38
				5,000	47.1	25.8

※1 全堆砂率=(現在の堆砂量)/(総貯水容量)

※2 堆砂率=(現在の堆砂量)/(計画堆砂量)



総貯水容量に対する堆砂量



※図の黒点線は、堆砂が一定のペースで進み、計画堆砂年で計画堆砂量(100年)に達すると想定して引いた直線

堆砂対策(1)

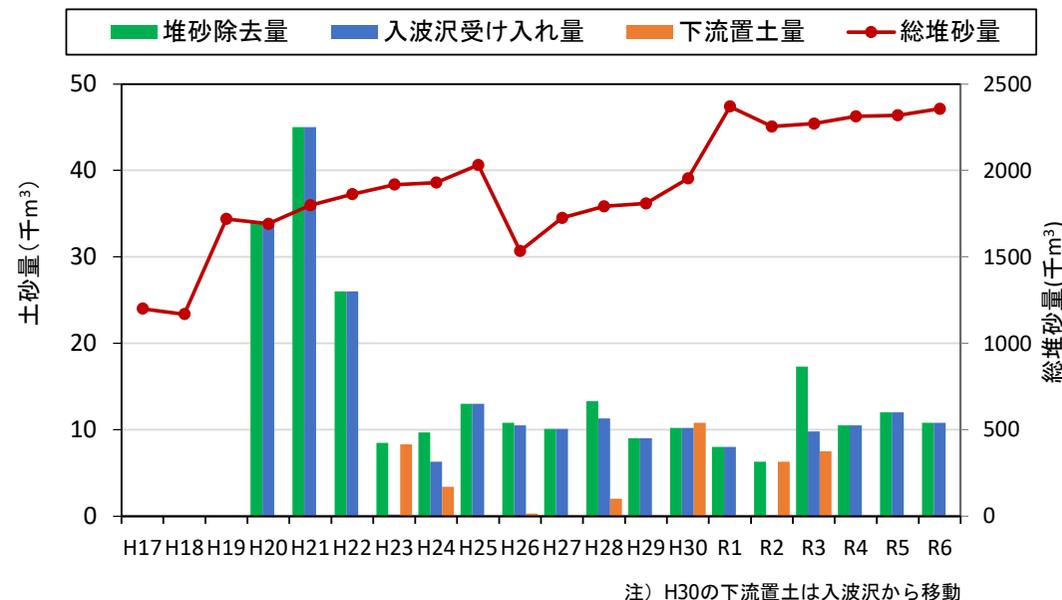
- 令和6年度までに除去した堆砂量は255千 m^3 であり、令和6年度時点の堆砂量の11%に相当する。
- 除去した堆砂量のうち、多くを受入地(入波沢)で処分するほか、土砂還元として下流河川へ搬出している。下流河川へ搬出した量は39千 m^3 で、全体の15%に相当する。

◆ 滝沢ダムの堆砂除去量(令和6年度までの累計)

総除去量 (千 m^3)	入波沢の受け入れ量 (千 m^3)	下流河川への置土 (千 m^3)
255	216	39

◆ 入波沢の進捗率(令和6年度までの累計)

入波沢に確保している量 (千 m^3)	入波沢の受け入れ量 (千 m^3)	進捗率
2,800	216	7.7%



滝沢ダムの堆砂除去量の変化



貯砂ダム堆砂除去作業
(令和6年9月6日)



入波沢堆砂搬入作業
(令和6年9月3日)

堆砂対策(2)

- 平成23年度から下流河川環境改善を目的として、下流河川へ置土を実施した。
- 貯砂ダムから下流河川への置土量は、令和6年度までに累計約38.6千 m^3 である。



実施年度	置土量(m^3)		
	年度総量	直下流	柵平
H23	8,300	5,600	2,700
H24	3,400	2,000	1,400
H25	0	0	0
H26	300	0	300
H27	0	0	0
H28	2,000	2,000	0
H29	0	0	0
H30	10,800	8,000	2,800
R1	0	0	0
R2	6,300	6,300	0
R3	7,500	7,500	0
R4	0	0	0
R5	0	0	0
R6	0	0	0
合計	38,600	31,400	7,200



直下流地区
令和6年9月13日

堆砂対策(3)

- ダム貯水池で発生した堆積土砂等の受入れについて、地元自治体等、国土交通省二瀬ダム管理所及び水資源機構荒川ダム総合管理所で、令和元年に協定を締結している。

【協定の概要】

- ① 対象は、ダム貯水池に流入した土砂・流木(チップ、薪等加工物含む)とし、災害復旧、生活基盤の保全並びに産業支援のための造成等。
- ② 土砂・流木がまとまった数量の場合は、自治体の用意した箇所での受入れを可能とし、それ以外は、ダム管理者の土砂等仮置き場で受取り。
- ③ 土砂・流木に関する情報は、平時より共有する。

○協定書締結先は下記の通り

秩父郡市(1市4町)及び秩父広域市町村圏組合
(1市4町:秩父市、横瀬町、皆野町、長瀬町、小鹿野町)



秩父市長との協定締結記念写真

- 令和6年度の滝沢ダム堆砂量は2,357千 m^3 である。これは、計画堆砂量の47.1%にあたる。 堆砂1
- 平成19年度から令和6年度の年実績堆砂量は37.5千 m^3 /年であり、年計画堆砂量38千 m^3 /年の1.0倍程度の速度で堆砂が進行している。至近5カ年では、堆砂は年計画堆砂量の0.7倍程度で推移している。 堆砂1
- 除去した堆砂量は、令和6年度までの累計で255千 m^3 である。 堆砂1
- 除去した堆砂量の15%は、河川の環境改善のため、下流河川へ還元している。 堆砂2-4

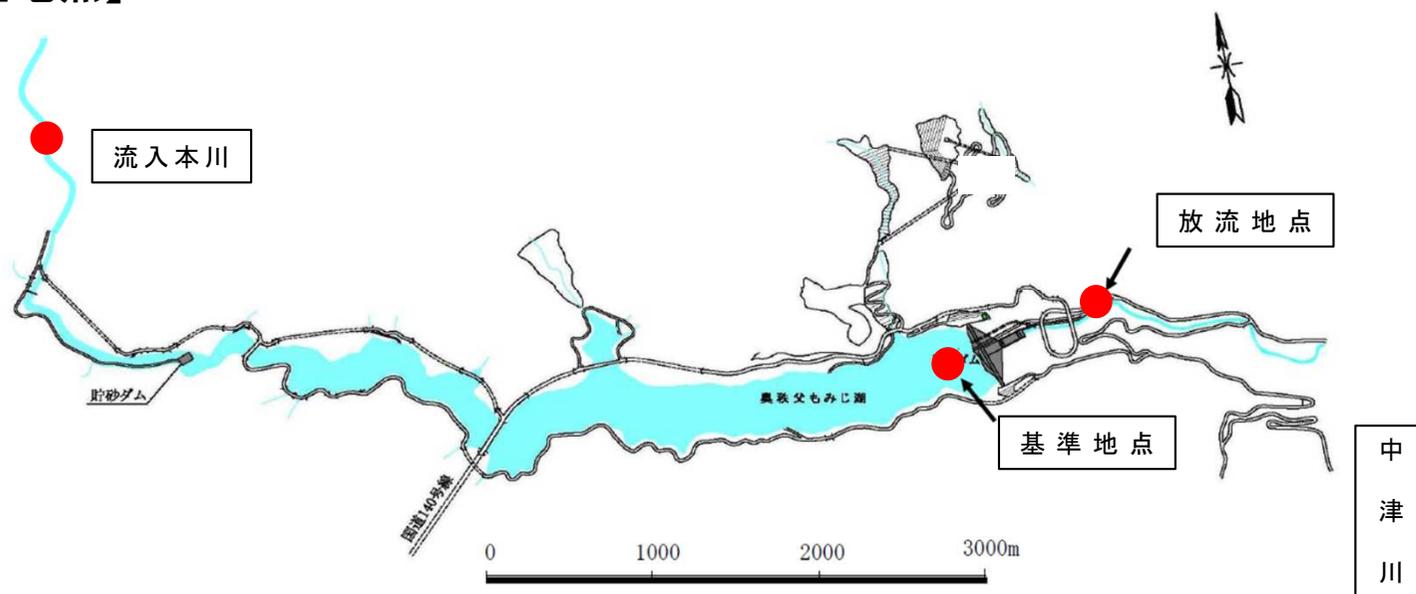
【今後の方針】

- 滝沢ダムの堆砂は、大規模な出水年を除くと概ね計画程度で推移しており、今後も堆砂測量等モニタリング調査による傾向監視と、堆砂除去を引き続き実施していく。
- 大規模な出水により堆砂量が想定堆砂量より大きく増加する場合には、恒久的な堆砂対策について検討を進める。

環境基準類型指定状況

- 滝沢ダムにおいては、流入河川(流入本川)、貯水池内(基準地点)、下流河川(放流地点)において月1回水質調査を実施している。
- 滝沢ダム・中津川において、環境基準の類型指定はされていないため、近傍の二瀬ダムの類型指定である河川AA類型、湖沼A・Ⅲ類型を準用して水質を評価する。

【水質調査地点】



【二瀬ダム及び二瀬ダム流入河川・下流河川の環境基準】

	BOD	COD	pH	SS	DO	大腸菌群数	大腸菌数	T-P
湖沼 A・Ⅲ類型	—	3mg/L 以下	6.5以上 8.5以下	5mg/L 以下	7.5mg/L 以上	1,000MPN /100mL以下	300CFU/1 00mL以下	0.03mg/L 以下
河川 AA類型	1mg/L 以下	—	6.5以上 8.5以下	25mg/L 以下	7.5mg/L 以上	50MPN /100mL以下	20CFU/10 0mL以下	—

注) 大腸菌群数はR4.3以前、大腸菌数はR4.4以降

水質測定項目

- 至近5カ年における水質調査項目・実施頻度は、以下のとおりである。

滝沢ダム水質調査項目一覧(至近5カ年)

項目	下流河川	貯水池内			流入河川
	放流地点	基準地点			流入本川
		表層	中層	底層	
一般項目	濁度	○	○	○	○
	電気伝導度	○	○	○	○
生活項目	pH	○	○	○	○
	DO	○	○	○	○
	BOD	○	○	○	○
	COD	○	○	○	○
	SS	○	○	○	○
	大腸菌群数	○※1	○※1	○※1	○※1
	大腸菌数	○※1	○※1	○※1	○※1
	全亜鉛	○	○	○	○
	総窒素	○	○	○	○
	総リン	○	○	○	○
富栄養化関連項目	ノニルフェノール		○		
	LAS		○		
	アンモニア態窒素		○	○	○
	溶解性総リン		○	○	○
	オルトリン酸態リン		○	○	○
	溶解性オルトリン酸態リン		○	○	○
	クロロフィルa	○	○	○	○
	フェオフィチン		○	○	○
水道関連項目	植物プランクトン		○		
	動物プランクトン		△		
	トリハロメタン生成能		□		
	2-MIB		○		
	ジェオスミン		○		

※1 大腸菌群数: 令和4年3月まで年12回実施それ以降は、大腸菌数に切り替わったため、調査終了
大腸菌数: 令和4年4月より年12回実施

項目	下流河川	貯水池内			流入河川
	放流地点	基準地点			流入本川
		表層	中層	底層	
健康項目	カドミウム	◇	◇		◇
	全シアン	◇	◇		◇
	鉛	◇	◇		◇
	六価クロム	◇	◇		◇
	砒素	○	○		○
	総水銀	◇	◇		◇
	アルキル水銀	◇	◇		◇
	PCB	◇	◇		◇
	ジクロロメタン	◇	◇		◇
	四塩化炭素	◇	◇		◇
	1,2-ジクロロメタン	◇	◇		◇
	1,1-ジクロロエチレン	◇	◇		◇
	シス-1,2-ジクロロエチレン	◇	◇		◇
	1,1,1-トリクロロエタン	◇	◇		◇
	1,1,2-トリクロロエタン	◇	◇		◇
	トリクロロエチレン	◇	◇		◇
	テトラクロロエチレン	◇	◇		◇
	1,3-ジクロロプロペン	◇	◇		◇
	テウラム	◇	◇		◇
	シマジン	◇	◇		◇
	チオベンカルブ	◇	◇		◇
	ベンゼン	◇	◇		◇
	セレン	◇	◇		◇
	硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素		○	○	○
	フッ素	◇	◇		◇
	ホウ素	◇	◇		◇
	1,4-ジオキサン	◇	◇		◇
	アルミニウム	◇	◇		◇
	鉄	◇	◇		◇
	銅	◇	◇		◇
ナトリウム	◇	◇		◇	
マンガン	◇	◇		◇	

※総水銀が検出された場合、アルキル水銀の分析を実施

○ : 年12回測定 (月1回測定) □ : 年4回測定 (2, 5, 8, 11月測定) △ : 年3回測定 (6, 8, 11月測定) ◇ : 年2回測定 (2, 8月測定)

水質状況

- 平成27年～令和元年と至近5力年（令和2～6年）における超過率の傾向を見ると、貯水池中層、底層のDO、下流河川のBOD、貯水池表層のCOD、下流河川のSS、流入河川、貯水池表層及び底層と下流河川の大腸菌群数に低下傾向が、貯水池表層のSS、貯水池底層のSSとT-Pに上昇傾向が認められる。その他は概ね横ばい傾向である。

項目	流入河川		貯水池						下流河川	
			表層		中層		底層			
	H27-R1	R2-6								
pH	0/60	0/60	12/60	14/60	0/60	0/60	0/60	0/60	0/60	1/60
	→		→		→		→		→	
DO	0/60	0/60	1/60	1/60	29/60	26/60	50/60	44/60	0/60	0/60
	→		→		↓		↓		→	
BOD	0/60	0/60	-	-	-	-	-	-	4/60	1/60
	→								↓	
COD	-	-	7/60	2/60	2/60	0/60	2/60	0/60	-	-
			↓		→		→			
SS	0/60	0/60	1/60	4/60	5/60	3/60	24/60	31/60	3/60	0/60
	→		↑		→		↑		↓	
T-P	-	-	2/60	0/60	2/60	0/60	5/60	9/60	-	-
			→		→		↑			
大腸菌群数	40/60	17/27	5/60	0/27	2/60	0/27	5/60	0/27	38/60	12/27
	↓		↓		→		↓		↓	
大腸菌数	-	11/33	-	1/33	-	1/33	-	1/33	-	3/33

注1) n/m : H27～R1と至近5力年（R2～R6）における水質調査回数をm、環境基準を超過した回数をnとした。

注2) H27～R1と至近5力年（R2～R6）における超過率(小数第2位を四捨五入)の傾向を↓:低下傾向 ↑:上昇傾向 →:横ばいとした。

注3) —:該当する環境基準の設定なし。

注4) 大腸菌群数は令和4年3月まで測定。大腸菌数は令和4年4月から測定。

	: 環境基準値の超過回数が10%未満
	: 環境基準値の超過回数が10～25%
	: 環境基準値の超過回数が25～50%
	: 環境基準値の超過回数が50%以上

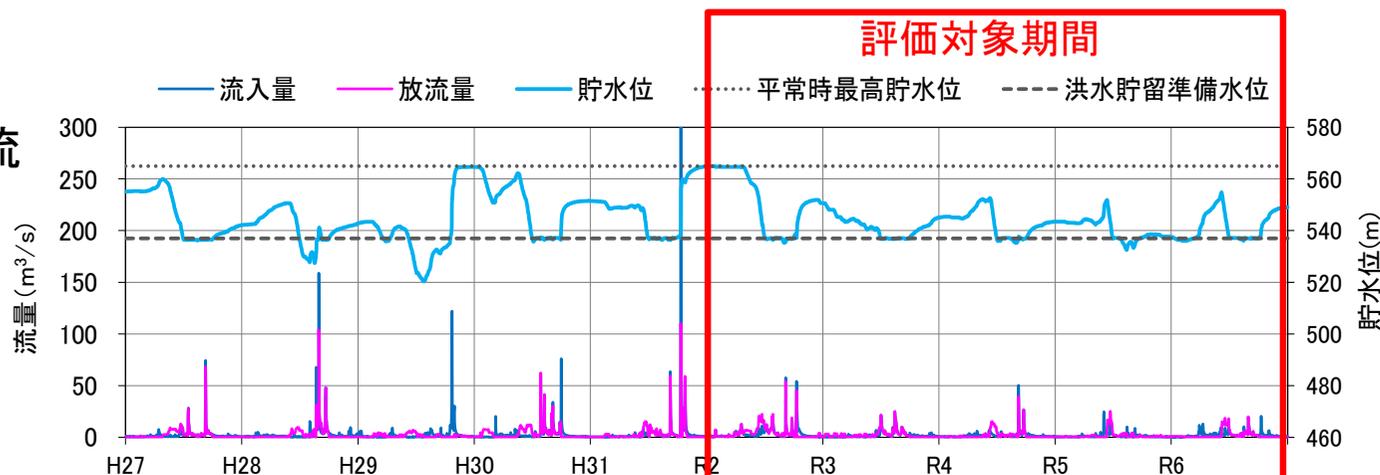
※滝沢ダム、中津川において環境基準の類型指定はされていない。このため、流入河川、下流河川については、近傍の二瀬ダム上流・二瀬ダム下流（中津川合流点まで）の環境基準である河川AA類型の基準値と、貯水池内については、二瀬ダムの環境基準である湖沼A類型、湖沼Ⅲ類型の基準値と比較した。

水質状況：水温

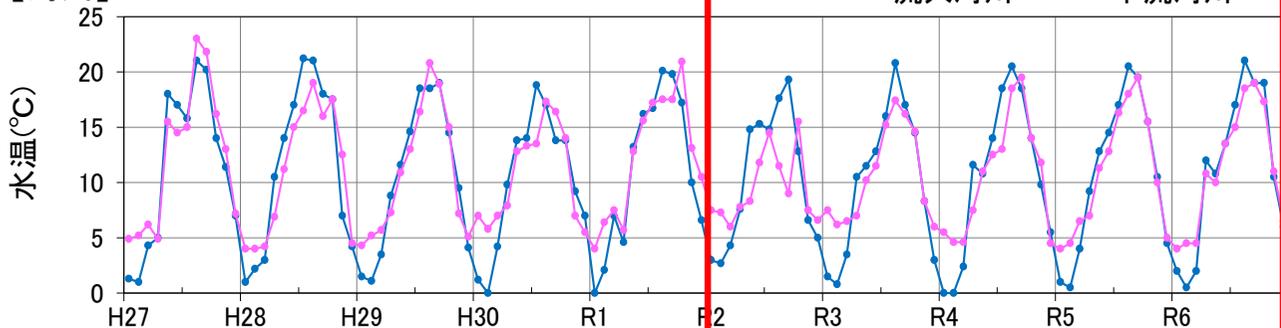
■ 至近5カ年における水温の状況は以下のとおり。

【流入河川・下流河川】

- ・至近5カ年では、夏季は流入河川が高く、冬季は下流河川が高くなっている。
- ・至近5カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。



【河川】



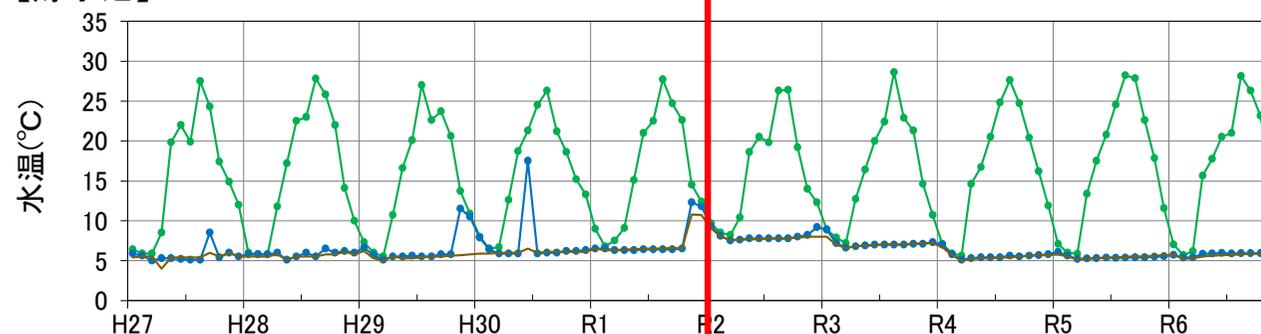
年平均値

水温 °C	流入河川	下流河川
R2	10.3	9.4
R3	10.0	10.6
R4	10.5	10.6
R5	10.8	10.9
R6	11.1	11.2

【貯水池】

- ・表層は季節変化が見られ、底層は年間を通じてほぼ一定である。
- ・至近5カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。

【貯水池】



年平均値

水温 °C	基準地点		
	表層	中層	底層
R2	16.2	8.1	7.9
R3	16.1	7.2	7.1
R4	16.3	5.6	5.5
R5	16.9	5.4	5.5
R6	16.8	5.8	5.7

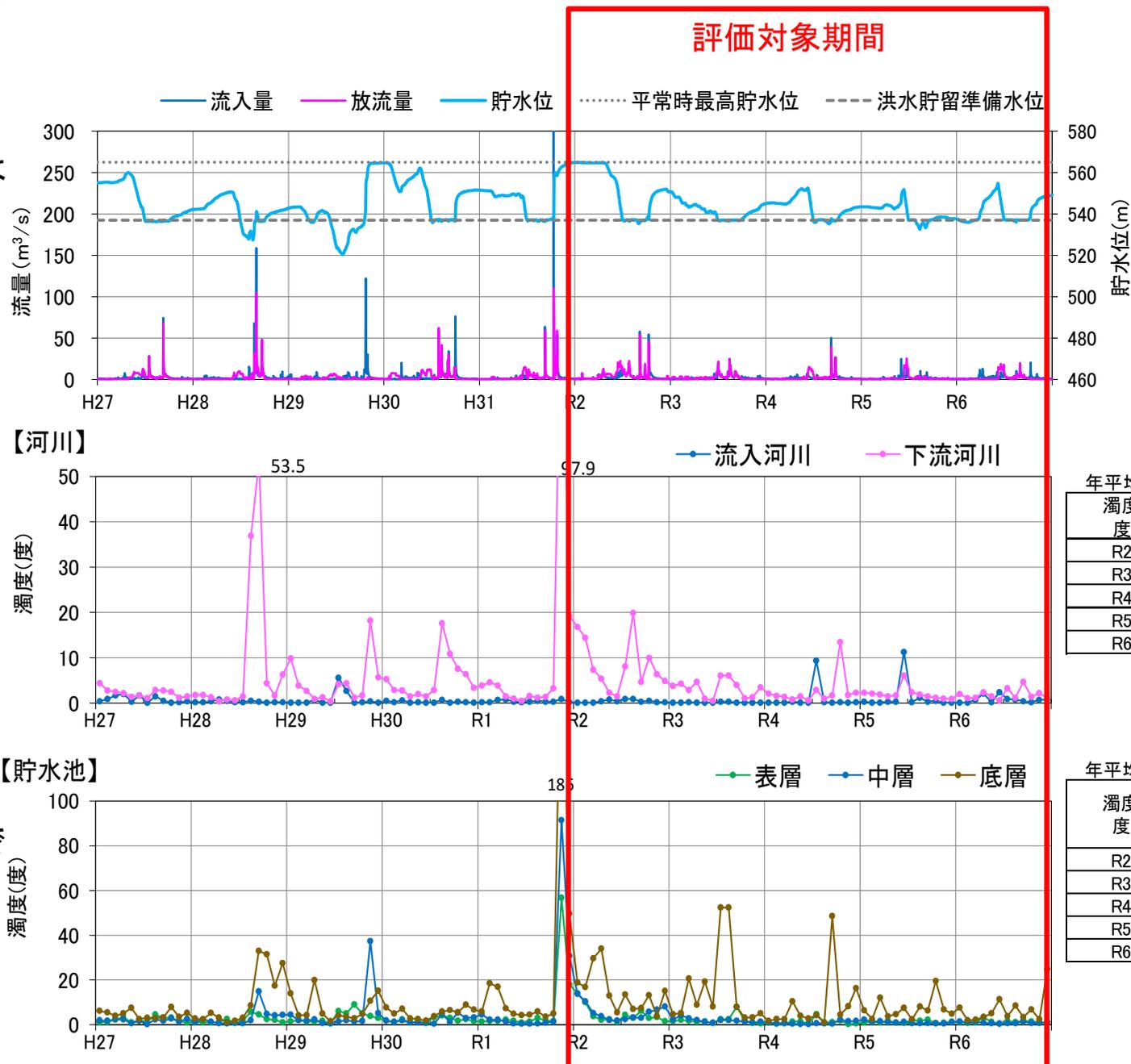
■ 至近5カ年における濁度の状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近5カ年について、流入河川は概ね1度以下で推移し、下流河川は出水による高濁度を除くと概ね1～10度程度で推移した。
- ・令和元年10月及び令和2年9月の出水の影響で濁水長期化が見られた。
- ・至近5カ年の年平均値は流入河川より下流河川のほうが高い。

[貯水池]

- ・至近5カ年の底層は表層に比べて高い値を示した。
- ・令和元年10月の出水によって全層で高濁度の状態となり、表層でも令和2年2月まで濁度10度以上であった。
- ・至近5カ年の表層の年平均値は令和2年と令和3年を除くと1度程度となっている。



水質状況:pH

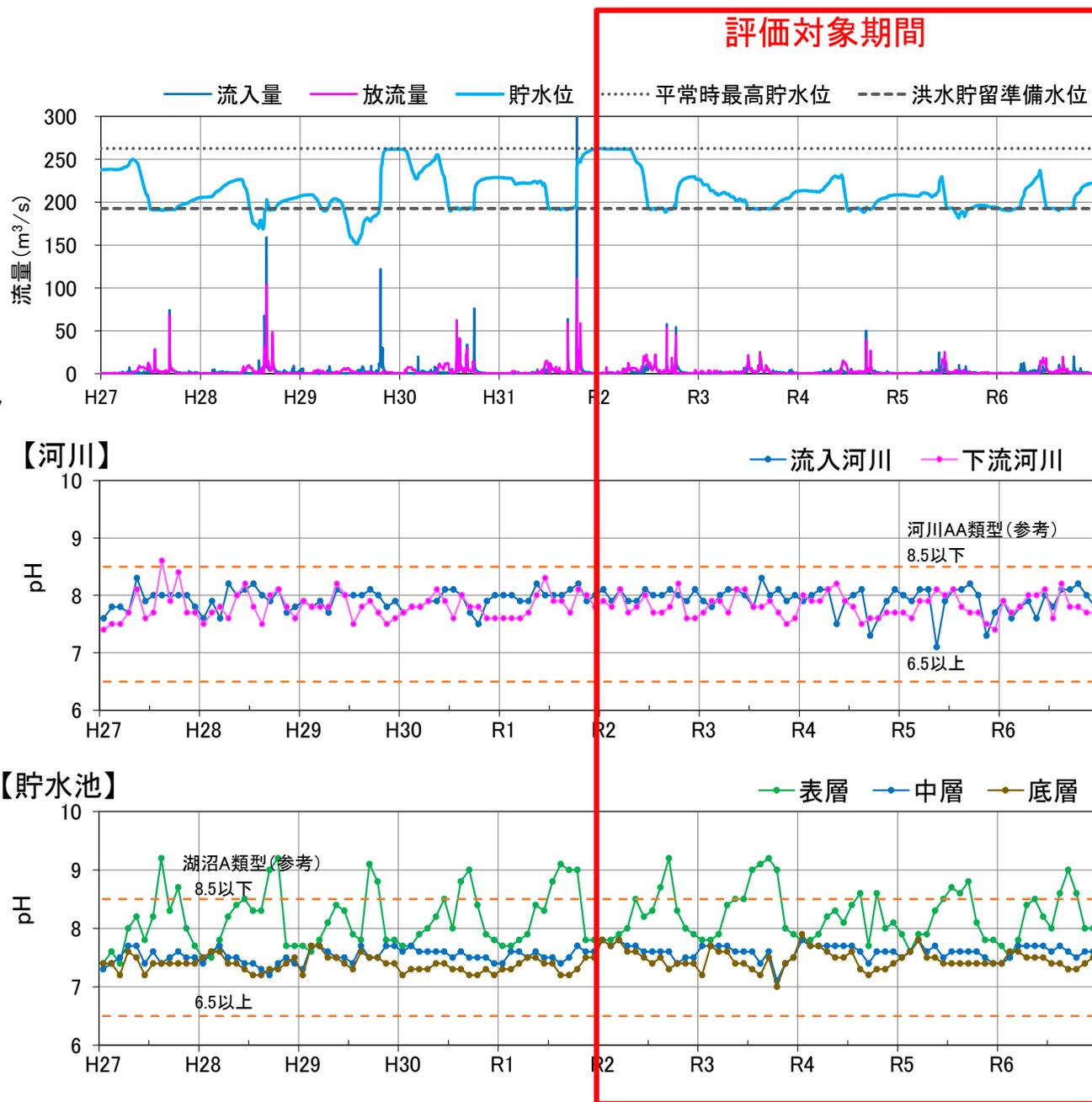
■ 至近5力年におけるpHの状況は以下のとおり。

【流入河川・下流河川】

- ・至近5力年について、流入河川、下流河川ともに環境基準値内で推移している。
- ・至近5力年の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。

【貯水池】

- ・至近5力年の表層は夏季に高くなり環境基準値を超えている。
- ・至近5力年の表層の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。



年平均値

pH	流入河川	下流河川
R2	8.0	7.8
R3	8.0	7.8
R4	7.9	7.8
R5	7.9	7.8
R6	7.9	7.9

赤字: 環境基準の超過

年平均値

pH	基準地点		
	表層	中層	底層
R2	8.2	7.6	7.5
R3	8.4	7.6	7.4
R4	8.1	7.7	7.5
R5	8.2	7.6	7.5
R6	8.2	7.6	7.5

赤字: 環境基準の超過(表層のみ対象)

※pHにおいて、環境基準の超過は環境基準値の範囲外となることを言う。

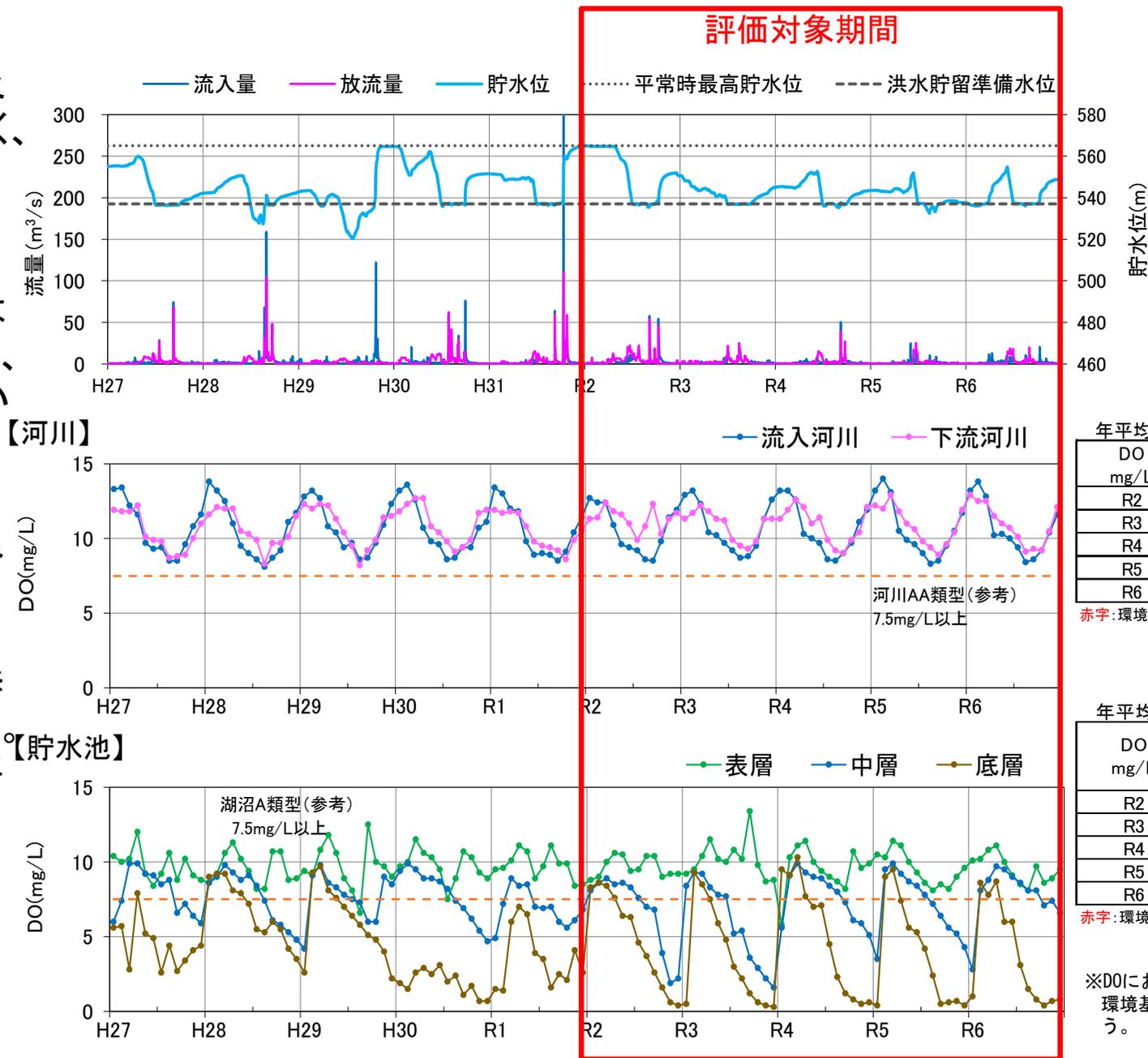
■ 至近5カ年におけるDOの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近5カ年の流入河川及び下流河川は冬季に高く、夏季に低くなる季節変化を示しており、環境基準値以上で推移している。
- ・至近5カ年の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・至近5カ年の表層は概ね環境基準値以上で推移している。
- ・至近5カ年の底層は冬季に低下傾向になっている。
- ・表層の至近5カ年の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。



※DOにおいて、環境基準の超過は環境基準値未満となることを言う。

水質状況：BOD

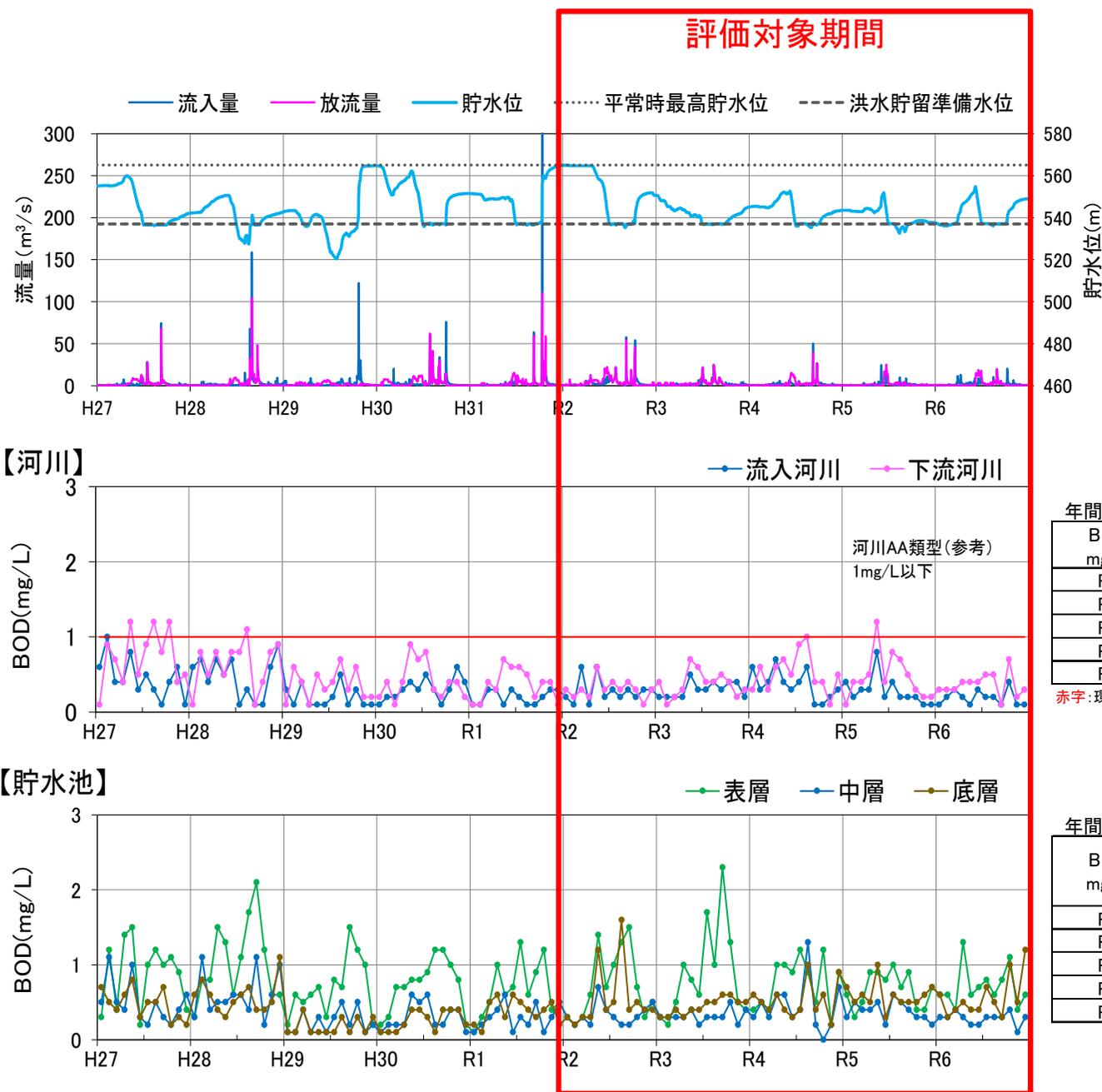
■ 至近5カ年におけるBODの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近5カ年の流入河川及び下流河川は概ね環境基準値以下で推移している。
- ・至近5カ年の年間75%値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・至近5カ年の貯水池内は夏季に高くなり、秋季以降低くなる季節変化となっている。
- ・至近5カ年の表層の年間75%値は概ね同程度で推移している。



水質状況：COD

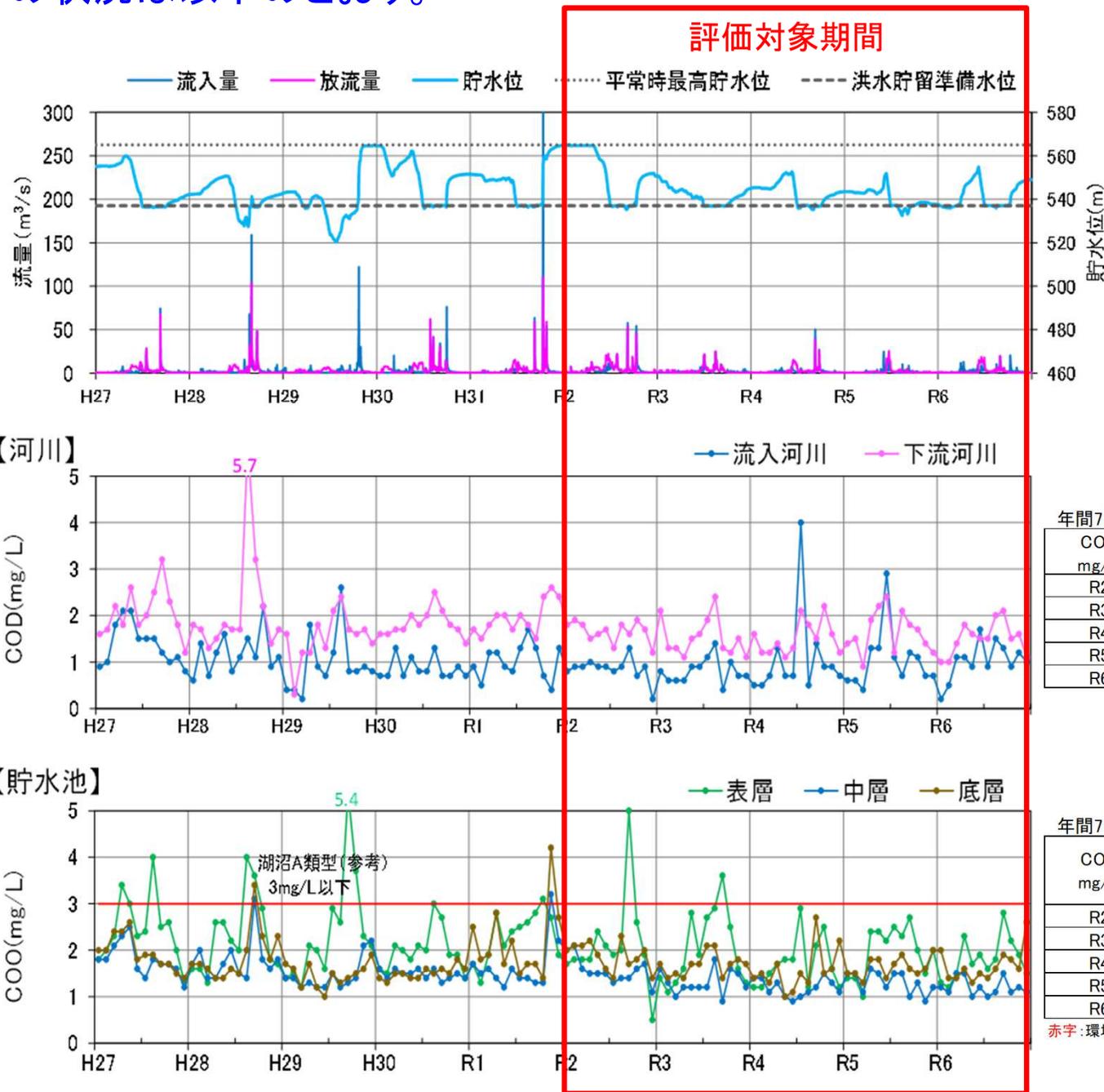
■ 至近5カ年におけるCODの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近5カ年の流入河川及び下流河川は概ね同程度で推移している。
- ・至近5カ年の年間75%値は概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・至近5カ年の表層及び底層は、夏季に高くなり、秋季以降低くなる季節変化となっており、概ね環境基準値以下で推移している。
- ・至近5カ年の表層の年間75%値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。



水質状況:SS

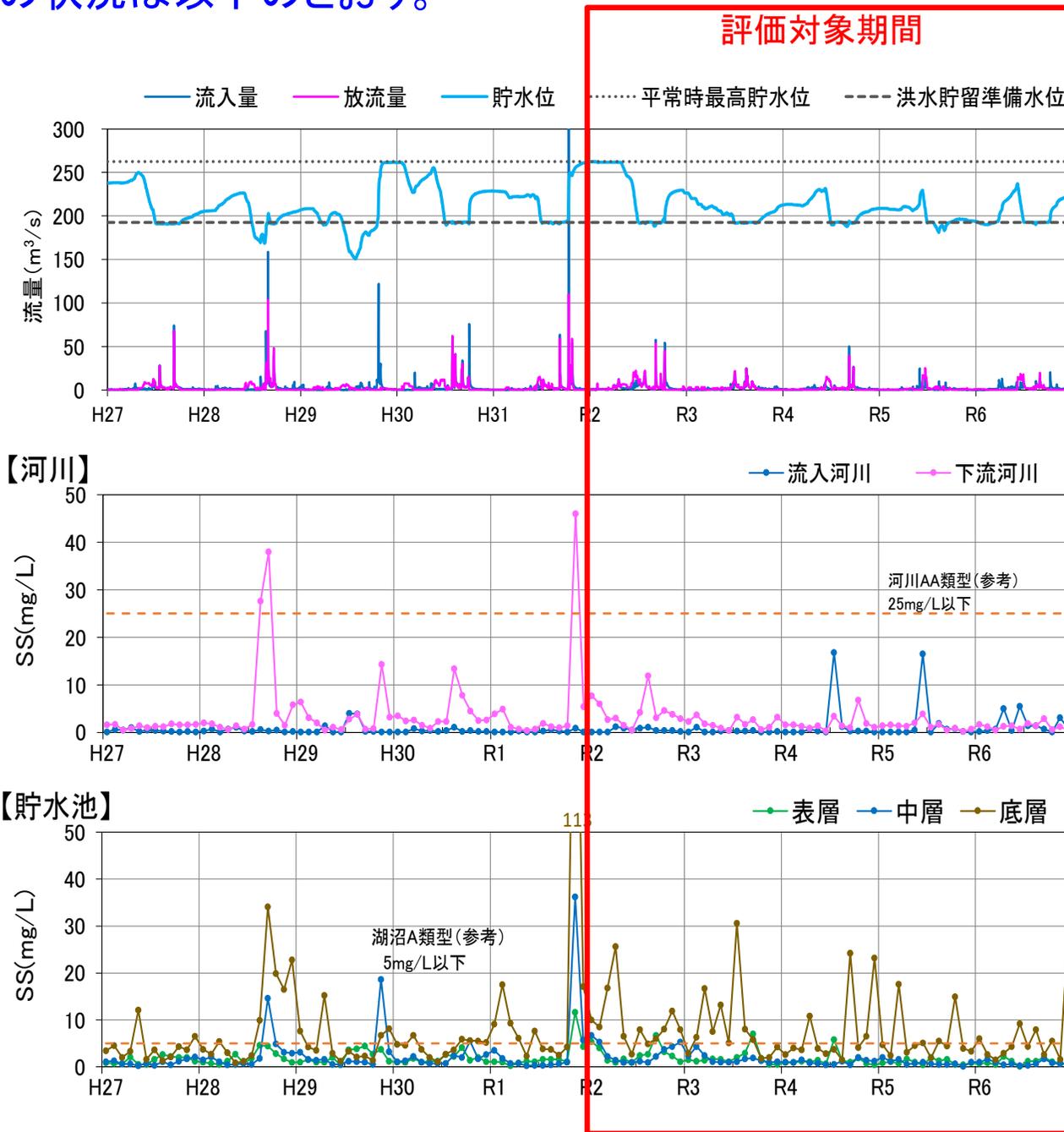
■ 至近5カ年におけるSSの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近5カ年の流入河川及び下流河川は、環境基準値以下で推移している。
- ・至近5カ年の年平均値は環境基準を満足しており、下流河川のほうが高めで推移している。

[貯水池]

- ・至近5カ年の表層は、概ね環境基準値以下で推移している。
- ・底層は環境基準値を超過することが多い。
- ・至近5カ年の表層の年平均値は、環境基準を満足している。



貯水位(m)

年平均値

SS mg/L	流入河川	下流河川
R2	0.5	4.3
R3	0.3	1.9
R4	1.7	1.9
R5	1.8	1.4
R6	1.6	1.3

赤字: 環境基準の超過

年平均値

SS mg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
R2	2.7	2.9	9.7
R3	1.9	1.7	8.7
R4	1.4	1.0	7.6
R5	1.0	0.9	5.9
R6	1.0	0.8	6.5

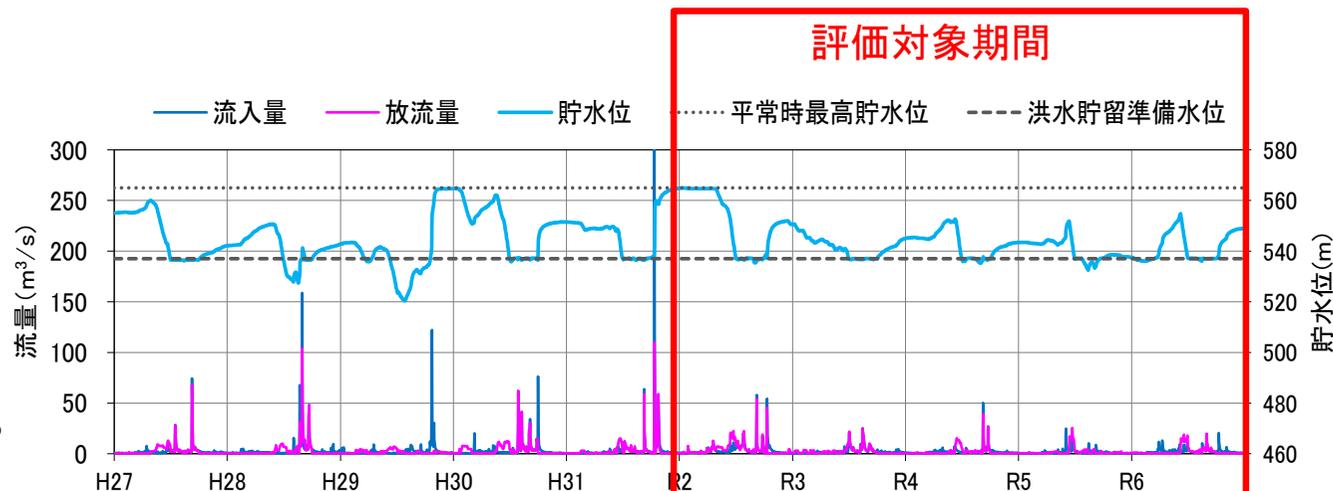
赤字: 環境基準の超過(表層のみ対象)

水質状況:T-N

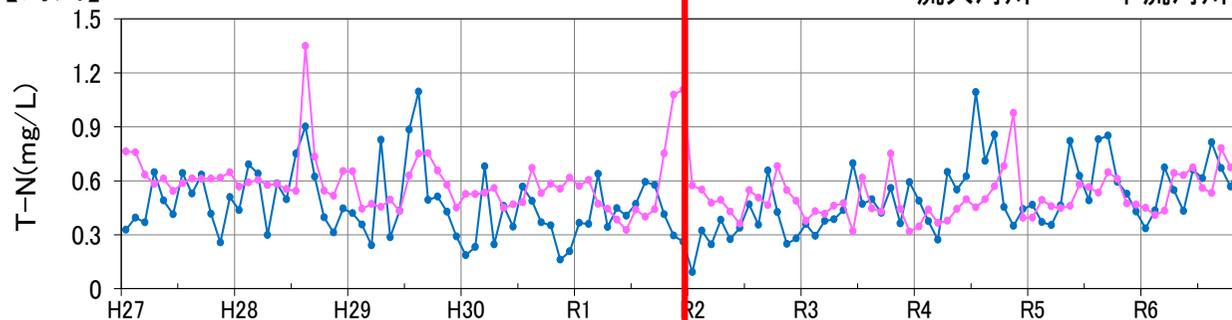
- 至近5力年におけるT-Nの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近5力年の流入河川は、夏季に高くなる季節変化がみられる。
- ・至近5力年の年平均値は流入河川、下流河川ともに同程度で推移している。



【河川】



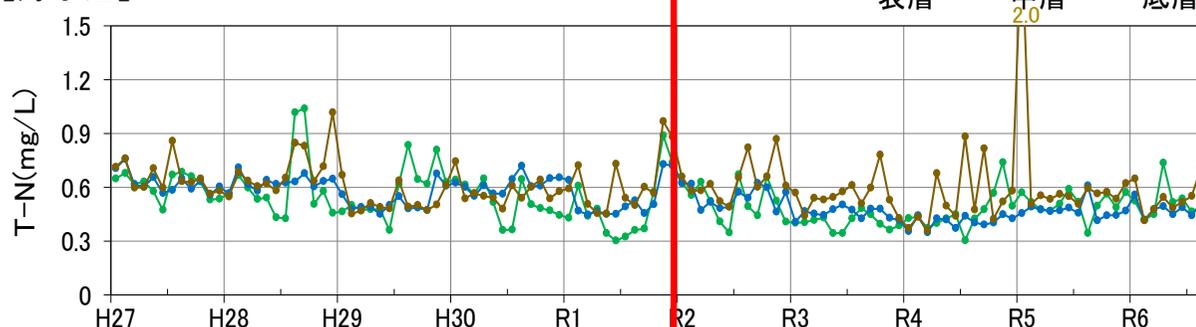
年平均値

T-N mg/L	流入河川	下流河川
R2	0.34	0.51
R3	0.45	0.46
R4	0.57	0.50
R5	0.57	0.51
R6	0.58	0.58

[貯水池]

- ・至近5力年の貯水池内は季節変化はなく、底層において高い値を示すことがある。
- ・至近5力年の年平均値は概ね同程度で推移している。

【貯水池】



年平均値

T-N mg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
R2	0.52	0.55	0.64
R3	0.40	0.46	0.56
R4	0.46	0.41	0.54
R5	0.51	0.47	0.68
R6	0.58	0.49	0.57

水質状況:T-P

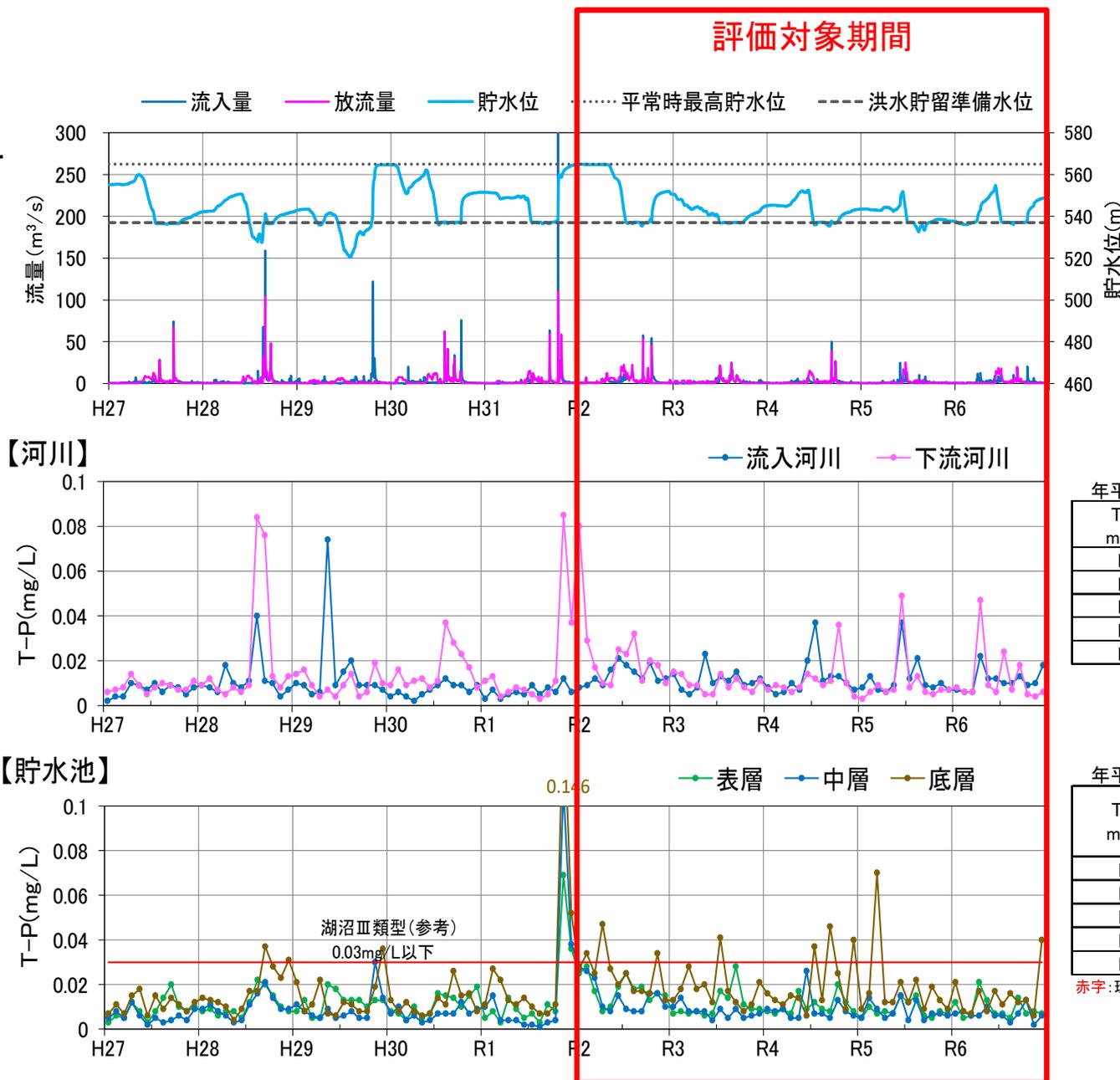
- 至近5力年におけるT-Pの状況は以下のとおり。

〔流入河川・下流河川〕

- ・至近5力年の年平均値は概ね同程度で推移している。

〔貯水池〕

- ・至近5力年の表層は、概ね環境基準値以下で推移している。
- ・底層で環境基準値を超過する月がある。
- ・至近5力年の年平均値は環境基準を満足している。

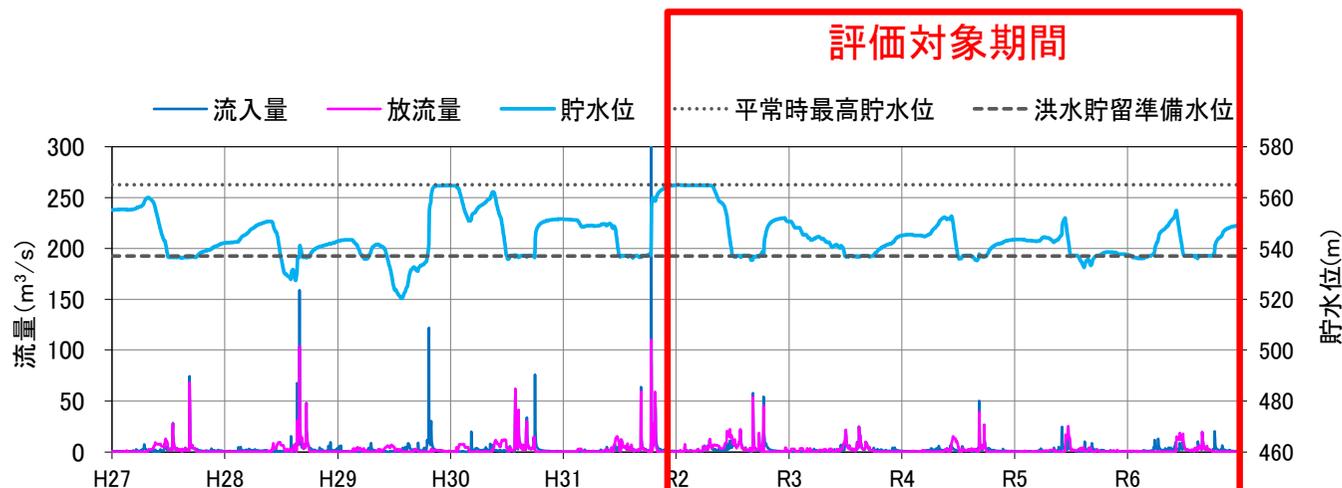


水質状況：クロロフィルa

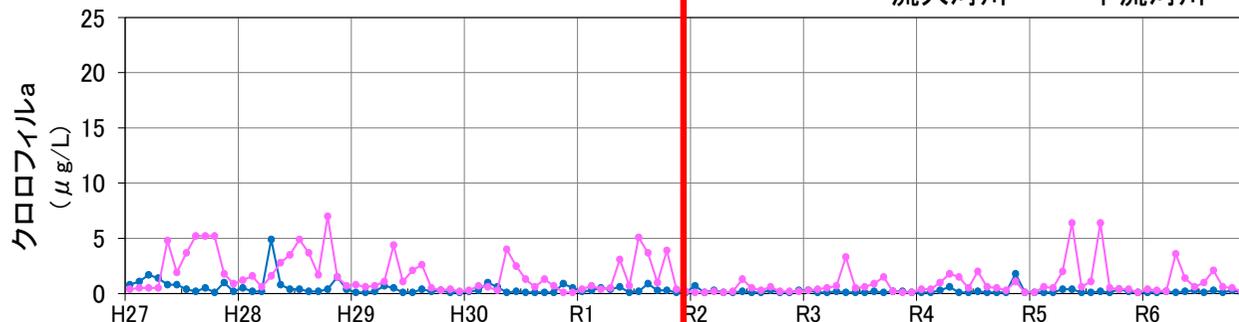
■ 至近5カ年におけるクロロフィルaの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近5カ年の流入河川は、下流河川に比べて低くなる傾向がある。
- ・至近5カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。



[河川]



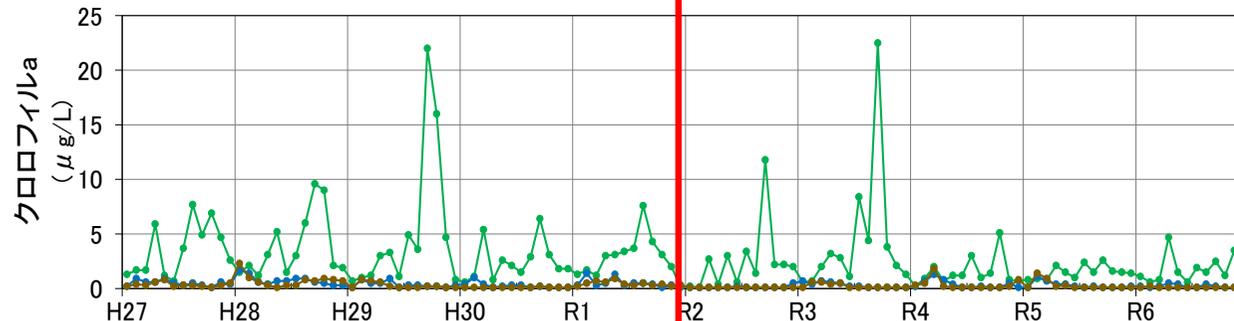
年平均値

クロロフィルa	流入河川	下流河川
R2	0.2	0.3
R3	0.2	0.8
R4	0.3	0.9
R5	0.2	1.6
R6	0.2	0.9

[貯水池]

- ・表層では、夏季に高くなる傾向を示している。
- ・令和2年と令和3年に高い値となっている。同時期に植物プランクトンの増殖によるアオコや水の華が確認された。
- ・至近5カ年の表層の年平均値について、令和2～3年の値が高い値となった。

[貯水池]



年平均値

クロロフィルa	基準地点		
	表層	中層	底層
R2	2.5	0.1	0.1
R3	4.4	0.3	0.2
R4	1.5	0.4	0.4
R5	1.5	0.3	0.3
R6	1.8	0.2	0.1

水質状況：大腸菌群数・大腸菌数

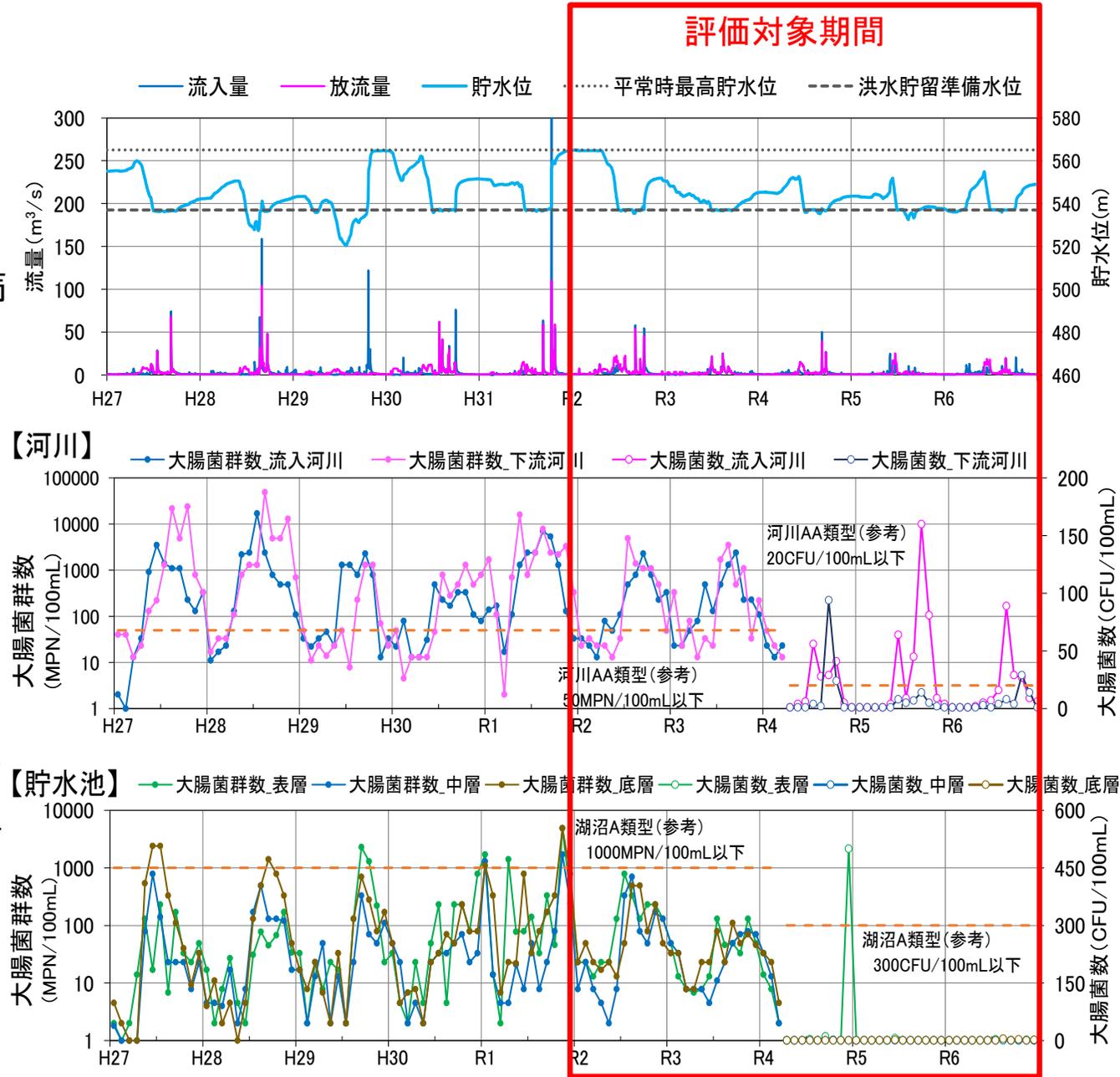
■ 至近5カ年における大腸菌群数及び大腸菌数の状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・大腸菌群数、大腸菌数ともに夏季に高くなる傾向がある。
- ・至近5カ年について、令和2年と令和3年の大腸菌群数の年平均値は環境基準を満足していない。
- ・至近5カ年の大腸菌数の年間90%値は下流河川の令和5年、6年を除いて環境基準を満足していない。

[貯水池]

- ・貯水池の大腸菌群数は概ね夏季から秋季に高くなる傾向がある。
 - ・中層、底層の大腸菌数は概ね低い値で推移している。
 - ・至近5カ年について、大腸菌群数の年平均値は環境基準を満足し、大腸菌数の年間90%値は令和4年を除き環境基準を満足している。
- ※大腸菌群数調査はR4.3で終了



年平均値		
大腸菌群数 MPN/100mL	流入河川	下流河川
R2	436	766
R3	463	629
R4	20	28
R5	-	-
R6	-	-

年間90%値		
大腸菌数 CFU/100mL	流入河川	下流河川
R2	-	-
R3	-	-
R4	56	94
R5	81	8
R6	29	14

赤字:環境基準の超過

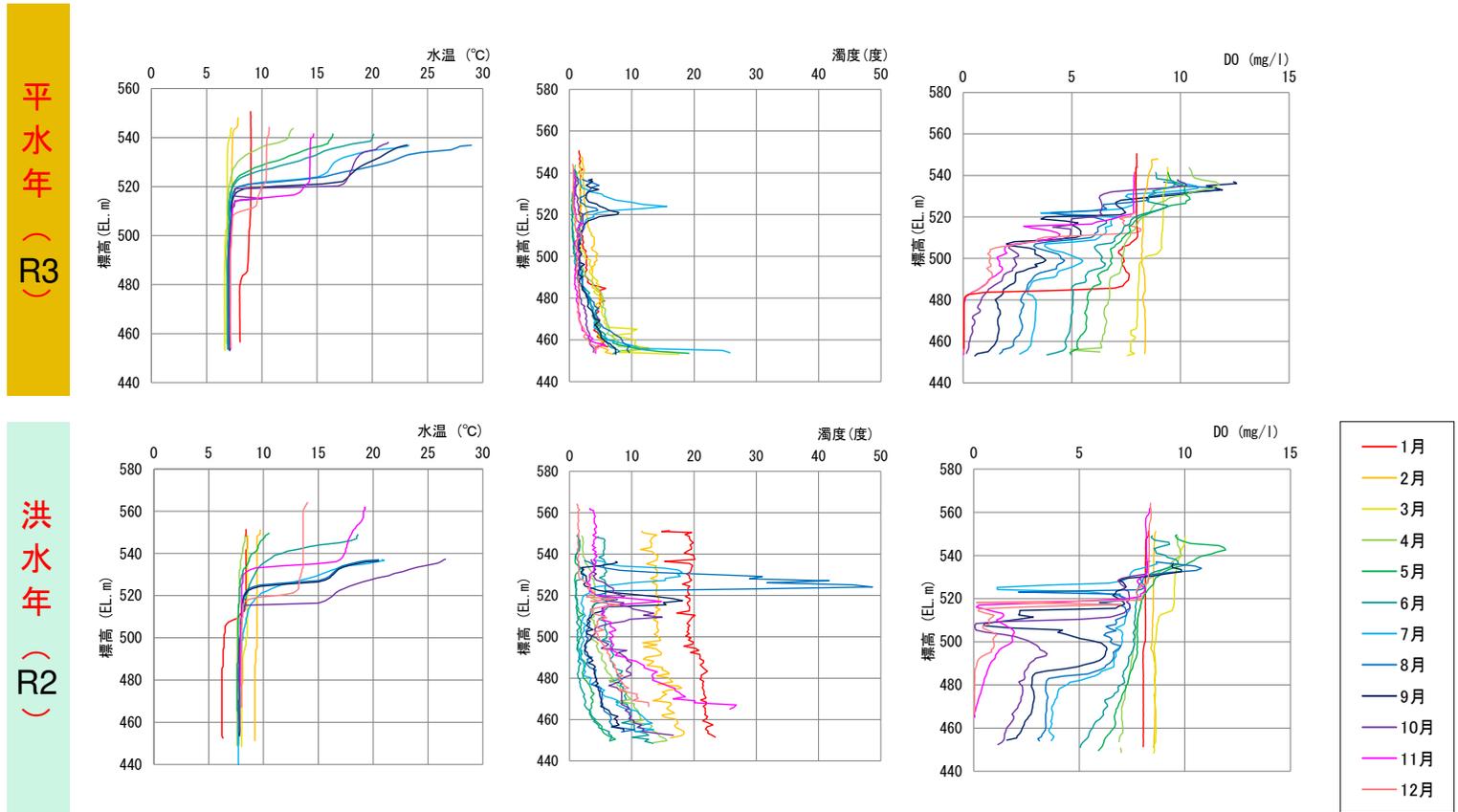
大腸菌群数 MPN/100mL	基準地点		
	表層	中層	底層
R2	173	126	128
R3	45	34	42
R4	8	16	20
R5	-	-	-
R6	-	-	-

大腸菌数 CFU/100mL	基準地点		
	表層	中層	底層
R2	-	-	-
R3	-	-	-
R4	500	2	1
R5	1	1	1
R6	3	1	3

赤字:環境基準の超過(表層のみ対象)

水質状況：水質鉛直分布

- 滝沢ダムは年回転率、7月回転率から成層型に分類され、水温躍層が発達しやすい貯水池である。
- 水温躍層は4月頃から形成されはじめ、夏季には躍層の位置は概ね水深20mとなる。
- DO濃度は、中層～底層で夏季から冬季に低下する傾向がある。



貯水池内における水質鉛直分布

滝沢ダムの回転率(令和2年～令和6年)

	R2	R3	R4	R5	R6	平均
年回転率	1.8	1.1	1.0	0.8	1.2	1.2
7月回転率	0.8	0.5	0.2	0.1	0.2	0.4
	洪水年	平水年				

水理・水文指標による成層型の分類

水温成層の形態	年回転率	7月回転率
成層型	10以下	1以下
成層型(成層Ⅱ型)または中間型	10～20(例外あり)	1～5(例外あり)
混合型	20以上(例外あり)	5以上(例外あり)

水質状況：健康項目

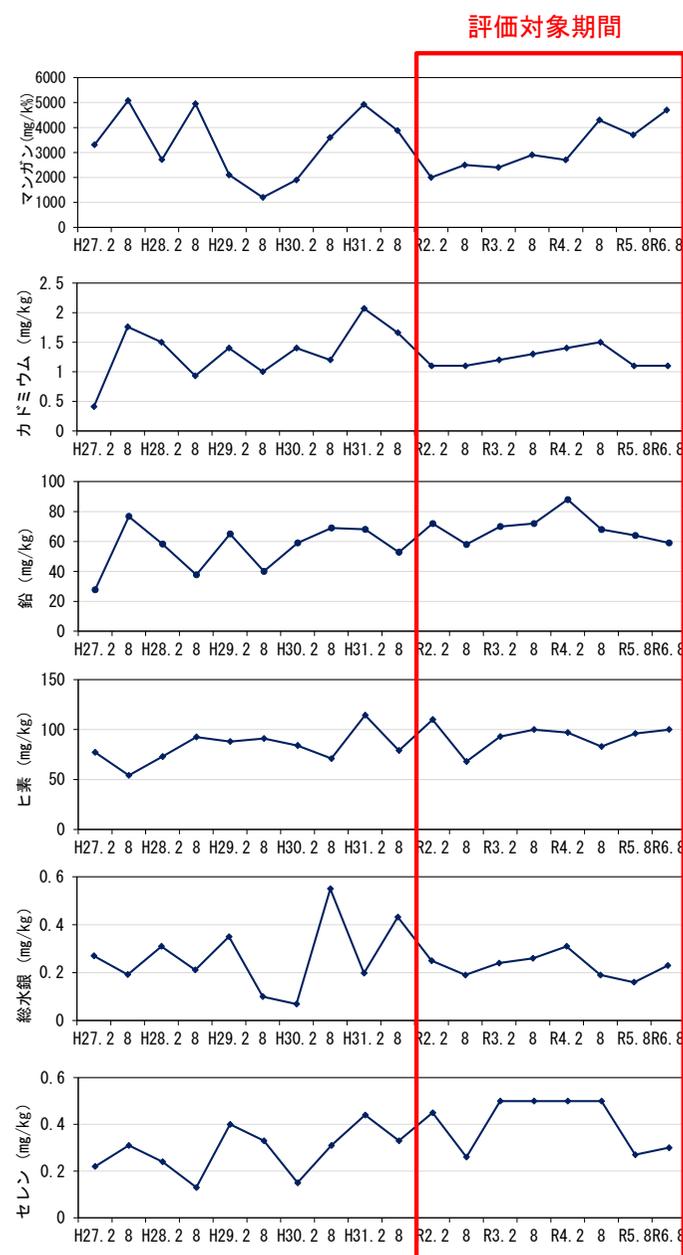
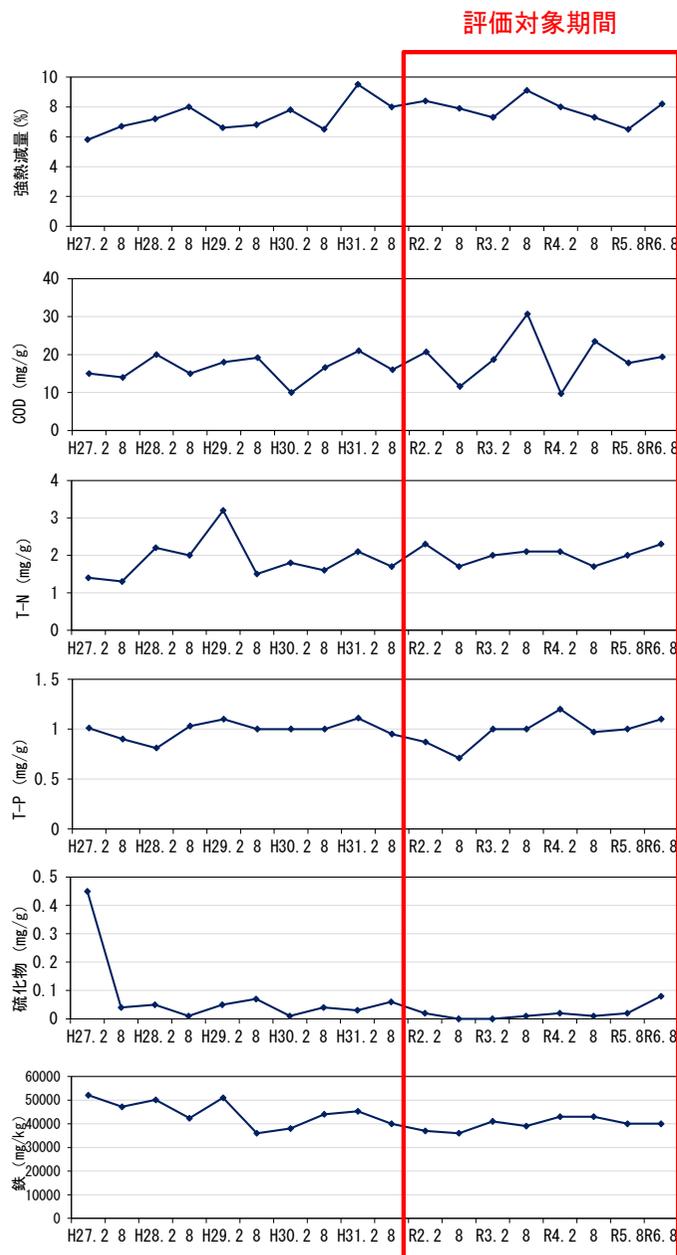
- 至近5カ年において、健康項目は全項目環境基準を満足している。

健康項目の分析結果

項目	基準値	R2	R3	R4	R5	R6
カドミウム	0.003mg/L以下	<0.0003	<0.0003	<0.0003	<0.0003	<0.0003
全シアン	検出されないこと	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
鉛	0.01mg/L以下	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001
六価クロム	0.05mg/L以下	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001
ヒ素	0.01mg/L以下	0.003	0.005	0.007	0.007	0.006
総水銀	0.0005mg/L以下	<0.00001	<0.00001	<0.00001	<0.00001	<0.00001
アルキル水銀	検出されないこと	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005
ポリ塩化ビフェニル(PCB)	検出されないこと	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005	<0.0005
ジクロロメタン	0.02mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
四塩化炭素	0.002mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
1,2-ジクロロエタン	0.004mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
1,1-ジクロロエチレン	0.1mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
シス-1,2-ジクロロエチレン	0.04mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
1,1,1-トリクロロエタン	1mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
1,1,2-トリクロロエタン	0.006mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
トリクロロエチレン	0.01mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
テトラクロロエチレン	0.01mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
1,3-ジクロロプロペン	0.002mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
チウラム	0.006mg/L以下	<0.0004	<0.0004	<0.0004	<0.0004	<0.0004
シマジン	0.003mg/L以下	<0.0003	<0.0003	<0.0003	<0.0003	<0.0003
チオベンカルブ	0.02mg/L以下	<0.0003	<0.0003	<0.0003	<0.0003	<0.0003
ベンゼン	0.01mg/L以下	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001
セレン	0.01mg/L以下	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001
硝酸態窒素および亜硝酸態窒素	10mg/L以下	0.524	0.397	0.525	0.541	0.635
フッ素	0.8mg/L以下	<0.10	<0.10	<0.10	<0.10	<0.10
ホウ素	1mg/L以下	<0.100	<0.100	<0.100	<0.100	<0.100
1,4-ジオキサン	0.05mg/L以下	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001

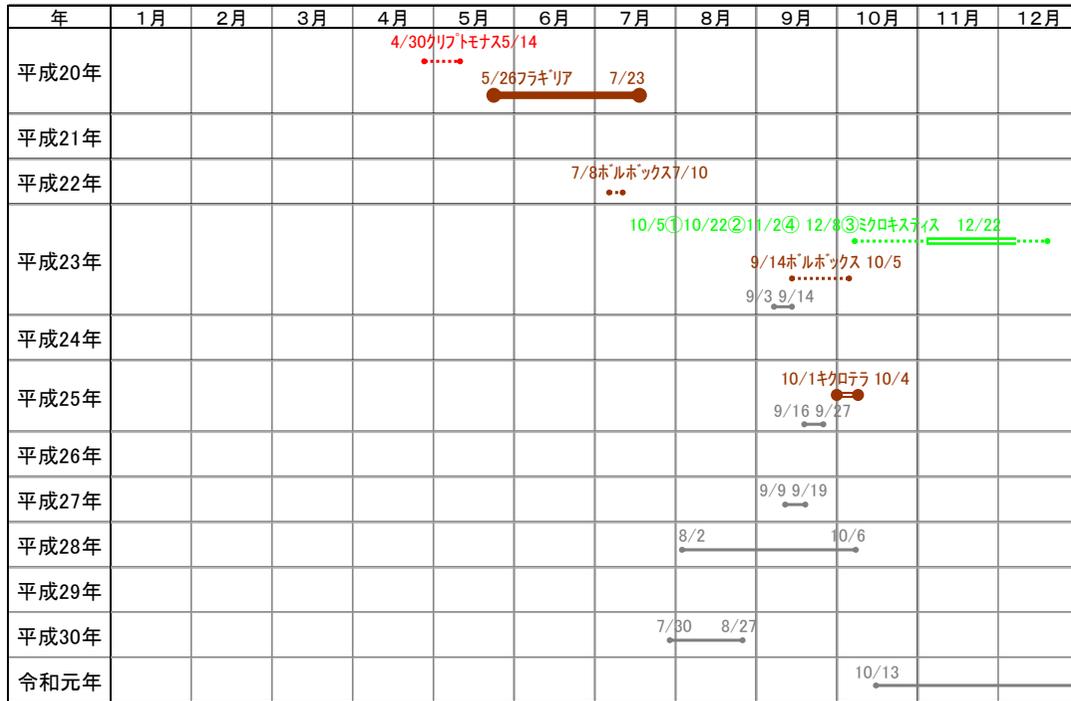
水質状況：底質

- 底質16項目については、至近5力年では大きな変化は見られない。

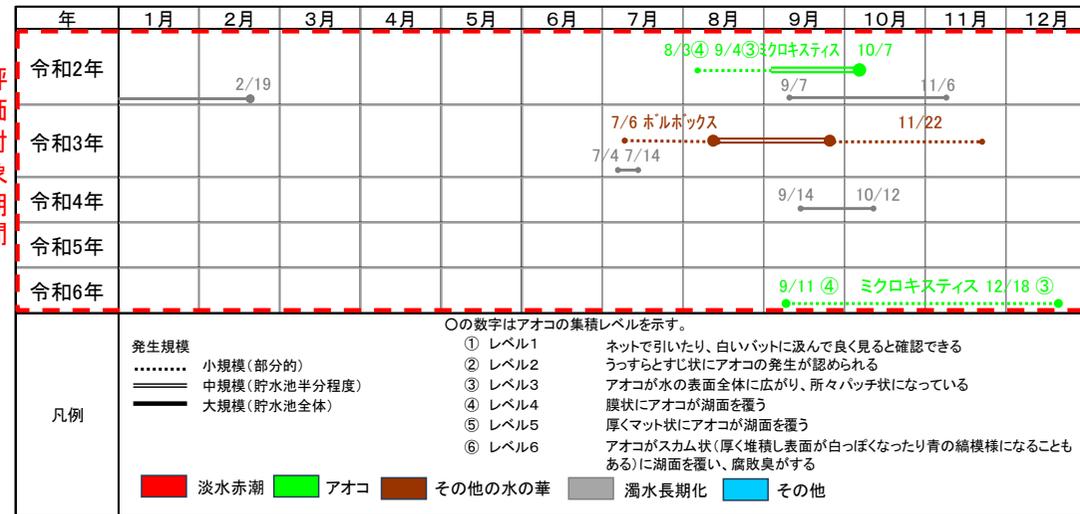


水質障害の発生状況

■ 至近5カ年の主な水質異常は、ミクロキスティスによるアオコ、ボルボックスによる水の華と、出水にともなう濁水長期化であり、令和5年を除き水質異常が確認された。



評価対象期間



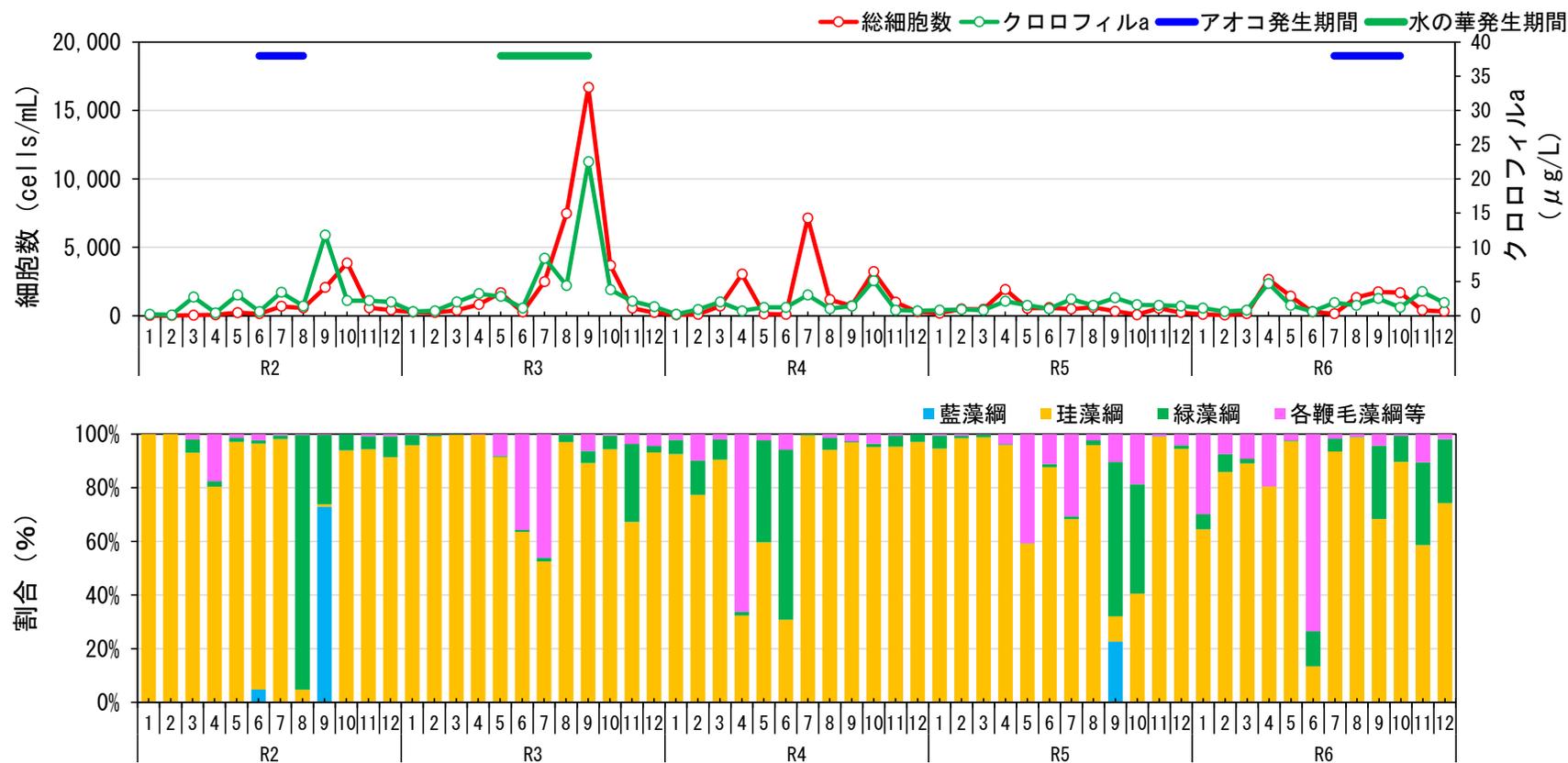
○の数字はアオコの集積レベルを示す。

① レベル1 ネットで引いたり、白いバットに汲んで良く見ると確認できる
② レベル2 うすすらとすじ状にアオコの発生が認められる
③ レベル3 アオコが水の表面全体に広がり、所々バッチ状になっている
④ レベル4 膜状にアオコが湖面を覆う
⑤ レベル5 厚くマット状にアオコが湖面を覆う
⑥ レベル6 アオコがスクラム状(厚く堆積し表面が白っぽくなったり青の縞模様になることもある)に湖面を覆い、腐敗臭がする

■ 淡水赤潮 ■ アオコ ■ その他の水の華 ■ 濁水長期化 ■ その他

植物プランクトンの発生状況

- クロロフィルaは夏季～秋季に高くなることが多く、優占種は珪藻綱である。
- 至近5カ年では、令和2年と令和6年に藍藻綱のミクロキスティス属によるアオコ、令和3年に緑藻綱のボルボックス属による水の華が発生した。



令和2年8月5日の貯水池流入端の状況



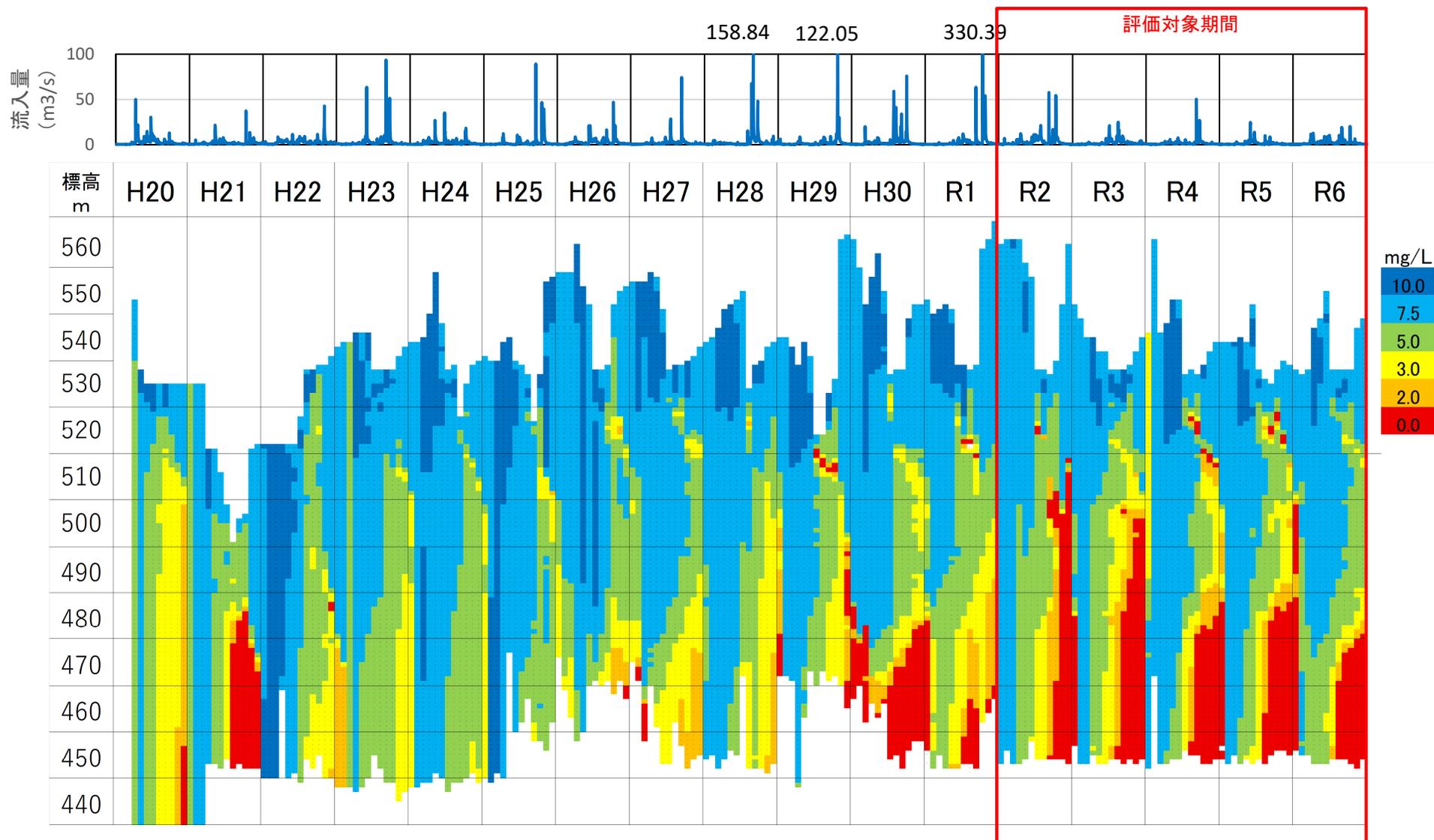
令和3年7月7日の堤体付近の状況



令和6年9月11日の貯水池流入端の状況

底層の貧酸素化

- 平成29年以降の底層DOは、毎年概ね、8月以降に低下し始め、翌年1月以降の全層循環期に改善される年変動となっている。



貯水池内における水温とDOの垂直分布の経月変化図

濁水の長期化の発生状況

- 令和2年から令和6年までに、4回の濁水の長期化が発生した。

なお、令和2年の濁水長期化については、令和元年10月台風第19号出水による濁水長期化(130日:令和元年10月12日～令和2年2月18日)の影響である。

濁水の長期化の発生状況

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
R1													台風19号
R2													台風19号,10号
R3													低気圧
R4													雷雨
R5													
R6													

＜滝沢ダムにおける濁水長期化の定義＞

下流河川の自動観測装置で、濁度10度以上が7日以上計測された場合

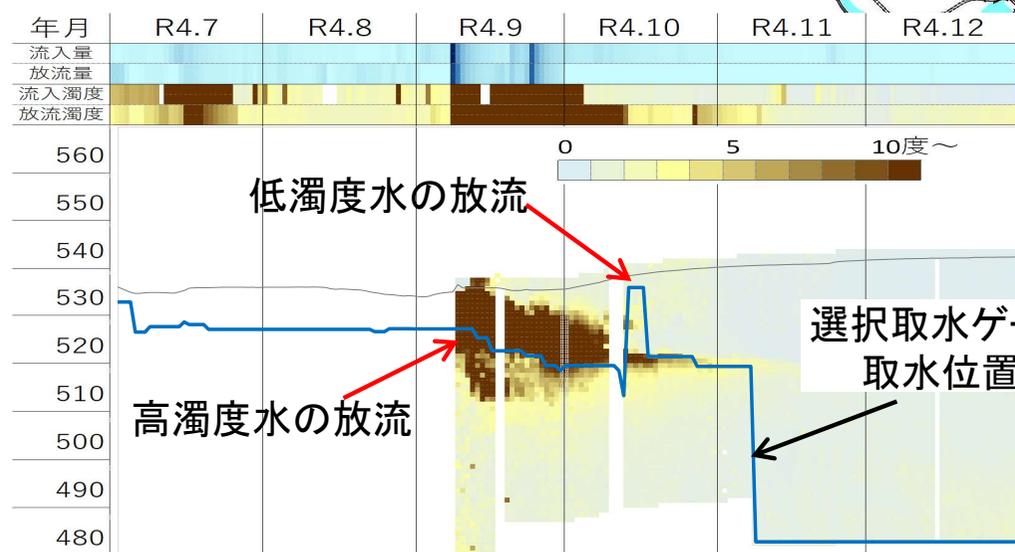


令和元年台風第19号出水後96日後の貯水池内と下流河川の状況

水質保全対策の概要

- 選択取水設備は、全層で高濁度とならない中小規模出水時に濁度の高い層から取水し、清水層を温存できるように運用している。春から秋にかけての平常時において、貯水池への流入水温とダムからの放流水温が概ね等しくなる等水温取水を目標に運用している。

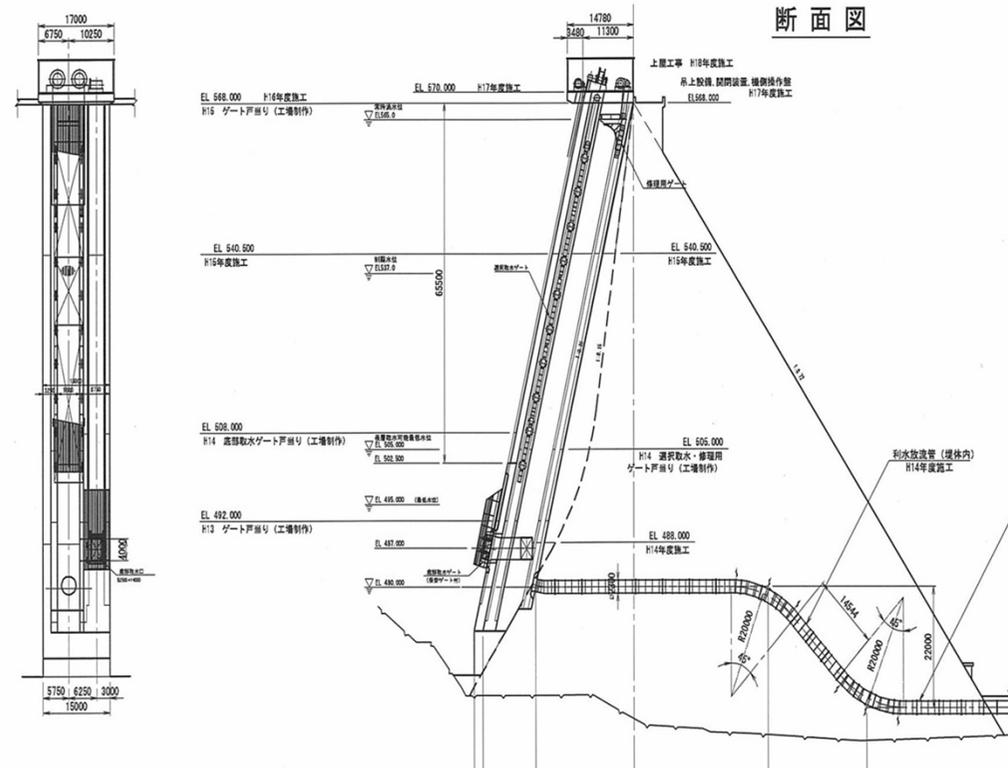
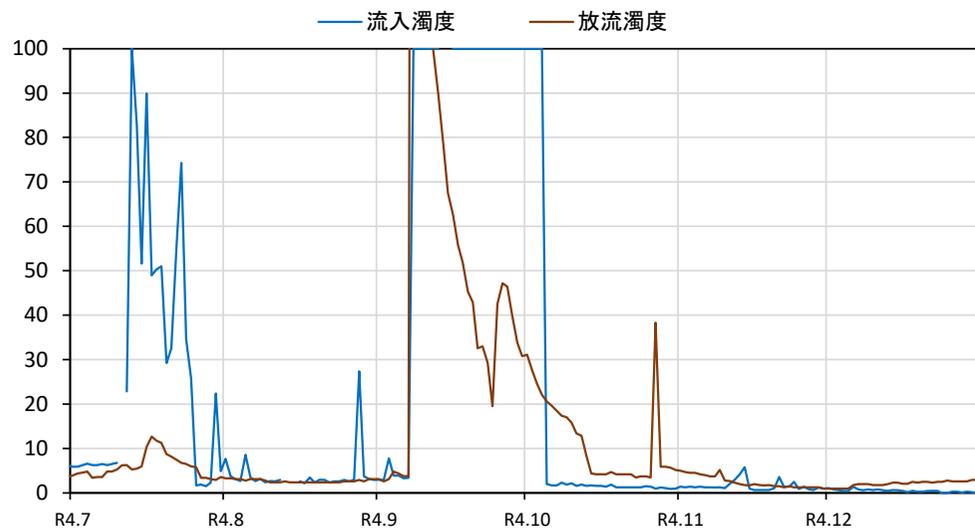
令和4年出水時の濁水流入時における選択取水設備の運用



選択取水設備

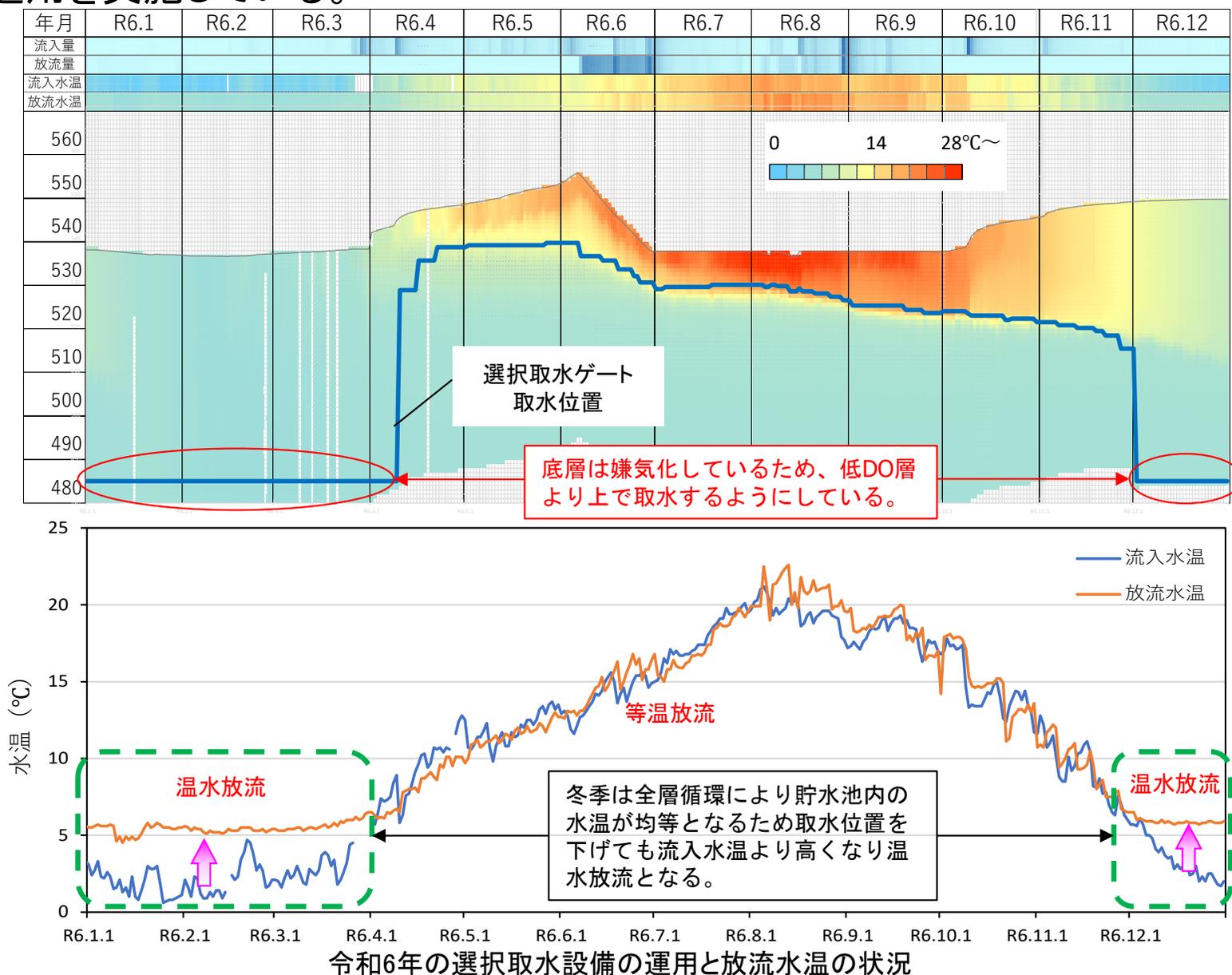
【選択取水設備】
 最大取水量 40m³/s
 取水範囲 EL.565.5m～505.0m

濁度(度)



水質保全対策の効果 選択取水設備

- 滝沢ダムでは春から秋にかけての平常時において、選択取水設備を用いて貯水池への流入水温とダムからの放流水温が概ね等しくなる等水温取水を行い、下流環境への影響を最小限に抑制する運用を実施している。



水質のまとめ

- 貯水池(表層)では概ね環境基準を満足している。 水質3、6~10、12、14
- 流入河川、下流河川では大腸菌群数が環境基準を超過していたが、令和4年以降測定が開始された大腸菌数は、令和4年の貯水池表層と令和5年の流入河川を除いて概ね環境基準を満足している。 水質14
- 至近5カ年では、アオコ等の水質異常が確認された。 水質18、19
- 平成29年以降の底層DOは、毎年概ね、8月以降低下し始め、翌年1月以降の全層循環期に改善される年変動となっている。 水質20
- 令和元年台風第19号出水の濁水影響が令和2年まで継続するなど、令和元年から令和6年までの濁水長期化は、4回発生した。 水質21
- 中小規模出水の濁水流入時には、選択取水設備の運用により濁水の長期化の軽減を図っている。 水質22
- 選択取水設備を用いて等水温取水を行っており、下流環境への影響を最小限に抑制する運用を実施している。 水質23

【今後の方針】

- 各水質調査項目について、引き続き監視を行う。
- 各施設を適切に運用し、水質異常の軽減に努める。

調査の実施状況

- 滝沢ダムにおける「河川水辺の国勢調査」は、平成23年度から開始している。
- 至近5カ年では、魚類、底生動物、動植物プランクトン、両生類・爬虫類・哺乳類、陸上昆虫類等及びダム湖環境基図の調査を実施している。また、環境保全対策に関する調査として猛禽類調査を実施している。

調査実施状況	モニタリング調査							河川水辺の国勢調査													
	環境保全対策に関する調査																				
調査項目	H 16	H 17	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25	H 26	H 27	H 28	H 29	H 30	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6
魚類	●	●▲	●▲	●	●▲	●	●					■					■				
底生動物	●	●	●	●	●	●	●				■					■					■
動植物プランクトン			●	●	●	●	●				■	△	■△	△	■△	△	△	△	■△	■△	△
付着藻類	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲										
植物	●	●	▲	●▲	●	●▲	●▲	●				■			■						
鳥類	●	●		▲		●	●			■				■							
両生類・爬虫類・哺乳類	●	●▲	▲	▲	▲	●▲	●▲		■										■		
陸上昆虫類	●	●				●	●			■										■	
ダム湖環境基図								■				●	■					■			
猛禽類	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

●:モニタリング調査、■:河川水辺の国勢調査、▲:保全対策調査、△:水質調査

評価対象期間

<調査範囲>

・水域調査(ダム湖内、流入河川、下流河川)

1.魚類、2.底生動物、3.動植物プランクトン(ダム湖内)、5.鳥類、6.両生類・爬虫類・哺乳類

・陸域調査(ダム湖周辺:ダムの平常時最高水位から500m程度の範囲)

4.植物、5.鳥類、6.両生類・爬虫類・哺乳類、7.陸上昆虫類等

- ダム湖周辺で最も大きな面積を占めるのは、スギ・ヒノキ植林、次いでケヤキ群落である。
- 最新の河川水辺の国勢調査において、動物では主に以下の種が確認されている。

鳥類	トビ、ノスリ、アオゲラ、ミソサザイ、ヤブサメ、ウグイス、オオルリ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、カケス等
両生類	ヒガシヒダサンショウウオ、アズマヒキガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエル、カジカガエル等
爬虫類	ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、タカチホヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシ等
哺乳類	ニホンコキクガシラコウモリ、ニホンリス、ムササビ、アカネズミ、ツキノワグマ、タヌキ、ニホンジカ等
陸上昆虫類等	ワカバグモ、デーニツツハエトリ、マダラスズ、ヒメツノカメムシ、ナカウスエダシヤク、アカスジシロコケガ、ヒロオビウスグロアツバ、クロヤマアリ、トビイロケアリ等



イチモンジセセリ



ヤマアカガエル



スギ・ヒノキ植林



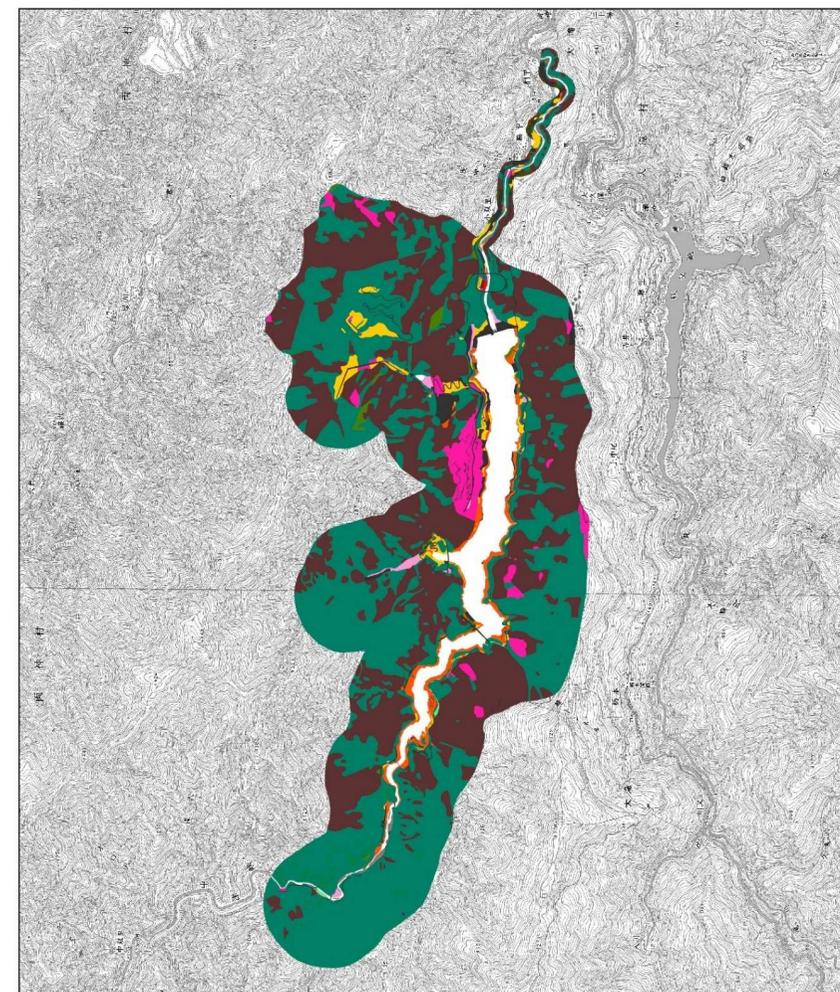
ヒガシニホントカゲ



ニホンジカ



ケヤキ群落



植生凡例

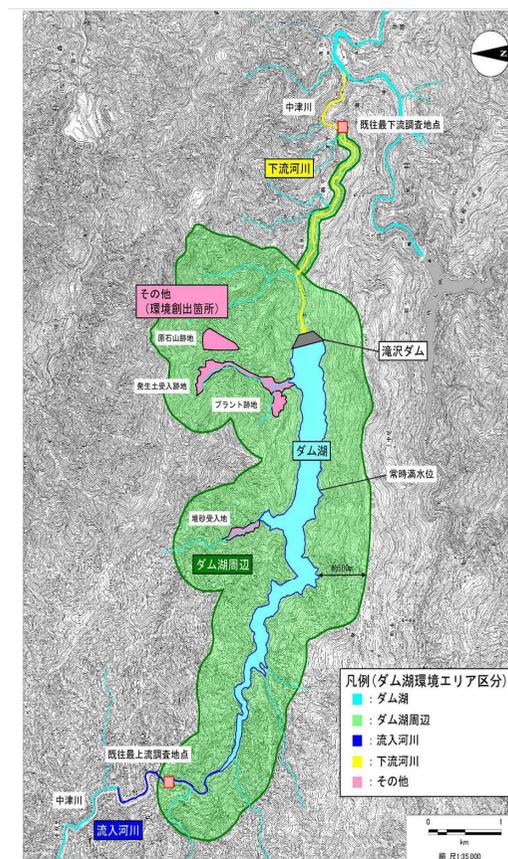
一年生草本群落	植林地(スギ・ヒノキ)
多年生広葉草本群落	植林地(その他)
単子葉草本群落(ツルヨシ群落)	果樹園
単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	畑
その他の低木林	グラウンドなど
落葉広葉樹林	人工構造物
常緑針葉樹林	自然裸地
植林地(竹林)	開放水面



ダム湖及びその周辺の環境・水域

- 最新の河川水辺の国勢調査において、水域における生物(鳥類は水辺を利用する鳥)は、主に以下の種が確認されている。

流入河川	魚類	ウグイ、ニッコウイワナ、サクラマス(ヤマメ)、カジカ等
	底生動物	フタスジモンカゲロウ、シロハラコカゲロウ、エルモンヒラタカゲロウ、モンキマメゲンゴロウ等
	鳥類	キセキレイ、カワガラス、ミソサザイ、オオルリ等
ダム湖	魚類	アブラハヤ、ウグイ、モツゴ、ワカサギ、ニッコウイワナ、サクラマス(ヤマメ)等
	底生動物	サカマキガイ、イトミミズ、フロリダマミズヨコエビ、ヌカエビ等
	鳥類	カイツブリ、カワウ、アオサギ、オシドリ、マガモ、カルガモ、ホシハジロ等
下流河川	魚類	アブラハヤ、ウグイ、ヒガシシマドジョウ、ニッコウイワナ、サクラマス(ヤマメ)、カジカ等
	底生動物	ナミウズムシ、コモチカワツボ、モンカゲロウ、アカマダラカゲロウ、フタバコカゲロウ、シロタニガワカゲロウ等
	鳥類	カワウ、オシドリ、ヤマセミ、キセキレイ等



ウグイ



カジカ



ナミウズムシ



ヌカエビ

■ 最新の河川水辺の国勢調査で確認された重要種・外来種は以下の通りである。

	重要種	外来種
魚類(R2)	ドジョウ類 計1種	確認無し
底生動物(R6)	ナミウズムシ、 モノアラガイ 、ヌカエビ、サワガニ、クロサナエヒメサナエ、ヤマトカワゲラ、 オオアメンボ 、タイリククロスジヘビトンボ、ヤマトクロスジヘビトンボ、ウンモンヒロバカゲロウ、ムナグロナガレトビケラ、コバントビケラムラサキトビケラ、チャイロシマチビゲンゴロウ、オナガミズスマシ、マサダチビヒラドロムシ 計17種  モノアラガイ	コモチカワツボ フロリダマミズヨコエビ 計2種
植物(H30)	アカハナワラビ、ナツノハナワラビ、ヤシャゼンマイ、フジシダミヤマウラジロ、カラクサシダ、クモノスシダ、サイゴクイノデウスヒメワラビ、ミドリワラビ、 オンシャグジデンド 、 ミヨウギシダ 、 コバノイラクサ 、 マルミノヤマゴボウ 、ミツバペンケイソウ、サイカチオオツルウメモドキ、 ゲンジスミレ 、 トダイアカバナ 、イワナンテンヒカゲツツジ、アカヤシオ、オオルリソウ、カリガネソウ、 ヒラギソウ ハッカ、ナベナ、カワラヨモギ、 アワコガネギク 、ヤマカシユウ アオガヤツリ 、 シラン 、クモキリソウ、 カヤラン 計34種  ヤシャゼンマイ	エゾノギシギシ、キウイフルーツ、セイヨウカラシナ、イタチハギ、エニシダ、アレチヌスビトハギハリエンジュ、 ツルニチニチソウ 、アメリカネナシカズラ、フサフジウツギ、オオブタクサアメリカセンダングサ、アメリカオニアザミ、セイタカアワダチソウ、ヒメジョオン、セイヨウタンポポ オオオナモミ 、 タカサゴユリ 、コヌカグサ、メリケンカルカヤ、カモガヤ、シナダレスズメガヤオニウシノケグサ、 ネズミムギ 、ホテイアオイ、モウソウチク、ナギナタガヤ 計27種
鳥類(H29)	ササゴイ 、 オシドリ 、トビ、 ハイタカ 、ノスリ、 クマタカ 、 ハヤブサ ヤマドリ、 イソシギ 、 ヤマシギ 、アオバト、ジュウイチ、ツツドリホトギス、フクロウ、 ヨタカ 、ヤマセミ、カワセミ、アオゲラ サンショウクイ 、コルリ、ルリビタキ、トラツグミ、クロツグミヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コガラヒガラ、ヤマガラ、キバシリ、ホオジロ、アオジ 計35種  ハヤブサ	ガビチョウ 計1種
両生類・爬虫類・哺乳類(R4)	ヒガシヒダサンショウウオ 、アズマヒキガエル、タゴガエルナガレタゴガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエル、カジカガエル、ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビタカチホヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ジムグリ、シロマダラヒバカリ、ヤマカガシ、カワネズミ、ニホンコキクガシラコウモリキクガシラコウモリ、 コテンゴウモリ 、ムササビ、ツキノワグマカモシカ 計23種  アズマヒキガエル	ハクビシン 計1種
陸上昆虫類等(R5)	タニマドヨウグモ、 シロオビトリノフンダマシ 、トゲグモ、キバネハサミムシヤマトカワゲラ、ササキリモドキ、ヒメツユムシ、ムサシセモンササキリモドキヒメクサキリ、エゾスズ、 ヒナバタ 、ナキイナゴ、ツマグロバタメスアカフキバタ、ヤマトフキバタ、ヤスマツトビナナフシ アヤヘリハネナガウンカ 、アカヘリサシガメ、フトハサミツノカメムシシモフリクチフトカメムシ、ヒメナガメ、チャイロカメムシタイリククロスジヘビトンボ、ミスジシリアゲ、スカシシリアゲモドキムラサキトビケラ、 オナガシジミ 、 オオウラギンスジヒョウモン 、 ウラギンヒョウモン 、ツマジロウラジャノメ本州亜種、 ジャノメチヨウ クモガタヒョウモン、ミスジチヨウ、ヒオドシチヨウ、 オオムラサキ ヘリスジヤチホコ 、 トビイロリンガ 、ヤマハマベエンマムシクスベニカミキリ、 ケブカツヤオオアリ 、 クロマルハナバチ 計41種  クロマルハナバチ	アワダチソウグンバイ、フタゲホソヒラタムシ、ブタクサハムシ、セイヨウミツバチ 計4種

赤字は法指定又は環境省レッドリスト該当種 青字は特定外来生物 は最新年度調査における新規確認種

※1 重要種は①文化財保護法・条例等で指定された「特別天然記念物」、「天然記念物」、②種の保存法で指定された「国内希少野生動植物種」、③環境省RL(2020)の掲載種、④埼玉県RDB(動物2018、植物2025)の掲載種を対象とした。

※2 外来種は①外来種法で指定された「特定外来生物」、②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」(環境省及び農林水産省)の掲載種を対象とした。

魚類①

ダム湖中層で生息する魚種の経年変化

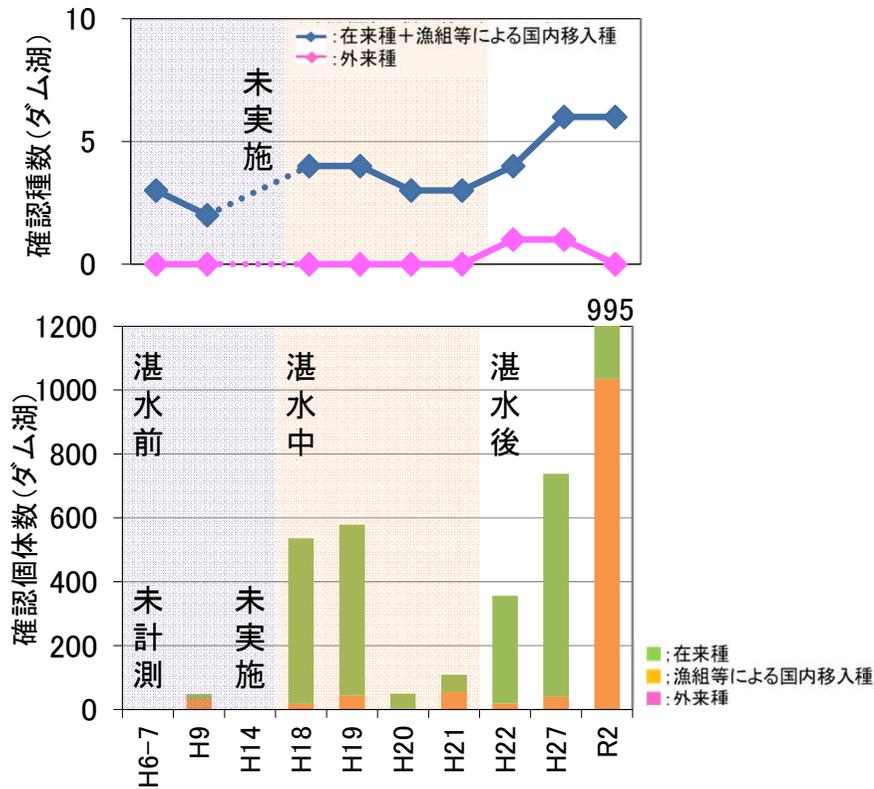
- 在来種はモツゴ、ウグイ、アブラハヤ、国内移入種はワカサギなどが確認されている。
- 最新の令和2年度調査結果と既往調査を比べると、在来種の種数は平成27年度に1種増えた後維持しており、在来種の個体数は種ごとの変動はあるものの全体的に増加傾向であった。放流魚では令和2年度にはワカサギが多く確認され、その他は数個体の確認にとどまり、大きな変化はみられなかった。
- ダム湖で懸念される外来種のニジマスは令和2年度調査では確認されなかった。また、オオクチバス等のサンフィッシュ科の外来魚はこれまでに確認されていない。
- 以上より、ダム湖中層で生息する魚類の生息状況に大きな変化はみられない。

ダム湖中層で生息する魚種の経年変化

魚類の分類		在来・外来区分			H6-7 (未計測)	H9 (湛水 予定域)	H14 (未実施)	H18	H19	H20	H21	H22	H27	R2
科名あるいは属名	種名	在来種 遊泳魚	在来種 底生魚	外来種										
コイ科	コイ属	コイ	○							1				
	ヒメハヤ属	アブラハヤ	○				13	16		1		107	20	
	ウグイ属	ウグイ	○		1	15	505	519	48	53	337	515	218	
	モツゴ属	モツゴ	○									76	757	
キュウリウオ科	ワカサギ	○							1	55	2	33	1032	
アユ科	アユ	○												
サケ科	イワナ属	ニッコウイワナ	○		1		9	4			4	4	1	
	サケ属	ニジマス		○							1	1		
		サクラマス(ヤマメ)	○			1	33	9	40			12	2	2
合計	確認種数(種)	14	—	—	3	2	—	4	4	3	3	5	7	6
	確認個体数(個体)	—	—	—	3	48	—	536	579	50	109	356	738	2030
	調査回数	—	—	—	4	1	—	3	3	1	1	2	3	2
	調査地区数	—	—	—	—	3	—	2	2	5	2	2	2	2

■ : 湛水前より河川に生息していた在来種
 ■ : 漁組等により放流された種、またそれに混入した国内移入種
 ■ : 外来種

※ダム湖中層の魚種の個体数は変動が大きい。最新の令和2年度調査におけるワカサギ、モツゴの増加の要因として、湖内の水位等の自然環境が安定し産卵に適していたこと、餌となる動物プランクトンが多かった可能性、また肉食の外来魚種等がないため捕食圧が低いこと等が要因として考えられる。また令和2年度春季調査時には稚魚の確認により、湖内での再生産が確認されている。



ダム湖中層で生息する魚種の経年変化(上:種数、下:個体数)

ダム湖で生息し一生の一時を流入河川で生息する魚種の経年変化

- 在来種はウグイ、国内移入種はサクラマス(ヤマメ)、ニッコウイワナが確認されている。
- 最新の令和2年度調査結果と既往調査を比べると、確認種数は平成22年・平成27年・令和2年の調査では変化がなく、確認個体数には変動はみられるものの、継続して一定数が確認されていることから、在来種及び国内移入種の生息状況に大きな変化はみられない。
- 流入河川ではこれまでに外来種は確認されていない。

ダム湖で生息し一生の一時を流入河川で生息する魚種の経年変化

魚類の分類		在来・外来区分			H6-7	H9	H14	H18	H19	H20	H21	H22	H27	R2
科名あるいは属名	種名	在来種 遊泳魚	在来種 底生魚	外来種	湛水予定 域と上下 流河川	流入 河川*	流入 河川	流入 河川 *	流入 河川 *	流入 河川 *	流入 河川 *	流入 河川*	流入 河川*	流入 河川*
コイ科	ウグイ属	○				3		46	10	3	5	4	36	19
サケ科	イワナ属	○						3	1			1	6	14
	サケ属	○				38		86	31			16	98	11
合計	確認種数(種)	3	—	—	—	2	—	3	3	1	1	3	3	3
	確認個体数(個体)	—	—	—	—	41	—	135	42	3	5	21	140	44
	調査回数	—	—	—	—	1	—	3	3	2	1	2	3	2
	調査地区数*流入河川	—	—	—	—	5	—	2	2	1	2	2	1	1

■ : 湛水前より河川に生息していた在来種

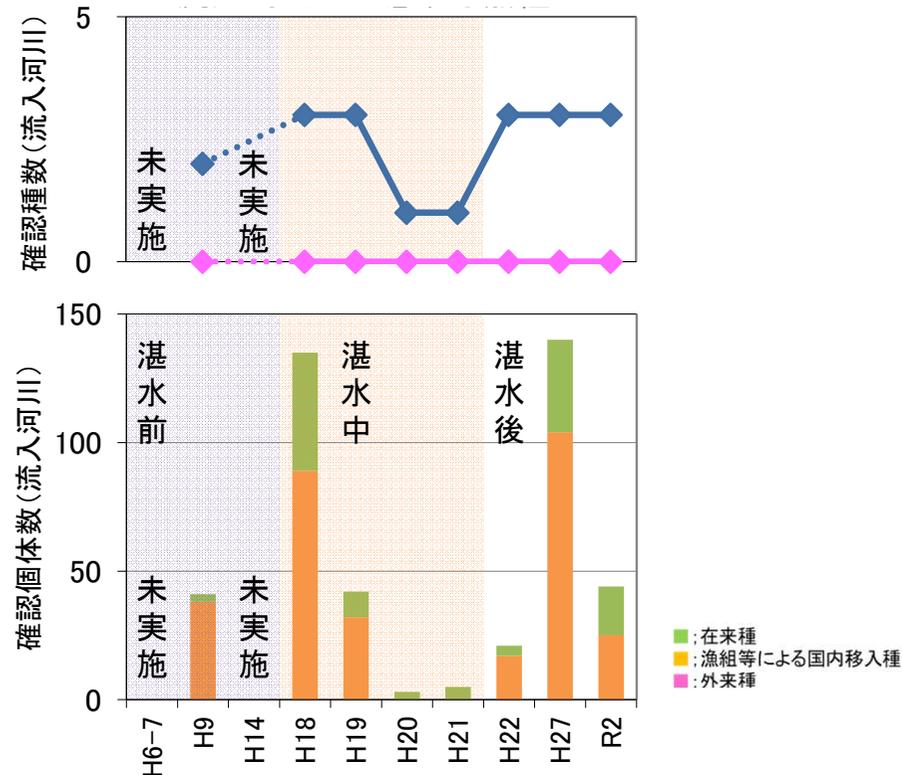
■ : 漁組等により放流された種、またそれに混入した国内移入種

■ : 外来種

注1)ダム湖で生息し一生の一時を流入河川で生息する魚種のうち、ダム湖かつ流入河川の両方での確認を対象とし、そのうち流入河川での個体数を示した。

注2)H6-7年調査はダム湖湛水予定域周辺全体での調査のため、集計対象外とした。

またH14年調査はダム湖内調査は未実施のため、集計対象外とした。



ダム湖で生息し一生の一時を流入河川で生息する魚種の経年変化
(上:種数、下:個体数)

下流河川における河床が浮き石等で構成されている河川を利用する魚種の経年変化

- 在来種はアブラハヤ、カジカなど、国内移入種はサクラマス(ヤマメ)が確認されている。
- 最新の令和2年度調査結果と既往調査を比べると、確認種数は平成27年度に1種増加した後維持しており、確認個体数には変動はみられるものの、継続して一定数が確認されていることから、在来種及び国内移入種の生息状況に大きな変化はみられない。
- 下流河川ではこれまでに外来種は確認されていない。

下流河川の河床が浮き石等を利用する魚種の経年変化

魚類の分類		在来・外来区分			H6-7	H9	H14	H18	H19	H20	H21	H22	H27	R2
科名あるいは属名	種名	在来種 遊泳魚	在来種 底生魚	外来種	湛水予定 域と上下 流河川	下流 河川								
コイ科	ヒメハヤ属 アブラハヤ	○								2	2	112	33	
	ウグイ属 ウグイ	○				77	690	267	144	91	71	31	149	3
	モツゴ属 モツゴ	○							1					
ドジョウ科 サケ科	シマドジョウ属 ヒガシシマドジョウ		○			1		12	9	2	11	13	12	8
	イワナ属 ニッコウイワナ	○						1					10	5
	サケ属 サクラマス(ヤマメ)	○				6	14	46	53	14	11	7	181	15
カジカ科	カジカ		○			21	6	35	74	11	49	71	57	140
合計	確認種数(種)	7			-	4	3	5	5	4	5	5	6	6
	確認個体数(個体)	-	-	-	-	105	710	361	281	118	144	124	521	204
調査回数		-	-	-	4	1	1	3	3	2	2	2	3	2
調査地区数*流入河川		-	-	-	-	2	2	3	3	3	3	3	2	2

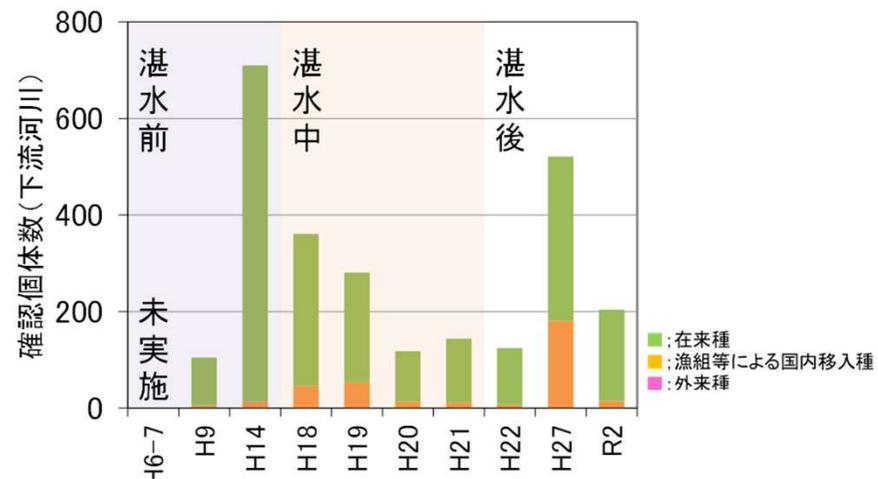
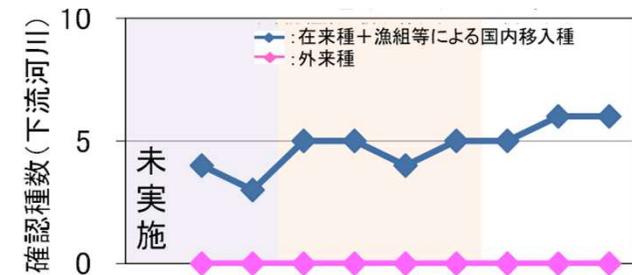
■ : 湛水前より河川に生息していた在来種

■ : 漁組等により放流された種、またそれに混入した国内移入種

■ : 外来種

注1)ニッコウイワナ及びカジカの放流は下流河川で実施してないため、在来種として扱った。

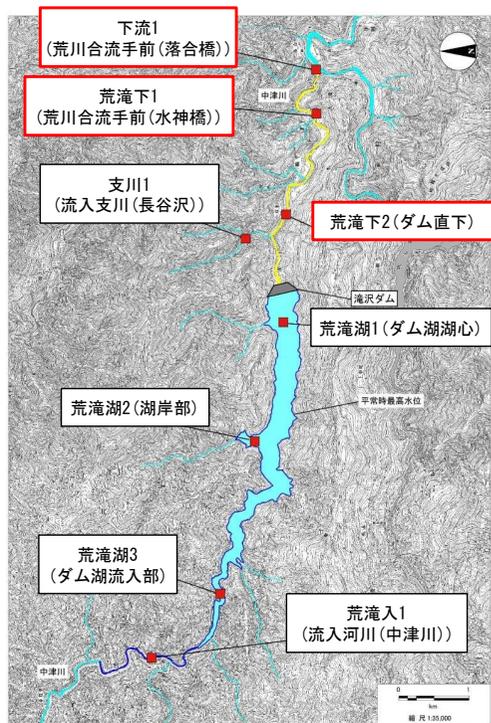
注2)H6-7年調査はダム湖湛水予定域周辺全体での調査のため、集計対象外とした。



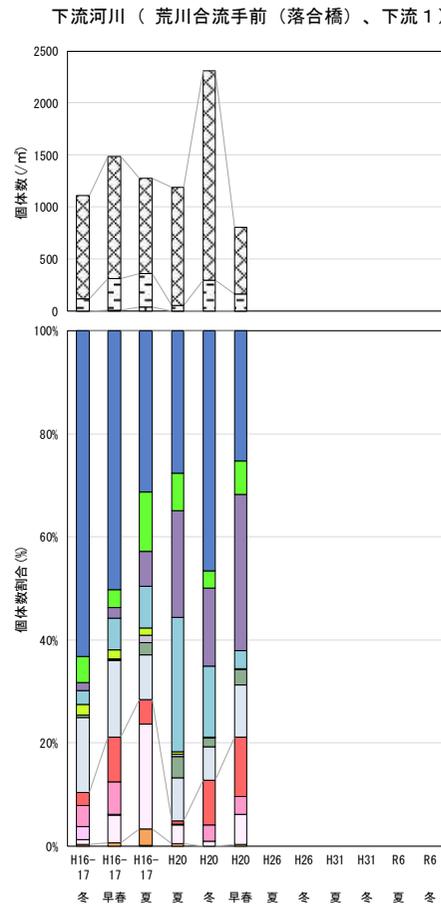
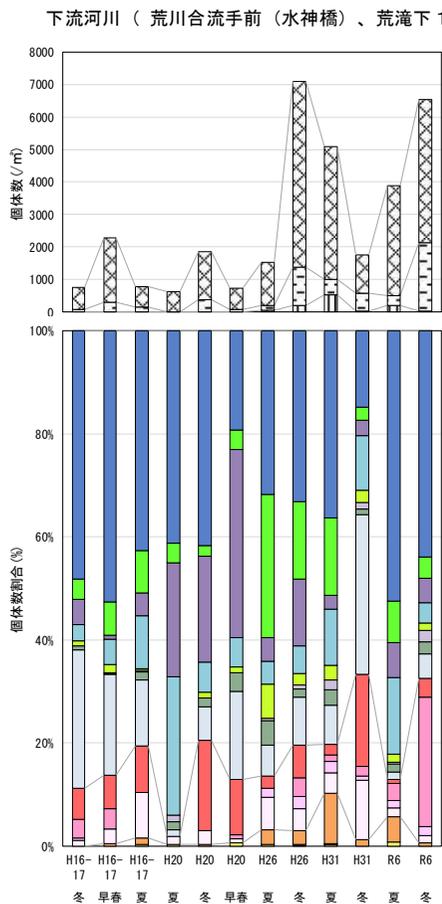
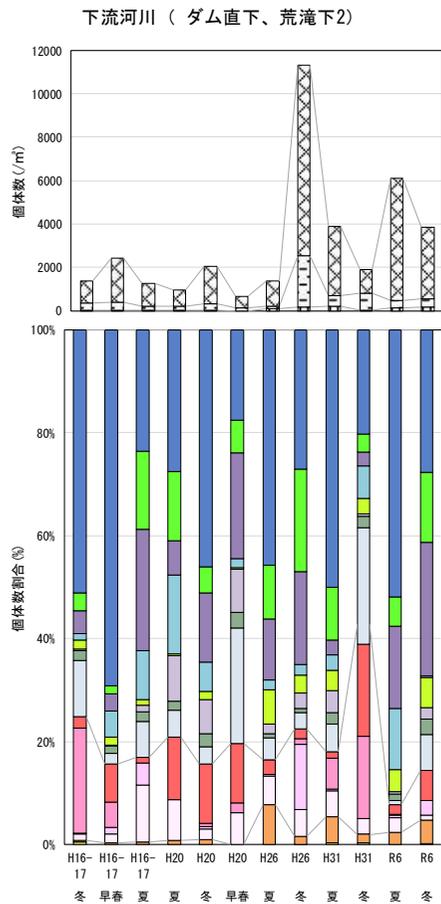
下流河川の河床が浮き石等を利用する魚種の経年変化
(上:種数、下:個体数)

下流河川における優占種群の経年変化

- 個体数は、平成26年度以降は高い値で推移している。
- 夏季優占種群は、コカゲロウ科、マダラカゲロウ科、ヒラタカゲロウ科であった。冬季優占種群は、コカゲロウ科、エリュスリカ亜科、ブユ科であった。
- 個体数割合は年変動があるものの、ハエ目以外の節足動物門が8割程度、ハエ目が2割程度で推移している。



分析対象とした調査地区

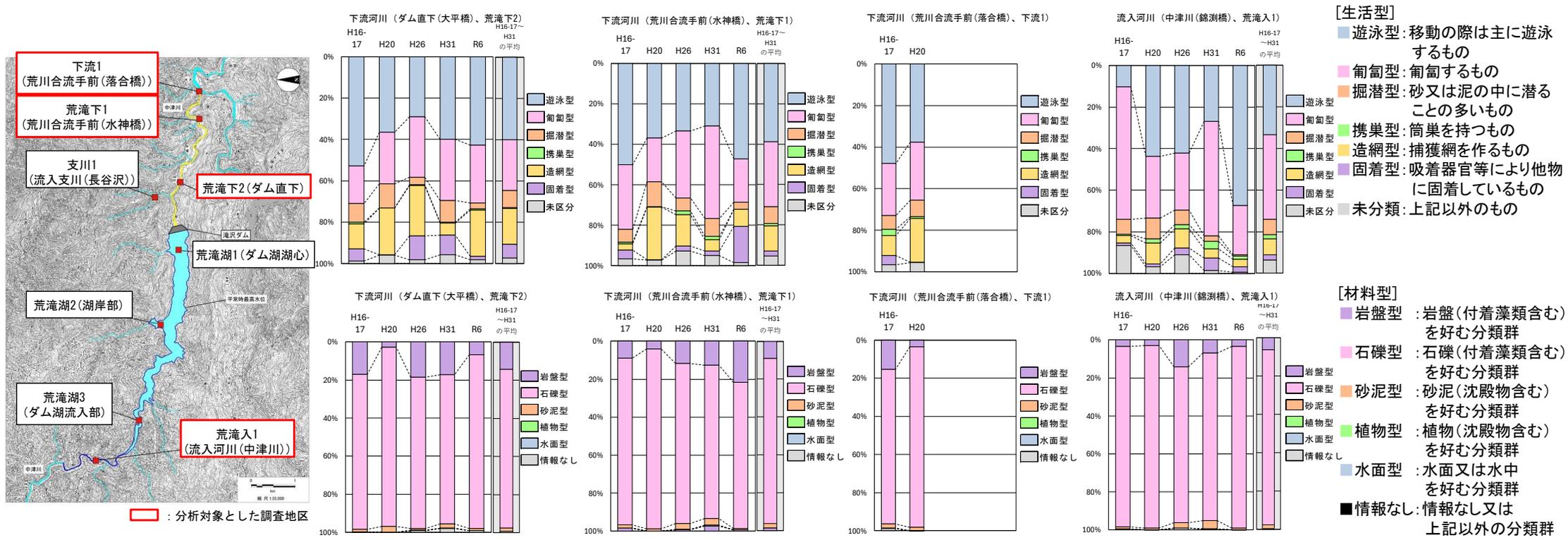


注) 下流河川(荒川合流手前(落合橋)、下流1)地点は平成26年度以降は調査未実施

優占種群の経年変化(下流河川)

生活型及び材料型分類による経年変化

- 下流河川(荒川合流手前(水神橋))の生活型分類では、令和6年度と既往平均の比較で[遊泳型+匍匐型]及び[造網型]とも変化がない。また材料型分類では、令和6年度と既往平均の比較で[岩盤型]及び[石礫型]とも変化がない。
- 流入河川(中津川)の生活型分類では、令和6年度と既往平均の比較で[遊泳型]は増加傾向、[匍匐型]及び[造網型]は変化がない。また材料型分類では、令和6年度と既往平均の比較で [石礫型]及び[砂泥型]とも変化がない。



生活型(上段)／材料型(下段)分類による個体数割合の経年変化

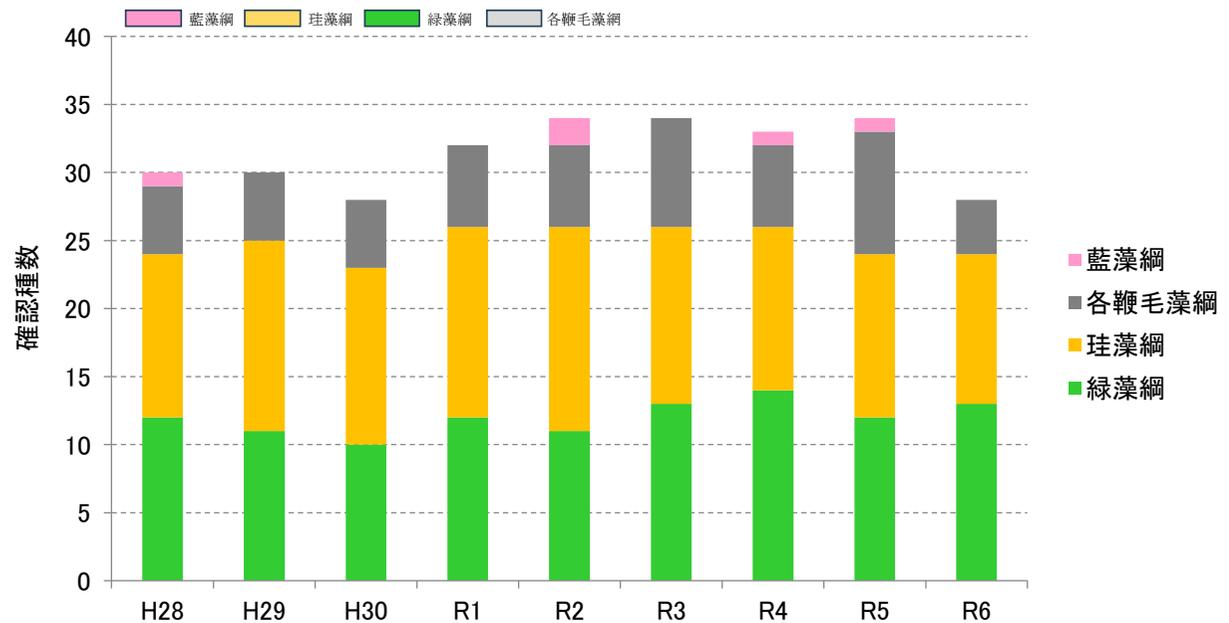
注) 下流河川(荒川合流手前(落合橋)、下流1) 地点は平成26年度以降は調査未実施

プランクトン① 植物プランクトン優占種の経年変化(0.2km地点)

- 植物プランクトンの優占種の経年変化について、令和2年から令和6年までは、珪藻綱の出現個体数が殆どを占める状況であった。
- 確認種数について、経年的に緑藻綱や珪藻綱の確認種数が多く、藍藻綱、各鞭毛藻綱とともに顕著な変化傾向はみられていない。
- 被食-捕食関係にある珪藻綱と輪形動物(次項参照)については、経年的に各増減が概ね等しく推移しているため、輪形動物が珪藻綱を捕食するという標準的で適切な捕食関係があると考えられる。

植物プランクトンの優占種の経年変化

年度	優占種1位			優占種2位			優占種3位		
	種名	細胞数 (/L)	%	種名	細胞数 (/L)	%	種名	細胞数 (/L)	%
平成28年度	その他の小型コアミケイソウ亜目珪藻	3,933,000	24.7%	<i>Achnanthydium</i> 属(広義) ツメケイソウ科	2,811,500	17.6%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	1,918,000	12.0%
平成29年度	その他の小型コアミケイソウ亜目珪藻	5,159,000	61.7%	<i>Fragilaria gracilis</i> イタケイソウ科	1,072,000	12.8%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	574,000	6.9%
平成30年度	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	6,556,000	72.3%	その他の小型コアミケイソウ亜目珪藻	5,502,000	60.7%	<i>Achnanthydium</i> 属(広義) ツメケイソウ科	1,876,000	20.7%
令和元年度	<i>Fragilaria gracilis</i> イタケイソウ科	9,283,200	46.5%	その他の小型コアミケイソウ亜目珪藻	4,483,200	21.8%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	1,847,000	9.3%
令和2年度	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	4,619,900	49.2%	<i>Microcystis</i> (others) ミクロキスティス科	1,500,000	16.0%	<i>Lindavia</i> タラシオシラ科	796,700	8.5%
令和3年度	<i>Fragilaria</i> (others, sensu lato, single cell) その他の <i>Fragilaria</i> 属(広義・単独生活種)	16,020,200	46.2%	<i>Lindavia</i> タラシオシラ科	12,543,800	36.2%	その他の緑色鞭毛藻	2,080,200	6.0%
令和4年度	<i>Lindavia</i> タラシオシラ科	9,388,400	52.6%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	3,330,700	18.6%	<i>Dinobryon</i> ディノブリオン科	2,024,000	11.3%
令和5年度	<i>Lindavia</i> タラシオシラ科	2,694,400	49.2%	<i>Fragilaria</i> (others, sensu lato, single cell) イタケイソウ科	807,900	14.8%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	805,100	14.7%
令和6年度	<i>Lindavia</i> タラシオシラ科	5,678,600	57.2%	<i>Asterionella formosa</i> complex イタケイソウ科	1,313,400	13.2%	<i>Dinobryon</i> ディノブリオン科	771,800	7.8%



ダム湖内における植物プランクトンの分類群別種数の経年変化

※平成28年度の河川水辺の国勢調査マニュアルの改訂により、動植物プランクトン調査の調査頻度や調査方法の変更が行われた。また平成27年度調査より動植物プランクトンの分類体系が大きく変更されたことから、ここでは平成28年度以降調査結果を整理対象とした。

注1) 定期水質調査地点の表層0.5m層のデータを使用した。

注2) 細胞数は令和6年度は4~12月の合計とし、それ以外は年間の総合計とした。また種数は年間の総種数とした。

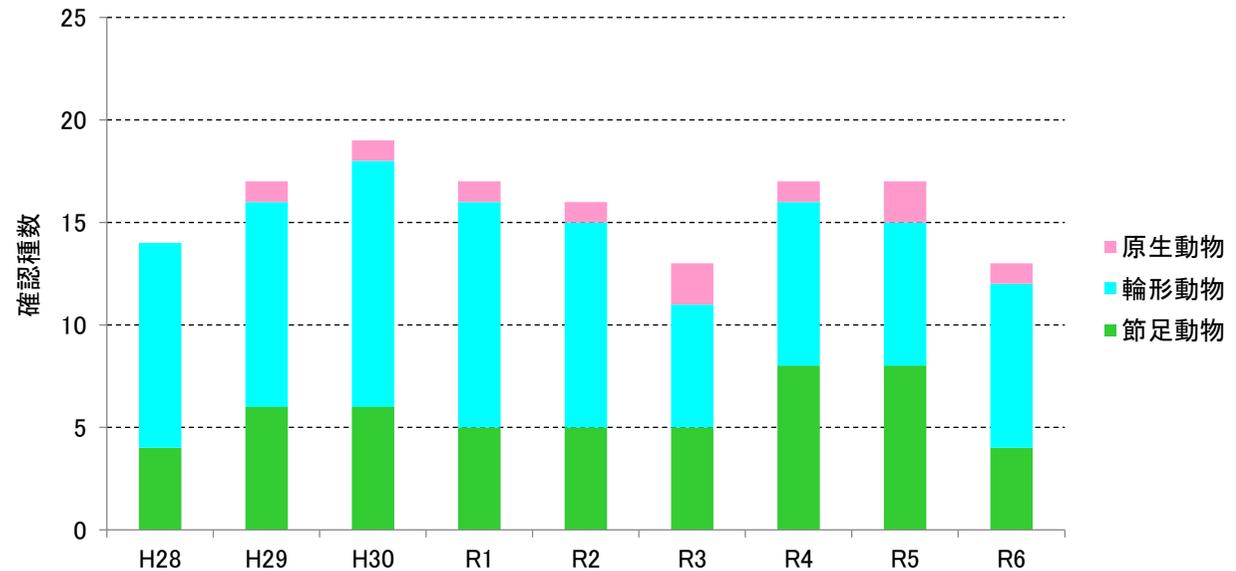
プランクトン② 動物プランクトン優占種の経年変化(0.2km地点)

- 動物プランクトンの優占種の経年変化について、輪形動物の出現個体数が多く確認されている。
- 確認種数について、経年的に輪形動物の確認種数が多く、節足動物、原生動物ともに顕著な変化傾向はみられていない。
- 被食-捕食関係にある珪藻綱と輪形動物(前項参照)については、経年的に各増減が概ね等しく推移しているため、輪形動物が珪藻綱を捕食するという標準的で適切な捕食関係があると考えられる。

動物プランクトンの優占種の経年変化

年度	優占種1位			優占種2位			優占種3位		
	種名	個体数 (/m ³)	%	種名	個体数 (/m ³)	%	種名	個体数 (/m ³)	%
平成28年度	<i>Polyarthra</i> 属 ヒゲワムシ科	406,000	42.7%	<i>Keratella cochlearis</i> ツボワムシ科	334,500	35.1%	<i>Bosmina longirostris</i> ゾウミジンコ科	74,600	7.8%
平成29年度	<i>Tintinnopsis</i> 属 スナカラムシ科	253,300	58.2%	<i>Polyarthra vulgaris</i> ヒゲワムシ科	70,300	16.1%	<i>Bosmina longirostris</i> ゾウミジンコ科	40,000	9.2%
平成30年度	Collothecidae ハナビワムシ科	800,000	37.5%	<i>Polyarthra vulgaris</i> ヒゲワムシ科	574,700	26.9%	<i>Conochilus</i> 属 ヒゲワムシ科	320,000	16.4%
令和元年度	<i>Polyarthra vulgaris</i> ヒゲワムシ科	732,000	62.1%	Collothecidae ハナビワムシ科	200,000	17.0%	<i>Trichocerca</i> 属 ネズミワムシ科	77,400	6.6%
令和2年度	<i>Polyarthra</i> 属 ヒゲワムシ科	910,033	57.0%	<i>Conochilus</i> 属 テマリワムシ科	390,000	24.4%	<i>Synchaeta</i> 属 ヒゲワムシ科	132,100	8.3%
令和3年度	<i>Polyarthra</i> 属 ヒゲワムシ科	665,700	86.5%	<i>Bosmina longirostris</i> ゾウミジンコ科	61,300	8.0%	<i>Tintinnopsis</i> 属 スナカラムシ科	12,270	1.6%
令和4年度	<i>Bosmina longirostris</i> ゾウミジンコ科	81,000	42.8%	<i>Brachionus quadridentatus</i> ツボワムシ科	48,000	25.4%	<i>Daphnia galeata</i> ミジンコ科	398,000	21.0%
令和5年度	<i>Polyarthra</i> 属 ヒゲワムシ科	110,240	55.6%	<i>Daphnia galeata</i> ミジンコ科	28,460	14.3%	<i>Asplanchna</i> 属 フクロワムシ科	12,700	6.4%
令和6年度	<i>Polyarthra</i> 属 ヒゲワムシ科	219,480	42.9%	<i>Daphnia galeata</i> ミジンコ科	97,000	18.9%	<i>Bosmina longirostris</i> ゾウミジンコ科	63,600	12.4%

■ 原生動物 ■ 輪形動物 ■ 節足動物



ダム湖内における動物プランクトンの分類群別種数の経年変化

※平成28年度の河川水辺の国勢調査マニュアルの改訂により、動植物プランクトン調査の調査頻度や調査方法の変更が行われた。また平成27年度調査より動植物プランクトンの分類体系が大きく変更されたことから、ここでは平成28年度以降調査結果を整理対象とした。

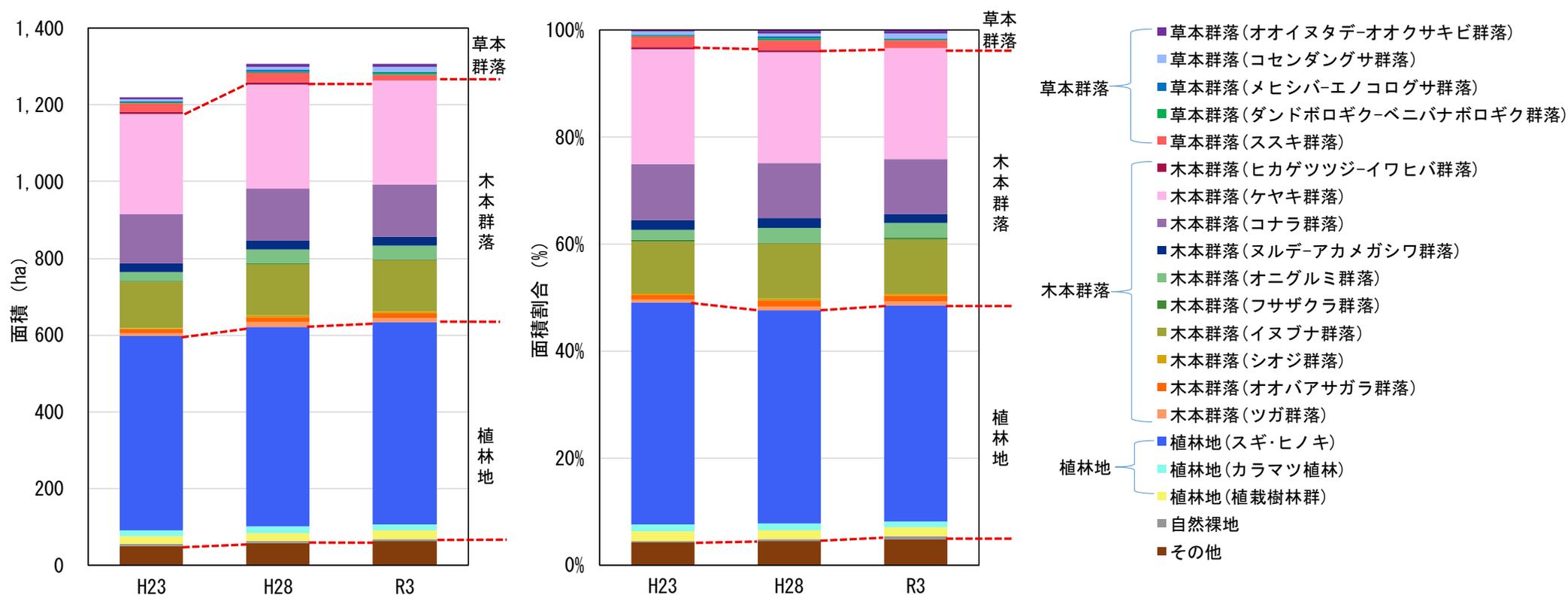
注1) 定期水質調査地点の表層1/4層の種別の細胞数データを使用した。

注2) 細胞数は年間(3季(5月、8月、11月))の総合計とした。種数は年間(3季(5月、8月、11月))の総種数とした。

植物① ダム湖周辺(500mの範囲)における植物群落の経年変化

■ 最新の令和3年度調査において最も割合が高かったのは、スギ・ヒノキ植林で全体の約40%を占めた。次いでケヤキ群落約21%、コナラ群落及びイヌブナ群落が各々約10%となり、植林地と落葉広葉樹林で全体の約8割を占めた。

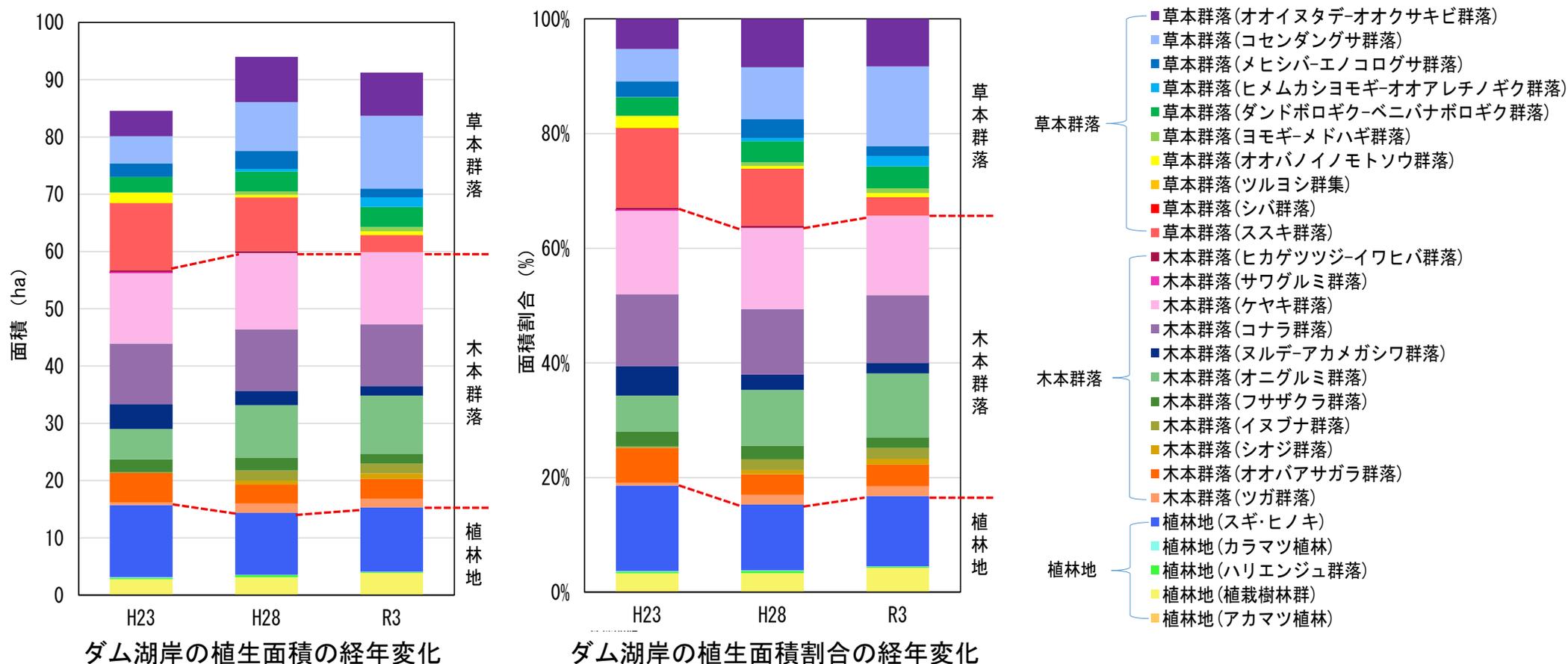
■ 全体の構成種や構成割合に大きな変化はみられなかった。



注1) 開放水面は除外して面積集計した。また、平成23年度と平成28年度及び令和3年度は調査範囲が異なる。

植物② ダム湖岸 (50mの範囲) における植物群落の経年変化

- 最新の令和3年度調査において、最も面積割合が高かったのは木本のケヤキ群落及び草本のコセンダングサ群落で全体の約14%を占めた。次いでスギ・ヒノキ植林及びコナラ群落が約12%を占めた。
- 草本群落では、コセンダングサ群落に増加傾向、ススキ群落に減少傾向がみられる。
- 木本群落では、概ね落葉広葉樹林で占められ、オニグルミ群落に増加傾向がみられるものの、ケヤキ群落及びコナラ群落等の主要な構成種や他の木本に大きな変化はみられない。



ダム湖周辺・流入河川・下流河川における両生類の経年変化

- ダム湖周辺では、源流部でカジカガエルやヒダサンショウウオ、タゴガエルが、また細流部でヤマアカガエルやモリアオガエルが継続して確認されており、これらの生息状況から、周辺の沢地形や林床はやや湿潤な環境にあると考えられる。
- 下流河川では、源流部に生息するカジカガエルや、細流部に生息するアズマヒキガエル、ヤマアカガエルが継続して確認されており、これらの生息状況から、河床の間隙を有する砂礫が維持されていると考えられる。
- ダム湖岸や下流河川では、特定外来生物のウシガエルは平成24年度及び令和4年度調査には確認されていない。

下流河川・ダム湖周辺・流入河川で確認された両生類の経年変化

科名	和名	生息環境区分			生息場所		生息地域 荒川水系	16~17年度 [確認の有無]	21年度 [確認の有無]	平成22年度での [確認個体数/地区]			平成24年度での [確認個体数/地区]			令和4年度での [確認個体数/地区]		
		両源流の類	両細流の類	氾濫原の類	成体	産卵場所				下流河川	ダム湖岸及び周辺	流入河川	下流河川	ダム湖岸及び周辺	流入河川	下流河川	ダム湖岸及び周辺	流入河川
サンショウウオ科	ハコネサンショウウオ	○			地表	全く日光の射さない伏流水の岩	●	○										
	ヒガシヒダサンショウウオ	○			地表	日光の射さない大きな石の下、伏流水	●	○										
	クロサンショウウオ		○		地表	森林が隣接している池や沼や沢の淀み	●				1			1			3	
イモリ科	アカハライモリ		○		水中	水中の草や枯葉	●	○										
アオガエル科	カジカガエル	○			樹上 地表	溪流中の岩石や瀬の転石	●	○		1	12		5	8	16	5	8	62
	シュレーゲルアオガエル		○		樹上 地表	池沼周辺の土中	●	○										
	モリアオガエル		○		樹上 地表	池沼周辺の樹木の枝先	●							8			2	
ヒキガエル科	アズマヒキガエル		○		地表	緩やかに流れる湿地や山道の水たまり	●	○					8			1	1	1009
アマガエル科	ニホンアマガエル		○		樹上 地表	里山の沼や緩やかに流れる湿地	●											
アカガエル科	タゴガエル	○			地表	溪流沿いの伏流水、沢の岩や落葉の下	●						1	1		1		
	ナガレタゴガエル	○			地表 (水中)	溪流の緩やかな流れの淀みや淵	●	○								1		
	ヤマアカガエル		○		地表	河川や沢の弱い流れのある止水	●	○			5	4		586	1		4	
	ツチガエル		○		地表	河川の水草や水中の枝	●	○										
	ウシガエル			○	地表 (水中)	平地の河川やダム湖の水面	●	○		1								



タゴガエル



ナガレタゴガエル

もともと、伏流水の流れる礫の間隙、溪流の淵や水たまり、溪流の岩の下に産卵し、岩の下や空隙の多い石礫間に幼生が生息する種である。
確認されれば、沢地形や溪流において、樹林に覆われた伏流水もしくは流れの速い源流が存在しており、河川において、河床に空隙のある石礫が多い。

もともと、緩やかな流れのある水域の水中にて幼生が生息する種である。
多く確認されれば、山腹の林床において、遅い流れのある水域が存在しており、河川においては、流れの多くが植生に接している緩流となっている。

もともと、氾濫原の代償として水田に生息する種である。
確認されれば、ダム湖岸において、水位操作がたまたま氾濫原の代償となっている可能性があり、河川においては、河道に止水域が多くある。

生息地域：「●」は、荒川水系の水機構ダムのあるいずれかで確認された種

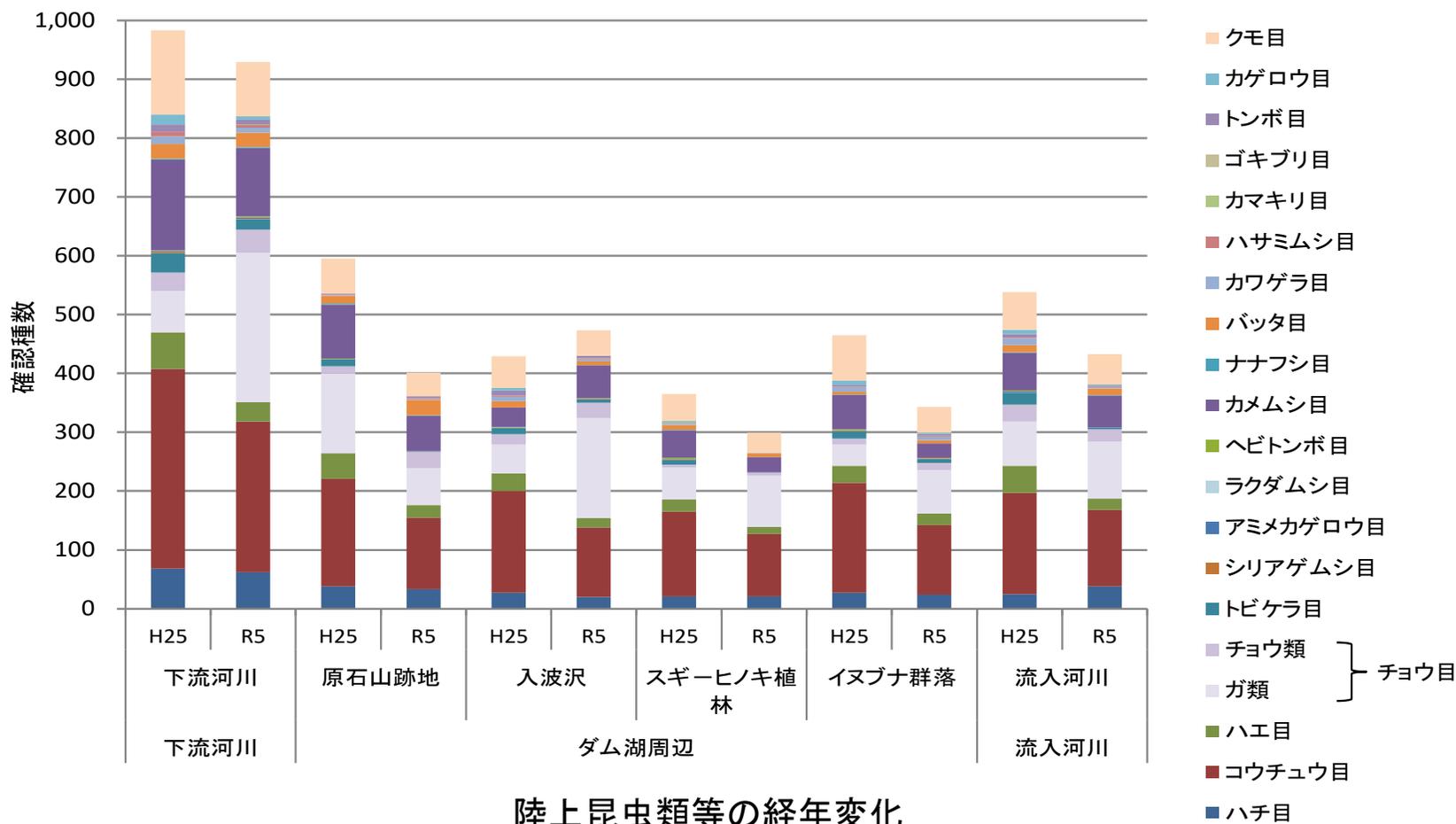
確認個体数：捕獲或いは目撃した成体、幼生、孵化幼生は一個体を、目撃した卵塊は一塊を、鳴き声は発生源一箇所を「確認個体数1」として集計した数値である。
複数の調査地区分を合わせて、地区数で割り、単位を[確認個体数/地区]とした。
なお少数点以下を四捨五入し、0<n<0.5は1とした。

参考：「河川生態学」川那部浩哉、水野信彦 監修、田口勇輝 他執筆、P144~P145、講談社
「野外観察のための日本産両生類図鑑第3版」関慎太郎 著、松井正文 監修、緑書房
「決定版 日本の両生爬虫類」内山りゅう、前田憲男 他著、平凡社
「カエル・サンショウウオ・イモリのオタマジャクシハンドブック」松井正文 解説、関慎太郎 写真、文一総合出版

調査地区：下流河川 ~ 荒滝下1、荒滝下2
(令和4年度) ダム湖岸及び周辺 ~ 荒滝湖4、荒滝周3、荒滝周4、荒滝周5、荒滝他3、荒滝他4、荒滝他5
流入河川 ~ 荒滝入1

各調査地区における陸上昆虫類等の経年変化

- 河川水辺の国勢調査マニュアル改訂後に実施された平成25年度調査と令和5年度調査を比較すると、入波沢を除き確認種数は減少傾向であった。
- 減少していた主な分類群のうち、コウチュウ目にはオサムシ科・ハネカクシ科等の地表徘徊性の種群や、ハムシ科・オトシブミ科等の植物食性の種群を含んでいることから、林床環境が変化した可能性がある。



環境保全対策 希少猛禽類保全対策

- コアエリア(高利用域)にダム湖が含まれ、ダム事業による環境変化に最も関連の深いクマタカ α つがいでは、工事中の繁殖成功は確認されなかったが、ダム供用後の15ヵ年では繁殖成功率が33.3%となっており、クマタカの繁殖成功率の全国平均(33.2%) [出典:日本鳥学会誌64(2):195-206,2015年1月]と同等であった。
- ダム供用後は全国的に確認されているクマタカの繁殖成功率と同等の繁殖成功率となっており、当該地域では安定したクマタカの生息環境が保たれているものと考えられる。

クマタカ α つがいの繁殖成功率

ダム建設事業段階	工事中 (H9～H16:8ヵ年)			試験湛水中 (H17～H21:5ヵ年)			ダム供用後 (H22～R6:15ヵ年)		
	繁殖成功回数	調査回数	繁殖成功率	繁殖成功回数	調査回数	繁殖成功率	繁殖成功回数	調査回数	繁殖成功率
α つがい	0	8	0.0%	1	5	20.0%	5	15	33.3%

- 平成9年以降毎年実施してきたクマタカの流域個体群を把握する猛禽類調査を令和7年で終了し、今後は河川水辺の国勢調査(鳥類調査)に移行する。猛禽類調査の結果を踏まえた河川水辺の国勢調査(鳥類調査)について、学識者の助言を受けながら検討していく。

生物のまとめ①

生物5-7

■ 魚類は、ダム湖内にはダム湛水前から河川に生息する在来種のウグイ等のほか、放流魚のワカサギも継続して確認されている。流入河川及び下流河川では、ダム湛水前の魚種が継続して確認されている。さらにサンフィッシュ科のような外来魚は、確認されていない。以上より魚類の生息環境に大きな変化はみられない。

生物8-9

■ 底生動物は、優占種の個体数割合については年変動があるものの、ハエ目以外の節足動物が8割程度、ハエ目が2割程度で推移している。下流河川では、生活型分類及び材料型分類ともに変化がない。流入河川では、生活型分類に年変動がみられたものの、材料型分類では変化がない。

生物10-11

■ 植物プランクトンは、緑藻綱や珪藻綱の確認種数が多く、また動物プランクトンは、輪形動物の確認種数が多く、経年的に顕著な変化傾向はみられていない。経年的な増減の傾向から、輪形動物が珪藻綱を捕食する標準的で適切な捕食関係が継続していると考えられる。

生物12-13

■ 植物は、ダム湖周辺(500mの範囲)における木本群落は、大きな変化がみられない。ダム湖岸(50mの範囲)における在来草本のススキ群落の減少傾向がみられる。

生物のまとめ②

生物14-15

■ 両生類は、源流や細流に生息する種が維持されている。爬虫類・哺乳類では、水辺に生息する種は増加傾向、湿地、草地や林床、樹上や樹洞等に生息する種は概ね維持されている。

生物16

■ 陸上昆虫類等は、入波沢を除き確認種数は減少傾向であった。減少していた分類群には、コウチュウ目のオサムシ科・ハネカクシ科等の地表徘徊性の種群や、ハムシ科・オトシブミ科等の植物食性の種群を含んでいることから、林床環境が変化した可能性がある。

生物18-19

■ 希少猛禽類は、平成9年以降、クマタカの流域個体群が存続しており、今後も生息が継続していくと考えられる。

【今後の方針】

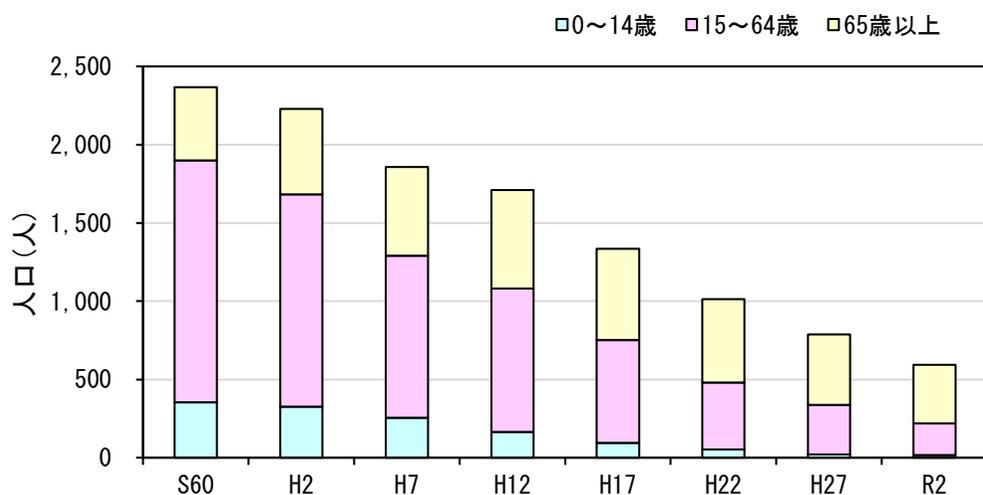
- 河川水辺の国勢調査マニュアルに基づいた全体傾向や経年状況の把握のための生物調査を引き続き実施していく。
- 平成9年以降毎年実施してきたクマタカの流域個体群を把握する猛禽類調査を令和7年で終了し、今後は河川水辺の国勢調査(鳥類調査)に移行する。猛禽類調査の結果を踏まえた河川水辺の国勢調査(鳥類調査)について、学識者の助言を受けながら検討していく。

ダム地域の社会環境

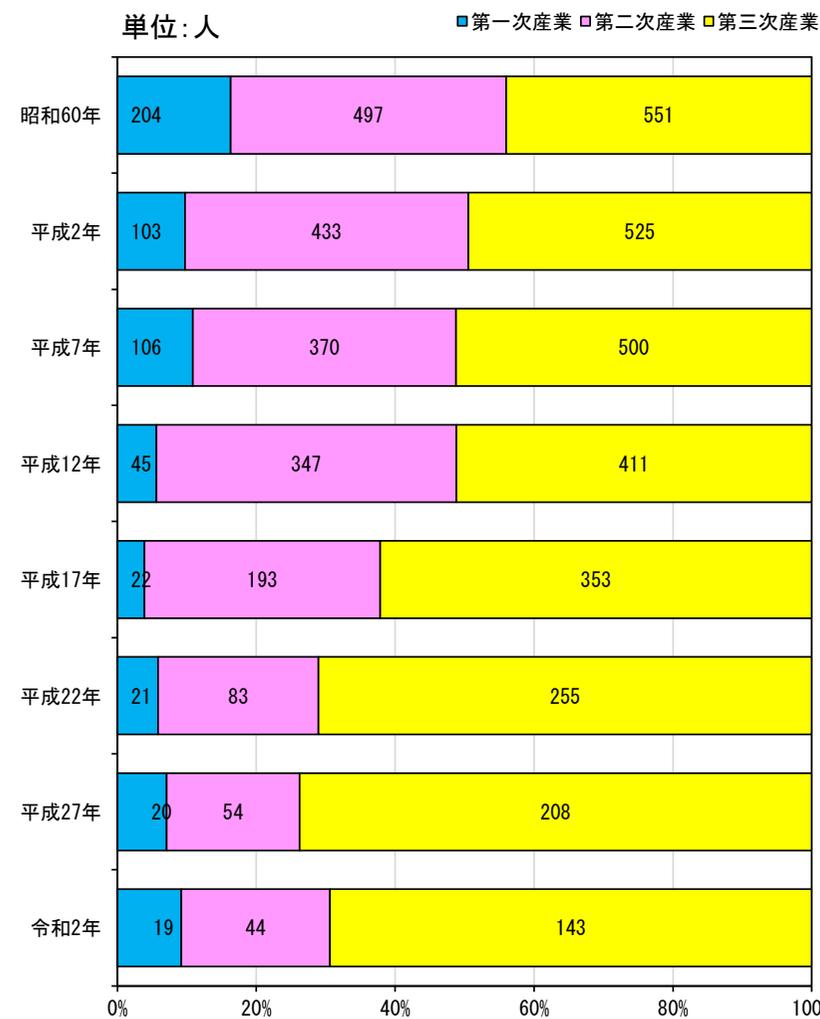
水源地域動態1

- 滝沢ダムの水源地域である旧大滝村の人口は、減少傾向であり、少子高齢化が進行し、令和2年における65歳以上の高齢者が人口の約63%を占めている。
- 産業就業別人口割合は、第三次産業の割合が増加傾向となっている。

◆水源地域(旧大滝村)の3階級別人口



◆水源地域(旧大滝村)の産業別就業人口

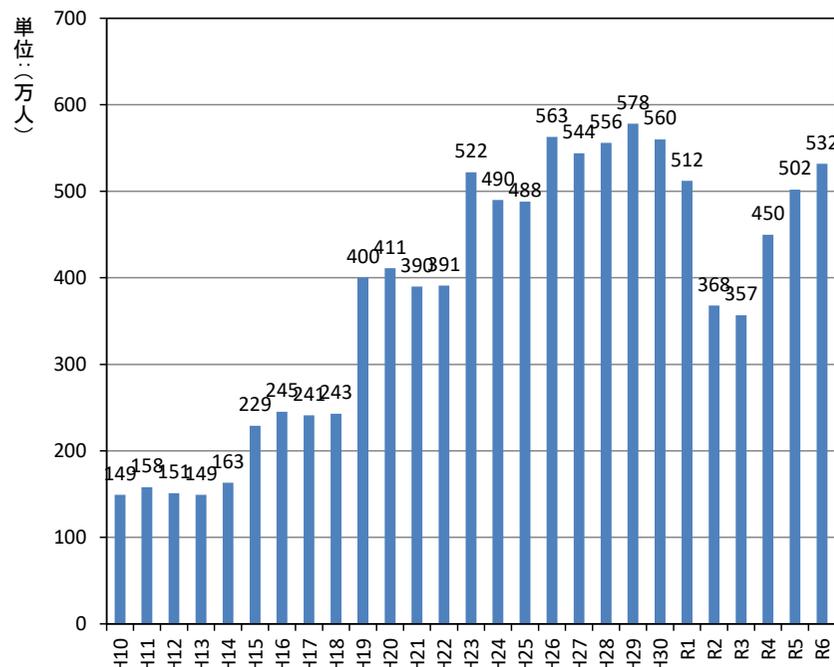


- 滝沢ダム周辺には、多くの滝やジオパーク秩父、中津川峡などの自然景観を楽しむ名所が存在する。
- 観光入込客数は、令和2年度以降、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により減少したが、その後、徐々に回復傾向にある。



秩父市内ガイドマップ

出典: 秩父観光ナビ



注) 平成19～30年は合併後の新秩父市のデータ

出典: 平成30年浦山ダム定期報告書(H19以前)、埼玉県HP(H20-R6)

秩父市の観光入込客数の推移

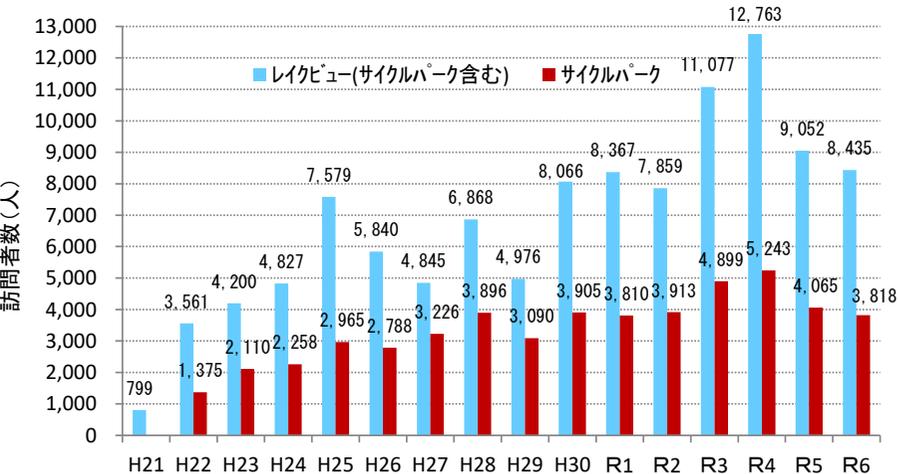
水源地域周辺の観光(2)

水源地域動態3

- 滝沢ダム周辺には、レイクビューハウス内に併設されたダム資料館、秩父滝沢サイクルパーク、滝ノ沢望郷広場、浜平望郷広場、塩沢望郷広場等があり、散策や施設利用の他、スポーツを目的とした来訪者が多い。
- レイクビューハウス及びサイクルパークの利用者数は、平成21年度以降、増加傾向となっている。



◆レイクビューハウス及びサイクルパークの訪問者数



レイクビューハウス



滝沢ダム資料展示室



秩父滝沢サイクルパーク



滝ノ沢望郷広場



浜平望郷広場



塩沢望郷広場

休憩施設

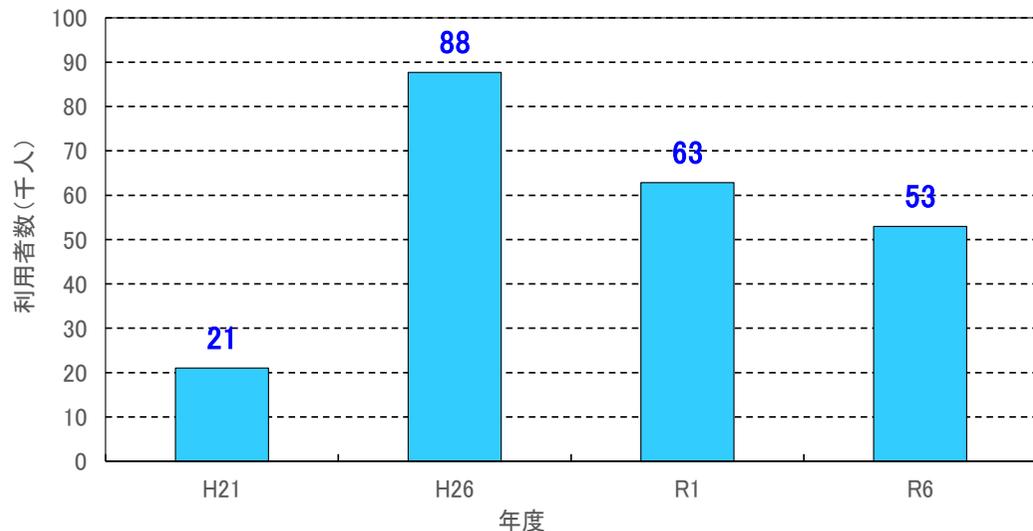
全景

全景

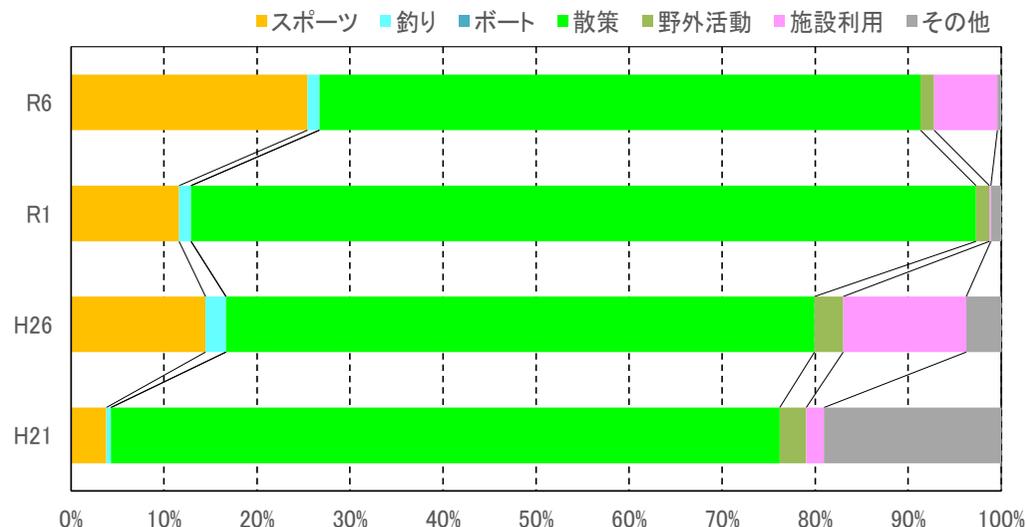
■ 滝沢ダムにおける年間利用者数は、令和6年度(ダム湖利用実態調査)において約5万3千人となっている。利用形態別にみると、散策、スポーツが多い結果となった。

■ アンケート調査の結果、80%以上の方が「満足」、「まあ満足」という結果であった。

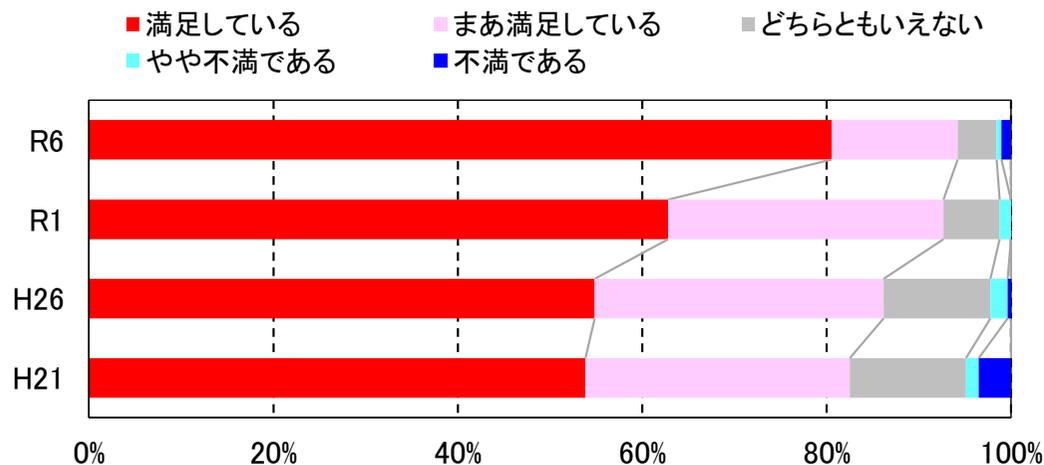
◆年間利用者数の推移



◆利用形態別年間利用者の推移



◆アンケート調査結果(満足度の推移)



◆主な意見・要望(令和6年度調査結果)

<「満足」・「まあ満足」の理由>

- ・景色が良い、景観が良い。ループ橋からの景色に感動した。
- ・施設が充実している。
- ・BMXコースの設備が整っている。
- ・景色が綺麗。ループ橋とダムの景観が良かった。
- ・道が綺麗に整備されており、バイクのツーリングで走りやすい。
- ・BMXコースが良く、周辺ではここにしか無い。
- ・野生のシカが見られて良かった。
- ・ダム内部まで入れるのが良かった。
- ・駐車場が広くて、トイレを利用できるのが良い。

<「不満」・「やや不満」の理由>

- ・放流が定期的にあると良い。
- ・トイレが汚い、故障している。直してほしい。
- ・バードウォッチングができる施設があると良い。
- ・周辺に宿泊施設、食事処や売店など増やして欲しい。

水源地域ビジョン(1)

■ 荒川ダム水源地域ビジョン

- ・荒川ダム水源地域ビジョンは、滝沢ダムの完成に合わせて、隣接する二瀬ダムと連携して平成16年3月に策定された。
- ・平成20年9月「秩父4ダム連携検討会」を正式に立ち上げ、秩父地域の1市4町及び関係機関の賛同を得て、「荒川ビジョン推進協議会」が平成29年2月に新たに設立された。
- ・荒川ビジョン推進協議会では、荒川流域の活性化と地域住民の交流等を推進するための活動として、助成事業を活用した取り組み、上下流交流、各種勉強会、大学との連携等を実施している。ダム管理者として、本協議会事務局と一体となって取り組みを進めている。
- ・「秩父4ダム」では、上下流交流として「4ダム探検隊が往く！」を実施している。

※秩父4ダム：浦山ダム・滝沢ダム・二瀬ダム・合角ダム

新たな荒川ビジョンの組織体系について

- 組織運営について
 - ・荒川ビジョン推進協議会を母体とした、ダム周辺地域毎の自由な発想と独自性を生かした活動に期待し、大滝推進協議会、浦山推進協議会、合角推進協議会を発足した。
 - ・荒川源流地域のすべての自治体(1市4町)をメンバーとした。
- 運営資金について
 - ・トンネル焼酎の保管料及び各種助成金等を充てる。
- 事務局
 - ・NPO法人「森」が事務局を担当する。



過去に例のない源流地域全体を巻き込み地域に根付くビジョンとして再スタート

荒川ビジョンの組織体系

◆「秩父4ダム探検隊が往く！」の実施状況

秩父4ダム探検隊が往く！

令和6年7月27日(土)開催



二瀬ダム
国土交通省
管理開始から33年



浦山ダム
独立行政法人 水資源機構
管理開始から25年



合角ダム
「水の国」さいたま市 埼玉県
管理開始から27年



滝沢ダム
独立行政法人 水資源機構
管理開始から16年

水はどこから来るのか？
川はどこから流れているのか？
秩父は、荒川・隅田川の源です。そこには大切な水を守りみなさんの生活を支え、暮らしをおびやかす洪水からみなさんを守っている4つのダムがあります。
秩父4ダムを巡りながら、秩父の自然、文化に触れ、水について考えてみませんか。

全体説明



滝沢ダムでの説明



浦山ダムでの見学



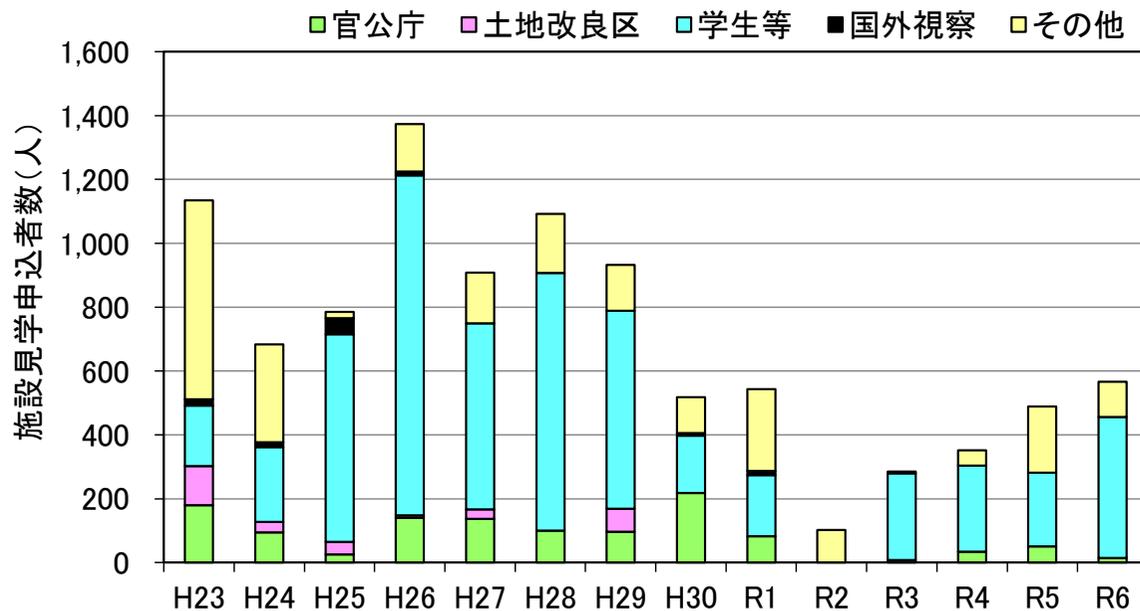
二瀬ダムでの説明



合角ダムでの見学

- 地元の小中学校等の事前申込による滝沢ダム施設見学の見学者数は、令和元年までは年間530～1,400人であったが、令和2年は新型コロナウイルスの感染拡大による行動制限のため減少したものの、その後徐々に回復し令和6年には566人であった。滝沢ダム施設見学では、防災教育やダムの役割について説明を行った。
- イベント関係では、令和2年以降、新型コロナウイルスの感染拡大による行動制限により、中止や規模縮小があったが、「さいたまの水と森ふれあい体験」、「親子放流体験会」が開催されている。
- 毎年開催していた「奥秩父大滝紅葉まつり」の代替えとして、規模を縮小した「光岩園地イベント」も開催されている。

◆ 滝沢ダム施設見学者数の推移



親子放流体験会

さいたまの水と森ふれあい体験
での滝沢ダム見学会奥秩父大滝紅葉まつり
パンフレット

- 奥秩父もみじ湖では、湖面利用としてワカサギ、ヤマメ等の釣りの利用も多い。
- 荒川ダム総合管理所のホームページ等で、湖面利用のルール等の情報を発信している。



釣り

＊奥秩父もみじ湖のご利用について＊

(奥秩父の自然を守るために)

奥秩父もみじ湖での船舶の利用は、ご遠慮いただいております。

- ＊奥秩父もみじ湖(滝沢ダム)及びその周辺は、国立公園特別地域であり豊かな自然が残されています。
- ＊この貴重な自然が将来世代に渡って維持され引き継がれていくよう、ご協力・ご理解をお願いします。
- ＊また、湖面へ船舶を安全に浮かべるための進入路等はありません。

立入禁止区域等

- ＊ダム近傍網場内及び上流貯砂ダム周辺は法律により、立入禁止区域となっています。
- ＊車の駐車については、現地看板記載の決められた場所をお願いします。



奥秩父もみじ湖(滝沢ダム貯水池)遊漁区域図

奥秩父もみじ湖の利用案内の公開(荒川ダム総合管理所HP)

広報活動

- 滝沢ダムでは、ダムを紹介した動画をYouTubeにて発信している。この動画のナレーションは、ちちぶエフエム(株)のパーソナリティーによるものであり、地域愛にあふれた内容となっている。
- ダムの効果や魅力を分かりやすく伝えるため、ホームページやX(旧Twitter)を通じてダムやその周辺に関する情報を配信している。

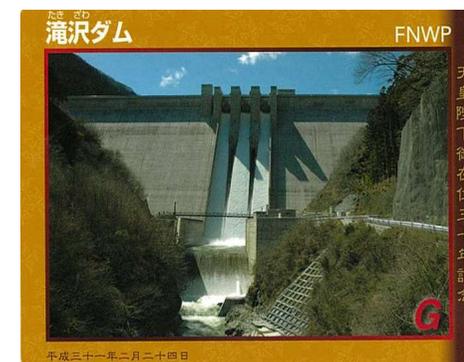
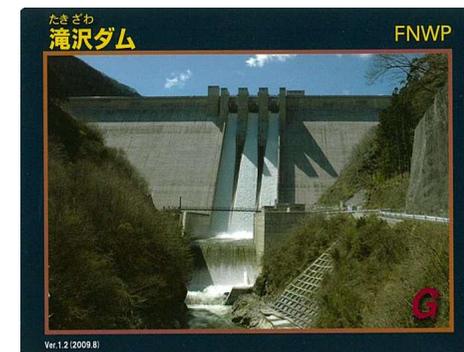
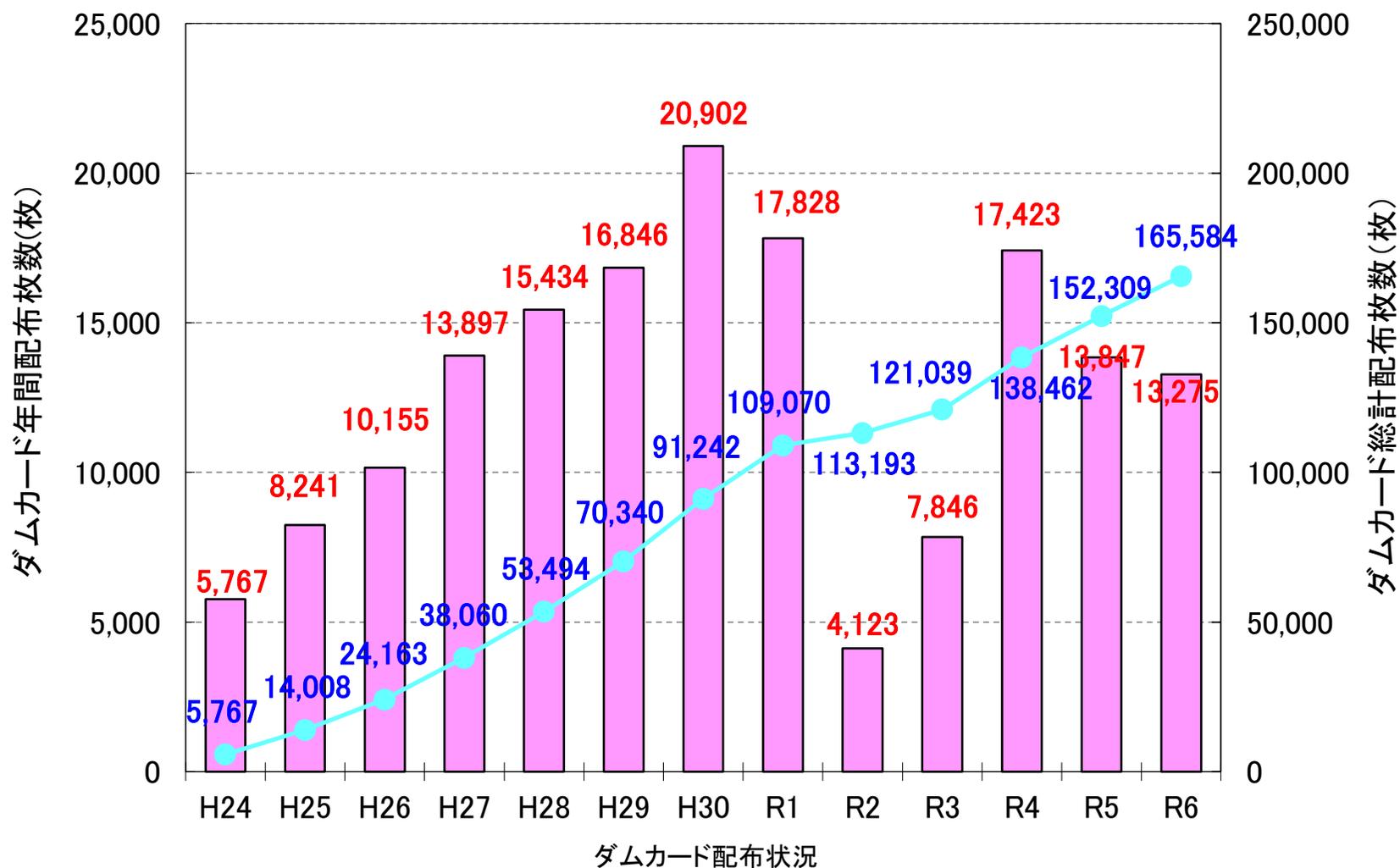


ダムの紹介動画(YouTube)



X(旧Twitter)を通じた情報配信

- 見学者、管理所来訪者に1枚/人限りで「ダムカード」を配布している。
- 平成24年度の配布開始から現在まで、特別カード(天皇陛下在位30周年、ダム管理開始10周年記念)を含めて約16万6千枚を配布した。令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で配布枚数が減少しているが、徐々に回復傾向にある。



ダムカード総計配布枚数(枚)

水源地域動態のまとめ

- ダム水源地域の人口は減少傾向である。また、産業就業別人口割合では第三次産業の割合が増加傾向となっている。
- ダム湖周辺にはレイクビューハウス、秩父滝沢サイクルパーク、滝ノ沢望郷広場、浜平望郷広場、塩沢望郷広場等があり、散策や施設利用の他、スポーツを目的とした来訪者が多い。
- 荒川ダム水源地域ビジョンは、荒川ビジョン推進協議会を発足し、上下流交流、各種勉強会等を実施しており、ダム管理者としても本協議会事務局と一体となった取り組みを進めている。地元の小中学校等の滝沢ダムの施設見学を継続実施しており、防災教育やダムの役割の説明を行っている。
- YouTubeやホームページ、ダムカードの配付等でダムの魅力や役割等の理解促進に積極的に取り組んでいる。

水源地域動態1

水源地域動態2

水源地域動態3

水源地域動態4

水源地域動態5

水源地域動態6

水源地域動態7

水源地域動態8

水源地域動態9

【今後の方針】

- 水源地域の動態やダム湖周辺の利活用状況等の把握を引き続き実施していく。
- 水源地域の活性化のため、荒川ビジョン推進協議会の活動をはじめ、「地域に開かれたダム」として積極的に地域交流に取り組み、今後も引き続き連携強化を推進していく。